

京都市内遺跡試掘調査概報

平成3年度

京 都 市 文 化 観 光 局

序

京都は恵まれた自然環境の中で1200年の歴史を織り込み、日本ばかりでなく今や世界の人々を引き付ける魅力ある都市に発展いたしました。

平安京の造営以来、美しい自然を守り育て、文化を創造し、幾多の試練を乗り越えながら着実な歩みを続けてきましたが、時代のうつり変りと共に、それらの多くは地上から姿を消し、埋蔵文化財となって地中に深く眠っております。

現在の市街地には、原始時代から平安遷都以前の埋蔵文化財をはじめとし、平安京跡を中心とするそれ以降の文化遺産が多く存在しています。

これらの埋蔵文化財も最近の著しい都市の再開発によって、重大な転機をむかえようとしています。

私達の生活をより心豊かなものとする上で、かけがえのない価値を有する埋蔵文化財をできるだけ保存し後世に伝えていくことは、現在の私達に課せられた大切な責任であると考えます。

本書は、京都市が平成3年度に文化庁の国庫補助を得て実施した、埋蔵文化財調査報告書であります。調査の実施は平成2年度の立会調査、試掘調査、発掘調査並びに平成3年度の立会調査、発掘調査につきましては、(財)京都市埋蔵文化財研究所に本市が委託したものであり、平成3年度の試掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターが直接調査したものであります。

おわりに、調査に協力頂いた市民の方々及び御助言頂いた方々に心から感謝しますと共に、本報告書が皆様方に役立てられる事を期待しております。

平成4年3月

京都市文化観光局

例 言

- 1 本書は、平成3年1月11日から12月25日まで京都市内遺跡で実施した、文化庁国庫補助を伴う試掘調査に関する概要報告書である。

試掘調査は、平成3年3月末日（平成2年度末）までは（財）京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施してきたが、平成3年度より京都市埋蔵文化財調査センターが直営で実施することになったため、現場調査は、平成3年1月11日から3月29日を（財）京都市埋蔵文化財研究所が担当し、新年度の平成3年4月15日から12月25日までを京都市埋蔵文化財調査センターが担当し実施した。

- 2 試掘調査及び本書作成にあたっては下記の京都市埋蔵文化財調査センター職員が分担担当した。

玉村登志夫・梶川敏夫・長谷川行孝

北田栄造（現、京都市文化観光局文化財保護課）

- 3 （財）京都市埋蔵文化財研究所の試掘調査現場担当者は以下のとおりである。

本 弥八郎・久世康博・小松武彦・吉本健吾・川村雅章・龍子正彦・尾藤德行

- 4 本書掲載の写真は、上記センター文化財保護技師が分担担当したが、一部の遺構、遺物の写真（21、26～29）は（財）京都市埋蔵文化財研究所の村井伸也氏の協力を受けた。

- 5 実測図で位置の記載のあるものは、京都市遺跡発掘調査基準点より求めた平面直角座標系VIによる。標高はT.Pを使用している。

- 6 本書に使用した地図は、京都市都市計画局発行の都市計画基本図（1/2,500）を複製して調整したものである。また土壌観察については『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を基準として使用している。

- 7 試掘調査を実施した現場の主な内容については、まとめて一覧表に掲載している。なお試掘調査で重要遺構が検出され、発掘の指導を行って調査を実施したものについては、発掘調査概報に委ねるものとし、本書では報告しないものとする。それ以外の試掘調査で特に成果のあったものについては、その概要を本書で報告している。

また本報告書の中で、その他の調査「平安京右京五条二坊十五町跡」については、平成2年11月に調査を実施したものであるが、その成果については未発表であるため、本書紙面をもって概要を報告する。

8 遺物整理にあたっては以下の方々の協力を得た。

丸山裕見子・北浦みか

そのほか試掘調査現場や遺物整理において多くの(財)京都市埋蔵文化財研究所職員諸氏の協力を受けた。記して感謝の意を表す。

鈴木久男・長宗繁一・本 弥八郎・鈴木廣司・上村和直・吉崎 伸・菅田 薫・前田義明・辻 裕司・南 孝雄・岡田文男・出口 真・辻 純一・宮原健吾・幸明綾子・本田憲三

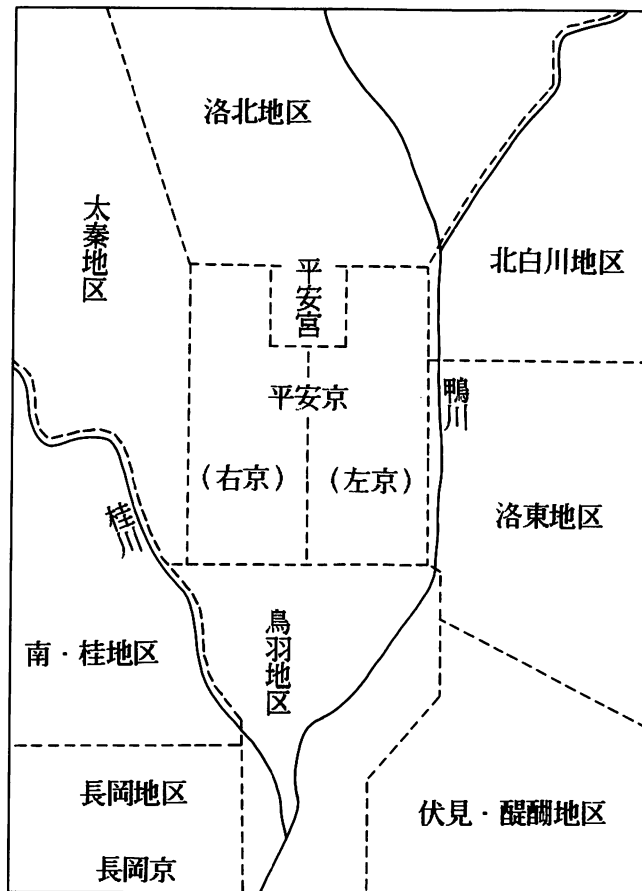


図1 調査区割図

目 次

I 試掘調査の概要	1	VI 鳥羽離宮跡	31
II 平安京右京五条三坊五町跡	4	1 調査経過	31
1 調査経過	4	2 遺 構	31
2 遺 構	5	3 遺 物	32
3 遺 物	6	4 井戸枿材の観察	33
4 まとめ	9	5 まとめ	33
III 平安京左京六条三坊七町跡	12	VII 中久世遺跡	38
1 調査経過	12	1 調査経過	38
2 遺 構	12	2 遺構・遺物	38
3 遺 物	13	3 まとめ	41
4 まとめ	13	VIII その他の調査	45
IV 白河街区跡	14	平安京右京五条二坊十五町跡	45
1 調査経過	14	1 調査経過	45
2 遺 構	15	2 遺 構	47
3 遺 物	16	3 遺 物	52
4 まとめ	17	4 まとめ	54
V 成勝寺跡（六勝寺の一寺院）	19		
1 調査経過	19		
2 遺 構	22		
3 遺 物	28		
4 まとめ	29		

図版目次

- 図版1 平安京図葉分割図
- 図版2 平安宮復元図
- 図版3 平安宮
- 図版4 右京北辺・一・二・三条・三・四坊
- 図版5 右京北辺・一・二・三条・一・二坊
- 図版6 左京北辺・一・二・三条・一・二坊
- 図版7 左京北辺・一・二・三条・三・四坊
- 図版8 右京 四・五・六・七条 三・四坊
- 図版9 右京 四・五・六・七条 一・二坊
- 図版10 左京 四・五・六・七条 一・二坊
- 図版11 左京 四・五・六・七条 三・四坊
- 図版12 右京 八・九条 三・四坊 左京 八・九条 一・二坊
- 図版13 右京 八・九条 一・二坊 左京 八・九条 三・四坊
- 図版14 西野町遺跡・広隆寺旧境内・植物園北遺跡・北白川廃寺・白川街区・岡崎遺跡
- 図版15 法成寺跡・深草坊町遺跡・深草寺跡・六波羅政庁跡・向島城跡・中臣遺跡
- 図版16 鳥羽離宮跡・下鳥羽遺跡
- 図版17 中久世遺跡・長岡京跡

挿 図 目 次

図1	調査区割図……………例言	図21	土器実測図……………28
図2	平安京条坊図（調査位置）……………4	図22	調査地位置図……………31
図3	調査地位置図……………4	図23	トレンチ配置図……………31
図4	調査地付近見取図……………5	図24	井戸実測図……………32
図5	1.2トレンチ土層図……………6	図25	土器実測図……………32
図6	遺物実測図……………8	図26	井戸部材実測図……………36
図7	平安京条坊図（調査位置）……………12	図27	井戸部材実測図……………37
図8	調査地位置図……………12	図28	調査地位置図……………38
図9	トレンチ配置図……………13	図29	調査区設定図……………39
図10	3トレンチ西壁土層図……………13	図30	A調査区東壁土層図……………39
図11	土器実測図……………13	図31	遺構実測図……………40
図12	調査地位置図……………14	図32	竪穴住居1実測図……………41
図13	調査地平面図……………15	図33	平安京条坊図（調査位置）……………45
図14	土器実測図……………16	図34	調査地位置図……………45
図15	調査地位置図……………19	図35	調査地付近見取図……………46
図16	調査地付近見取図……………20	図36	遺構実測図……………47
図17	遺構実測図……………23	図37	調査区北壁土層図……………49
図18	西トレンチ東壁土層図……………25	図38	軒瓦，平瓦拓影・実測図……………53
図19	東トレンチ西壁土層図……………26	図39	土器実測図……………55
図20	軒瓦拓影……………28		

表 目 次

表1	平成3年の試掘調査内訳表……………3
表2	井戸枠の樹種鑑定……………33
調査一覧表	……………58～63

写真目次

写真1	2トレンチ洲浜検出状況（東から）	7
写真2	洲浜跡（東から）	7
写真3	洲浜部分（上方から）	7
写真4	洲浜下で検出した木材（東南から）	10
写真5	洲浜下の木材（洲浜の護岸用の土止めか）	10
写真6	1トレンチ全景（北から）	18
写真7	2トレンチ全景（北から）	18
写真8	1トレンチで検出した井戸跡（南半掘削状況）西から	18
写真9	西トレンチ全景と勸業館（西北から）	21
写真10	西トレンチ全景（南から）	21
写真11	中央で検出した東西の二本の溝跡（上から）	21
写真12	西トレンチの二本の溝跡全景（東北から）	24
写真13	遺物出土状況（西トレンチ南半の西）	24
写真14	東トレンチ全景（東から）	27
写真15	東トレンチ（西から）	27
写真16	東トレンチの整地層（左下の黒い部分）東から	27
写真17	1トレンチ全景（南から）	34
写真18	2トレンチ全景（西から）	34
写真19	井戸全景（西から）	34
写真20	井戸枠取り上げ作業（東から）	34
写真21	遺物写真（井戸枠に転用されていた建物部材）	35
写真22	A調査区作業風景（西北から）	39
写真23	調査前全景（南から）	42
写真24	西試掘トレンチ全景（北から）	42
写真25	東試掘トレンチ全景（北から）	42
写真26	A調査区全景（北から）	43
写真27	竪穴住居1（北から）	43

写真28	竪穴住居1の中央土壙（北から）	44
写真29	溝4（北東から）	44
写真30	B調査区全景（南から）	44
写真31	建物跡西側に沿って検出した石と遺物（焼け炭片を含む）北から	48
写真32	完掘状況（南から）	48
写真33	石及び遺物の検出状況（北から）	50
写真34	石及び遺物の検出状況（南から）	50
写真35	邸宅の内溝跡と築地（東から）	50
写真36	中央東端で検出した礎石（南から）	50
写真37	溝跡全景（西へ折れ曲がる部分）南東から	51
写真38	南北溝跡と溝内の木杭（南から）	51
写真39	杭部分（北から）	51
写真40	杭部分（上方から）	51

I 試掘調査の概要

1. 調査の概要

京都市では、一般の埋蔵文化財包蔵地内で実施される一定規模以上の土木工事や、平安宮跡・鳥羽離宮跡などの重点遺跡内の小規模工事などに先だて、遺跡の残存状況を掌握するための事前試掘調査を、昭和54年度より本格的に実施し指導してきたところである。

平成2年度まで試掘調査は(財)京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施させてきたが、平成3年度からは、京都市埋蔵文化財調査センターが直営で試掘調査を実施することとなった。

報告は年度をまたがって平成3年1月初旬から12月末までの1年をまとめたものであるが、今回は、平成3年1月から3月末までを(財)京都市埋蔵文化財研究所が、それ以後年末までを京都市埋蔵文化財調査センターが、それぞれ担当して報告するものである。

平成3年における試掘調査の件数の総数は89件で、その実施場所の遺跡別内訳は次のとおりである。

(1) 1月初旬から3月末まで(京都市埋蔵文化財研究所実施分)

平安宮跡(3)・平安京右京跡(6)、平安京左京跡(4)・広隆寺旧境内(1)・仁和寺院家跡(1)・中臣遺跡(1)・鳥羽離宮跡(2)・長岡京跡(1)

(以上7遺跡小計19件)

(2) 4月初旬から12月末まで(京都市埋蔵文化財調査センター実施分)

平安宮跡(10)・平安京右京跡(19)、平安京左京跡(14)・西野町遺跡(1)・広隆寺旧境内(1)・植物園北遺跡(1)・北白川廃寺(1)・六勝寺跡及び白河街区跡(4)・法成寺跡(1)・六波羅政庁跡(1)・深草坊町遺跡(1)・深草寺跡(1)・向島城跡(1)・鳥羽離宮跡(3)・下鳥羽遺跡(1)・中久世遺跡(3)・長岡京跡(7)

(以上16遺跡小計70件)

2. 各地区の調査概要

平安宮地区

平安宮跡内の大炊寮・大膳職・西雅院・応天門・酒殿釜所・中務省・中和院・朝堂院・

内裏桂芳坊・民部省・率分蔵（聚楽第跡を含む）などの推定地13件を調査した。

13件のうち9件については、江戸期から現代にかけての攪乱があり、また工事計画が小規模なものや、基礎掘削の浅いものなども含まれ、発掘調査に至らないものが多い。

顕著な遺構としては、大極殿の東方にある中務省付近で検出した、塼を使った排水溝がある。発掘調査を実施したところ、同省を囲む築地の北西コーナーを検出し、平安宮復元に重要な基準となる遺構の発見となった。また付近からは遺物包含層や路面とみられる遺構もみついている。そのほか大炊寮跡推定地からは弥生時代の南北溝も検出された。

平安京右京地区

平安京右京跡では25件の調査を実施した。右京地区は湿地や池、流れ堆積など遺構が検出されず発掘調査に至らないものも多いが、各所で平安京条坊の大路、小路の側溝跡や遺物包含層を検出し、遺構面が単純で比較的浅いのが特徴である。特筆されるものとしては、五条三坊五町跡（No.40）で検出された寝殿造り建物遺構及び洲浜遺構がある。

この遺構は計画建物基礎が浅く、遺構が保存されるため本発掘調査は実施していないが、平安時代前期の遺物を伴う池跡と洲浜（池汀）跡、それに陸部では掘立柱建物跡などが検出され、付近には前期寝殿造り建物跡（推定）及び園池跡が、良好に残存する可能性のあることが判明している。

平安京左京地区

平安京左京跡では18件の調査を実施した。多くの場所で中世の遺構や遺物包含層がみついている。全体的には地表下1～2mで室町から鎌倉期の土壌や遺物包含層を検出している箇所が多く、平安時代から中世にかけての遺構が良好に残存している場所については、発掘調査を指導した。また多くの場所では各時代の包含層が重複して存在し、井戸の掘り方などによって遺構が切り合い、複雑な土層を呈する場所が多い。

太秦地区

広隆寺旧境内・仁和寺院家跡・西野町遺跡など4件を試掘調査し、うち3件が発掘調査を指導した。広隆寺旧境内に含まれる右京消防署の敷地からは、飛鳥から奈良時代の溝・竈跡・柱跡・土壌などがみつきり発掘調査を指導したが、平安時代の多量の土師器とともに、金銅製小仏像がほぼ完形で出土し、大きな成果をあげる結果となった。

洛北地区

この地区では植物園北遺跡を1件調査した。一部に平安時代以降の柱穴や土壌を検出したが、全体的に遺構は稀弱で発掘調査には至っていない。

北白川地区

ここでは北白川廃寺を1件調査した。調査地は既往の調査で確認されている塔跡のすぐ南東の敷地で、地表下1m余りで遺構面を検出したため発掘調査を指導した。発掘調査では溝跡・土壌などを検出し合わせて多くの瓦が出土している。

六勝寺跡では法勝寺跡（動物園内）、成勝寺跡（勸業館内）の2件の調査を実施。成勝寺跡からは平安時代後期の整地面を確認し、土師器や軒瓦が出土した。また2件実施した白河街区跡の1件からは、平安時代後期の井戸跡1基が見つかり多数の土師器が出土した。

洛東地区

中臣遺跡と六波羅政庁跡の2件を調査したが、いずれも有力な遺構検出はできなかった。

鳥羽地区

この地区では、鳥羽離宮跡5件と下鳥羽遺跡1件の調査を実施した。鳥羽離宮跡からは平安時代後期の離宮関係のほか、中世の井戸跡などの遺構が見つかり、設計変更で遺構を保存したのものも含まれる。

真幡木町48（No.54）の調査では、有力な遺構は検出されなかったものの、鎌倉期頃とみられる井戸跡1基を検出した。井戸枠は離宮建物の柱材や扉材などを転用したとみられる立派なもので、内部から鳥羽離宮跡では初めて瓦器質の香炉の身と蓋が出土している。

南・桂地区

ここでは中久世遺跡を3件調査した。うち2件は遺構の確認できない沼地や流路跡であったが、1件については古墳時代の柱穴を多数検出し、一部延長して調査（No.49）を実施し住居跡や土壌を検出した。

長岡京地区

この地区では長岡京跡を8件調査した。湿地状の土地で遺構が検出されない箇所も多いが、夔川町189番地（No.66）の現場からは、既往の調査で検出していた東二坊大路西側溝を改めて検出し、合わせて長岡京期の遺物が出土したため発掘調査を指導している。

（梶川敏夫）

表1 平成3年の試掘調査内訳表

	平安宮	右京	左京	その他	合計	発掘指導	設計変更
件数	13	25	18	33	89	16	4

II 平安京右京五条三坊五町跡 No.40

1. 調査経過

調査場所は京都市右京区西院太田町26-1で、佐井西通りと高辻通り交差点西南にある工場（由利ロール株式会社）敷地内である。

平安京の条坊では右京五条三坊五町跡に当たり、付近で行われた既往の調査状況から、重要遺構が発見される可能性があるため、工場増築工事に先だって試掘調査を実施したものである。

これより以前、西南隣接地において、工場建設に先だって行われた試掘調査（平成2年

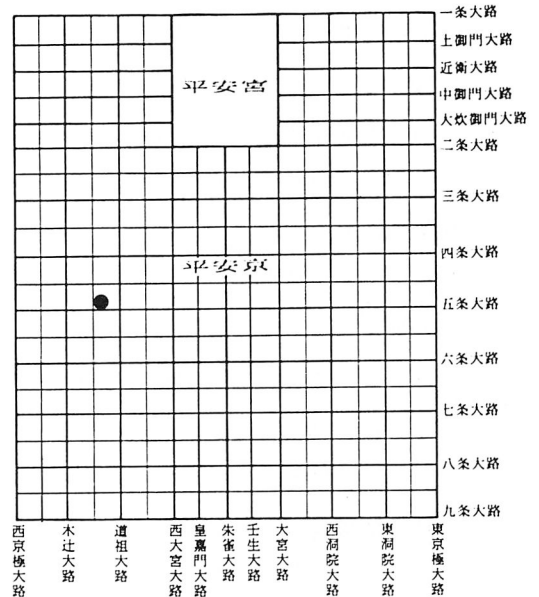


図2 平安京条坊図（調査位置）



図3 調査地位位置図（京都市都市計画基本図〔西京極〕部分使用、1/5,000）

11月26日に(財)京都市埋蔵文化財研究所が実施^{注1})では、工事場所の中央から西方にかけての地表下1 m余りで、平安時代掘立柱建物跡を検出し、さらに東方では池跡が確認された。この調査結果から、当該地近辺には、平安時代前期の遺構が良好に残存する可能性のあることが予想されたため、遺構の保存を施工主に要請し、その結果、施工主側が基礎掘削深さの設計変更を行って遺構の保存を図り、工事着工させた経緯がある。

今回の工事計画は、先の調査結果から、当初より建物の基礎掘削深さを浅くして設計されていたが、地表下の浅い場所に重要遺構が存在することも危惧されたため、事前に試掘調査を実施したものである。

2. 遺 構

今回の建物は、前回建設された建物の東と北辺にL字形に工場を増築する形で工事が行われることから、先の試掘結果を踏まえて、南北方向に第1トレンチ、東西方向に第2トレンチを設定し、さらに補足として第3・4トレンチを追加して調査を行った。

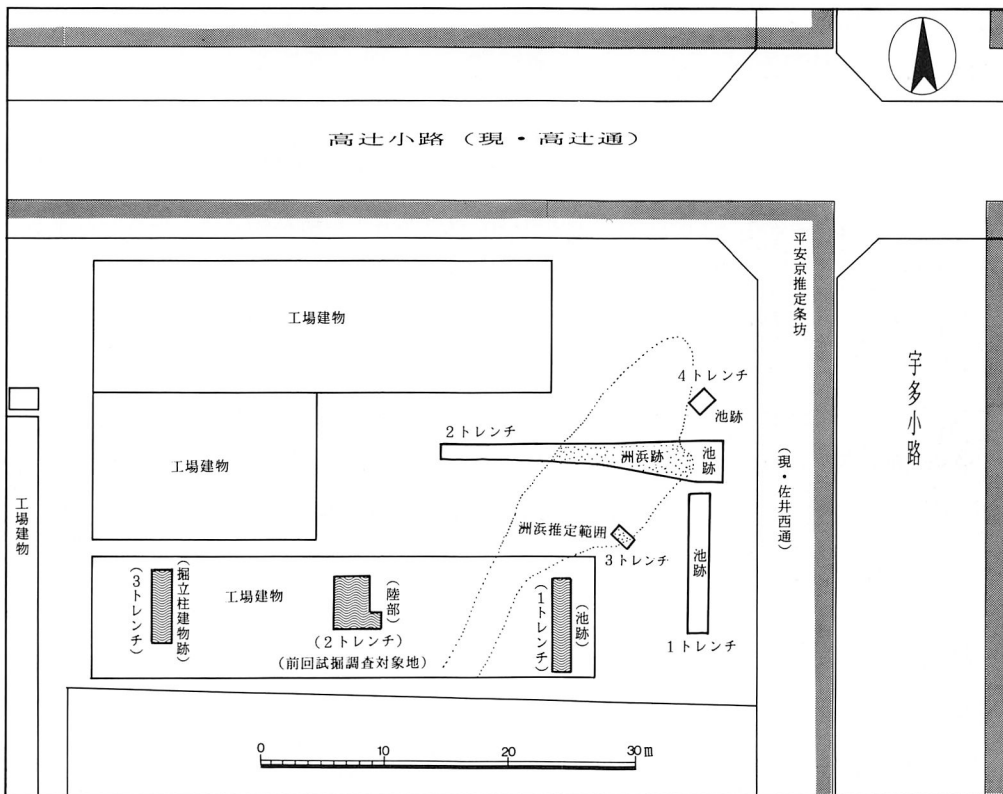


図4 調査地付近見取図 ()内は前回試掘トレンチ

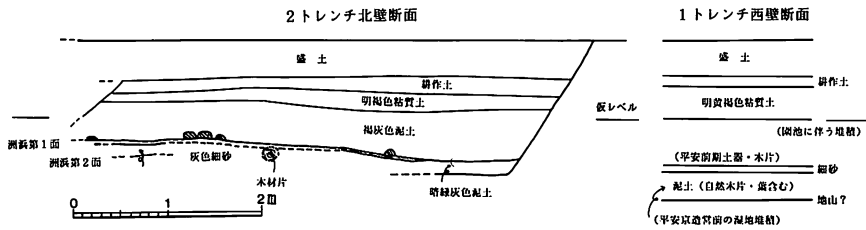


図5 1・2トレンチ土層図

工事場所の南北方向に設けた第1トレンチ（東西1.5m、南北11.4m）は、地表下0.4mまでは盛土、それ以下10～20cmに旧耕作土がある。耕作土下は床土とみられる明黄褐色粘質土があり、その下層の地表下0.8～1.3mに平安時代前期の遺物を包含する褐灰色泥土層（池状堆積）が存在し、前回の調査で確認している池跡が、さらに東方に続いて存在することが判明した。その下層は薄い細砂をはさんで約30cmの厚さに緑黒泥土（平安時代の遺物を含まない）があり、その下地表下1.7m余りで明緑灰色シルト層の地山となる。

地山上に存在する緑黒泥土には、木片や葉などの植物遺体を多く含み、平安京造営前はこの付近が湿地であったことを示している。細砂をはさんで上層に堆積する約50cmの池状の泥土層には、平安時代前期の瓦や須恵器、土師器、緑釉陶器などの遺物を含み、前回の試掘結果と同じく、近辺に建物や園池に関する遺構の存在を窺わせるに足るものである。

第1トレンチ北端から西方向へ直角に設けた第2トレンチ（東西23.7m、南北1.1～3m）東側の地表下1.2mで、拳大から20cm角ほどの河原石を敷いた洲浜状の遺構が検出され、合わせて平安時代前期に遡る多くの遺物が出土した。

洲浜とみられる遺構は、トレンチ東端底から西へ約1mのところから3mほど西に向けて緩やかに高くなってゆき、全体では東西幅約6mが確認できる。それより西方の陸部とみられるところは、近世の攪乱があり、建物跡などの検出はできなかった。

最初に検出した洲浜表面の灰色砂層の下には、厚さ10cmほどの黒褐色泥土があり、その下層にも洲浜状遺構の存在が認められ、庭園の修築、改修を物語っている。

3. 遺物

遺物はほとんどが洲浜跡から陸部にかけて出土したもので、池跡内堆積土からも若干量出土している。

(1)瓦類…8点（軒丸瓦1，軒平瓦1，丸瓦4・平瓦2）

軒丸瓦（図6-1）は、瓦当部約1/5を残す破片で、珠文部から周縁部にかけて文様がわず



写真1 2トレンチ洲浜検出状況（東から）



写真2 洲浜跡（東から）



写真3 洲浜部分（上方から）

かに残っている。文様は珠文が2個と圏線，周縁内側に鋸歯文が一部残るものの，全体の文様形式は不明である。焼胎焼成は良好で旧都から平安京へ搬入された瓦である。

軒平瓦（図6-2）は，文様面中央部から左に幅9cm，平瓦へかけて15cmほどを残す破片で曲線顎をもつ。文様は中心側文の先が巻き込んで種子状となり，一葉蕨手左右3転式とみられる。蕨手は直線的で先端で急に巻き込む特徴があり，上下外区に珠文を配す。顎部から平瓦部にかけてはやや荒いナデによる調整が認められる。胎土焼成は良好，色調は褐灰色からやや赤っぽい感じを受ける。

昭和48年に平安博物館が行った平安宮推定民部省跡の発掘調査^{注2}で出土した軒瓦に，これと同文の瓦があり，その報告では平安時代後期の軒平瓦の一群に含めておられる。また『平安京古瓦図録』^{注3}では，東大阪市の法通寺出土瓦と同範とみられることや出土状況から平安中期に遡る可能性を指摘されている。

今回の調査では，出土遺物のほとんどが平安前期から中期に属し，出土した他の軒丸瓦からも後期に含めるには問題があり，平城宮6755形式に近い大和の瓦の可能性もある。

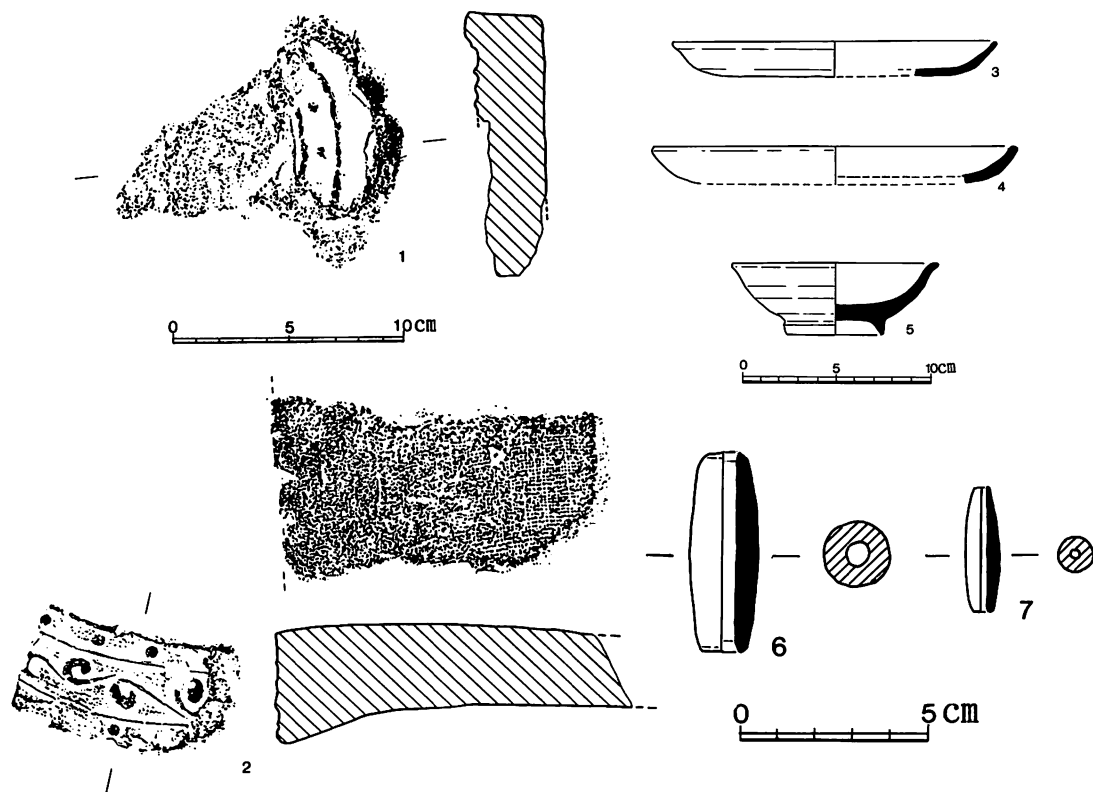


図6 遺物実測図（①②瓦類、③④土師器、⑤灰釉陶器、⑥⑦土錘）

(2)土器類

土師器 (図 6-3,4)…椀・皿・杯・高杯などの小破片が494点出土したが、実測できるものは少ない。中に平安時代前期の9世紀代前半に遡るとみられる、ケズリ手法を主体とするものも多いが、薄くて口縁部からS字に湾曲する小皿もあり、10世紀後半に属するようなものも若干含まれる。そのほか黒色系の土器も数点出土した。

須恵器…椀・鉢・壺・甕などの破片が90点ほど出土している。中には水甕の破片とみられる大形のものも含むが復元できるものはない。

灰釉陶器 (図 6-5)…壺・長頸壺の破片などが15点以上出土した。図に掲載したものは口縁直径11cm、器高4cmの小型椀で、取付け高台で口縁がやや外反し、椀の内面に灰釉が良好に発釉する。

緑釉陶器…いずれも椀の小破片ばかりが17片が出土し、平底5点と高台のあるもの1点がある、土壌の影響かほとんどが銀色化している。

(3)その他の遺物

土錘 (図 6-6,7)…洲浜と池内の泥土からそれぞれ1点ずつ計2点出土している。土師器質で中央を円形の穴が貫通する。

6…池状堆積の褐灰色泥土内から出土した。片側端の一部が斜めに欠損している。長さ5.3cm・中央幅1.8cm・穴の直径0.6cmほどで胎土均一で荒く、色、質とも土師器に酷似する。

7…は洲浜から出土。長さ3.4cm、中央幅1cm、穴の直径0.25cmほどの小さいもので、片側の先端が一部欠損するものの原形をよくとどめている。焼成はやや堅く灰褐色を呈する。

なお同じ敷地で行った前回の試掘調査では石包丁が出土していることから、付近に弥生の集落が存在していた可能性もある。

4. ま と め

今回の調査場所は平安京右京五条三坊五町に当たるが、邸宅の主は不明である。敷地は北を高辻小路(東西)、東を宇多小路(南北)に接し、条坊地割りでは邸宅内の北東付近を調査したことになる。

検出した遺構は園池跡(洲浜及び池)で、平安時代前期から中期にかけての邸宅内の推定寝殿造建物に伴うものと解される。



写真4 洲浜下で検出した木材（東南から）



写真5 洲浜下の木材（洲浜の護岸用の土止めか）

先に行われた南西隣接地の試掘調査では、東のトレンチから池跡が、中央トレンチ地表下1.1mの地山の面からは、一辺0.5～0.6mの柱穴、溝跡、土壙などを検出している。また西側のトレンチからは、一辺0.6mほどの柱穴2基を検出し、柱間寸法は2.4mであることが判明している。このように西方で掘立柱建物跡の一部を検出していることから、東方が池、西方が陸となって、陸部にはいくつかの建物が存在していたであろうことは想像にたたくない。

今回検出した洲浜跡は、部分的ながら先の試掘調査結果と、今回の調査及び補足の第3・4トレンチの状況から、三坊五町の邸宅内北東から南西の斜めに、洲浜が存在する可能性がある。また使用されている大ぶりの河原石などから、園池は相当立派なものであったと考えられ、邸宅の位置からみて、寢殿前面にある池に注ぐための、北東から南西にかけての遣水部分を検出した可能性も考えられる。

推定寢殿造りに伴う園池の存在は、付近に河川や湧水池など水源の存在が必要である。

これについては、池状堆積の下層にある自然遺物を含む堆積層の存在から、付近は平安京の造営前から低湿地とみられ、池は元からあった湿地を改修または掘り直して設けることも可能である。また水源については、当該地より一町分東にある道祖大路には、既往の調査結果から、大路の東半（幅9m以上）が佐井川となっていることが明らかとなっており、それより導水すれば池の水源の確保は可能となる。

いずれにしても調査結果から、当該地付近には平安時代前期から中期にかけての寢殿造り建物及び洲浜を有する園池が良好に存在する確率は極めて高いことが明らかとなった。

また当該地は出土遺物から、平安遷都からほどなく邸宅が設けられ、10世紀後半頃まで存続していたことが知れ、平安京右京の変遷をよく物語っている。

今回は、工場建物の基礎設計変更等により、遺構は建築建物の下に保存されることとなったため発掘調査は実施していない。

(梶川敏夫)

注1 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成2年度 京都市文化観光局

注2 戸田秀典・松井忠春「平安宮推定民部省跡の発掘調査」(『平安博物館研究紀要』第6輯、財団法人古代学協会) 昭和51年

注3 『平安京古瓦図録』平安博物館編 雄山閣出版 1977年

III 平安京左京六条三坊七町跡 No.62

1. 調査経過

調査地は京都市下京区室町と新町の間、五条上る小田原町244他に位置し、烏丸五条交差点から西へ約200m、五条通の北側に面した所で、平安京左京六条三坊七町跡に該当する。

平成3年9月11日に試掘調査を行い、六条坊門小路の路面と北側溝を検出した。

2. 遺構

1 トレンチ (南北約1.5m, 東西約10m)

トレンチの大半は、中世の土壌などによって地山が削平されている。地山がGL-1.6m程度で残る所が僅かにあった。

2 トレンチ (南北約2m, 東西約9.5m)

トレンチの西半部は、近世の瓦溜によって地山が深く削平されているが、東半部では中世の遺物包含層を認めた。

3 トレンチ (南北約5m, 東西約1.5m)

トレンチ南端部のGL-0.6m以下で六条坊門小路の路面と北側溝の一部を検出した。路面の厚さは約0.7mあり幾層にも堆積し、下層は平安時代である。この平安時代の路面に伴う側溝は、北半部を近世の瓦溜によって削平されているものの、多くの土器を含んでいる。調査では、その一部を掘り下げ遺物を採取した。

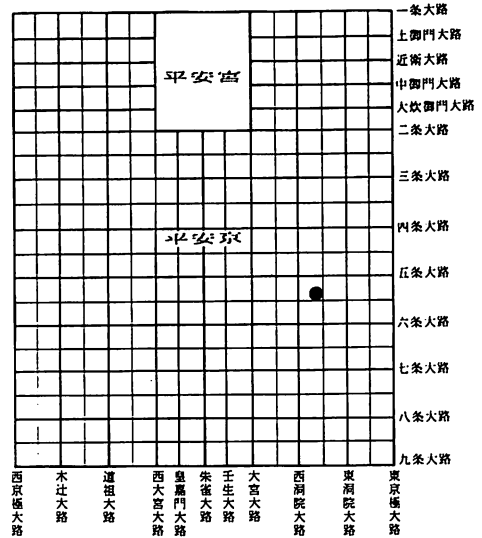


図7 平安京条坊図 (調査位置)

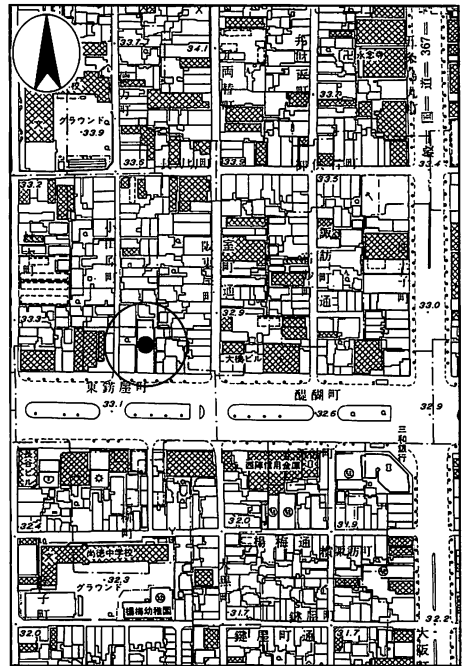


図8 調査地位置図(基本図[五条大橋]1/5,000)

3. 遺物

図11に示した土器は、いずれも3トレンチの北側溝から採集した土師器である。

1～5・7・8は皿である。1の口縁部はゆるく外反し、口縁端部は斜め上方に軽くつまむ。調整は底部外面をオサエ、口縁部内外面を横ナデ、底部内面をナデ調整する。口径8.2cm、器高1.4cm。2～4の口縁部は強く外反し、端部を上方へかるくつまみ上げる。調整は1と同じ。口径8.6～9.4cm、器高1.1～1.3cm。5の口縁部は斜め上方へ直線的に立ち上がり、端部は丸く納める。調整は1に同じ。7の体部は内湾気味に立ち上がり口縁部は上下二段の横ナデによって外反する。口径14.2cm。8の体部はゆるく立ち上がり、口縁部は外反する。底部から体部にかけて外面はオサエ、口縁部は横ナデ、体・底部内面はナデ調整を施す。口径14.6cm、器高2.9cm。

蓋6の宝珠は乳頭状を呈し、天井部はやや内湾し、端部は外反気味である。天井部外面はヘラケズリ、他は横ナデを施す。胎土は精良で、灰白色を呈する。口径10.2cm、器高2.8cm。

4. まとめ

平成2年度に当敷地の東隣接地で発掘調査を行い、平安時代から江戸時代に至る六条坊門小路の路面と側溝を検出しており、当敷地においてもこれらの遺構が良好に残存していることを確認した。

(長谷川行孝)

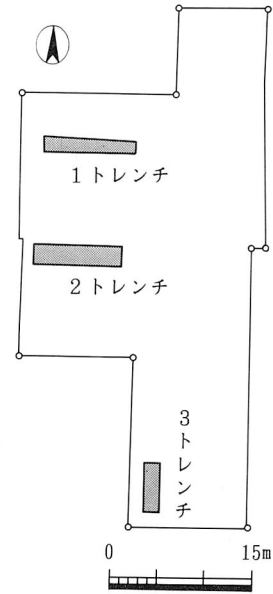


図9 トレンチ配置図(1/800)

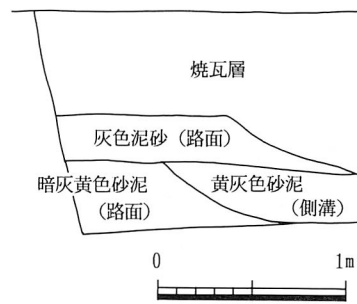


図10 3トレンチ西壁土層図(1/40)

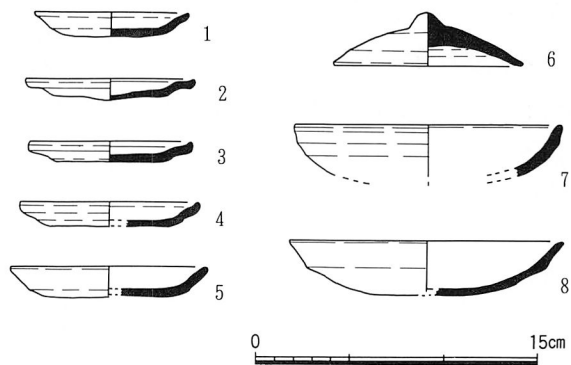


図11 土器実測図(1/4)

IV 白河街区跡 No.20

1. 調査経過

調査場所は、丸太町通りから一筋北にある春日北通りと、東大路通りとの交差点北東角の南北に長い敷地（743㎡）である。住所は京都市左京区聖護院西町10番地で、京都大学医学部附属病院南東角の東向いに当たる。

この付近一帯は、平安京の東方、鴨東の地に平安時代後期以後に発展した六勝寺を中心とする白河街区跡に当たり、敷地付近は推定白河条坊地割の南北の中心道路である今朱雀大路に想定される場所である。

当該地の試掘調査は診療所建替に伴うもので、南北方向に2本のトレンチを設けて掘削した。トレンチはそれぞれ東西1.5～2m、南北13mの規模である。

本件にかかる調査は、京都市埋蔵文化財調査センターが直管で行った最初の試掘調査として平成3年4月15日に実施した。

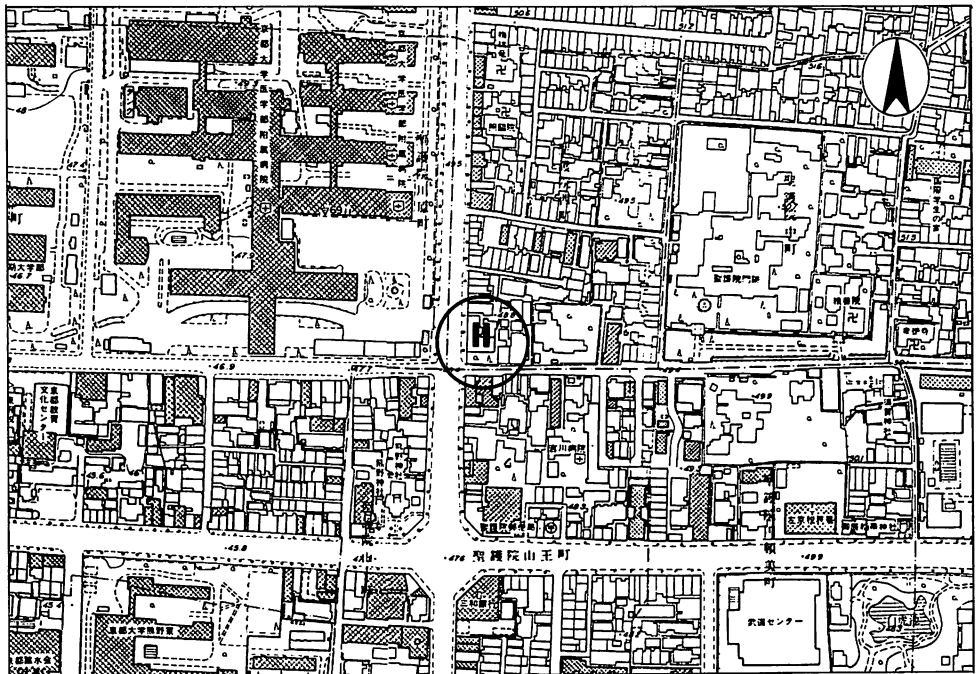


図12 調査地位位置図（京都市都市計画基本図〔御所・吉田〕部分使用，1/5,000）

2. 遺 構

2箇所のトレンチのうち、西側の第2トレンチからは、近世の井戸や漆喰タタキの跡が検出されたものの、地表下1m余りで黄褐色粘質土の地山となり、有力な遺構面は確認できなかった。

東の第1トレンチは、地表下0.7~1.2mで地山となり、白河街区跡に関する有力な遺構面は検出されなかったが、南端では地山を切った東西溝跡を検出した。溝幅は約1.5m強、深さ0.3mほどで時期は不明である。

そのほかトレンチ中央やや南の地表下

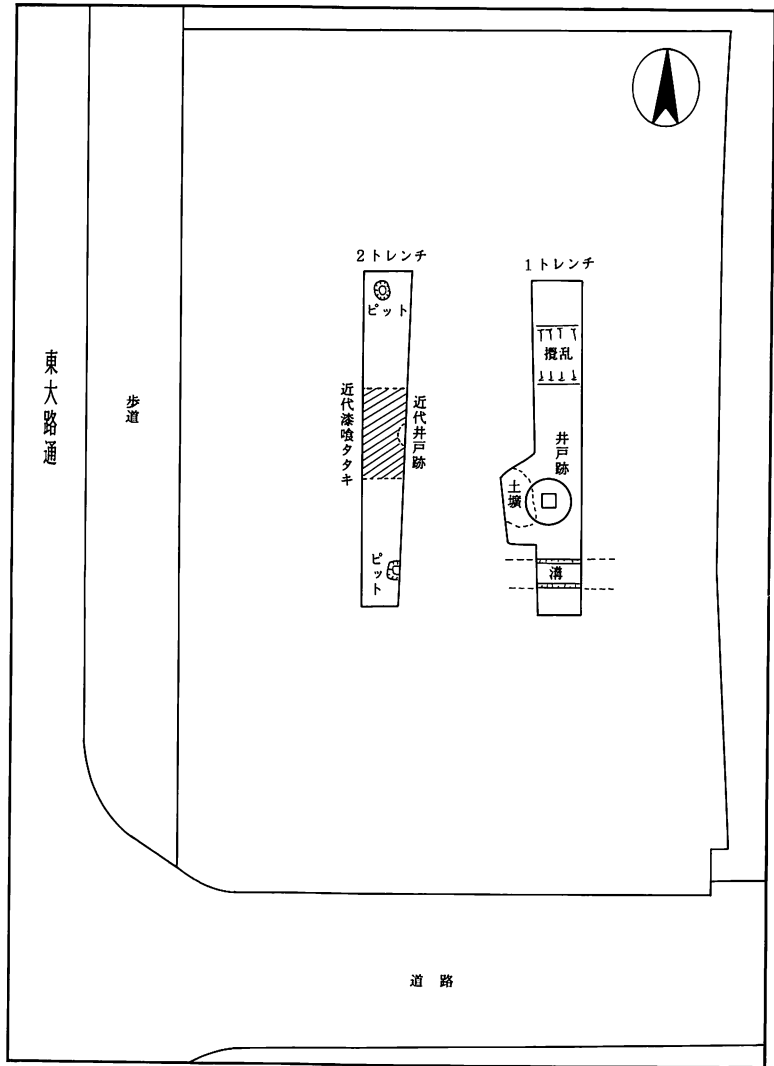


図13 調査地平面図 (1/300)

1m余りのところから、平安時代後期以後しばらくして埋没した井戸跡1基と、その西に一部井戸を切って時期不明の土壌1基を検出した。井戸跡は、検出状況から最大直径約2mの円形掘形をもち、下方はスリ鉢状にすぼむ。井戸の中央部は、一片が0.7mの方形になっており、ここに木製の枠が存在していたらしい。井戸の底部は明確ではないが、検出面より1mほど下方とみられることから、井戸跡は底部分がかろうじて残っていたことにな

る。

この井戸跡中央の方形枠の内側からは、平安時代後期に属する完形品を多く含む土師器が遺物コンテナ1箱分ほど出土し、他に若干の須恵器片や瓦片が含まれる。

3. 遺物 (図14)

主な出土遺物は土師器類で、東側の第1トレンチで検出した井戸跡から出土したものである。完形品も多く、口径が8.5~10cmと13.5~15cmの大きく2種に分類できる。時期差もあまり認められず、平安時代後期の12世紀頃のもので、不用となったものを一括して井戸に投棄したものとみられる。ほかに若干の須恵器片と平安時代後期の平・丸瓦を含む。

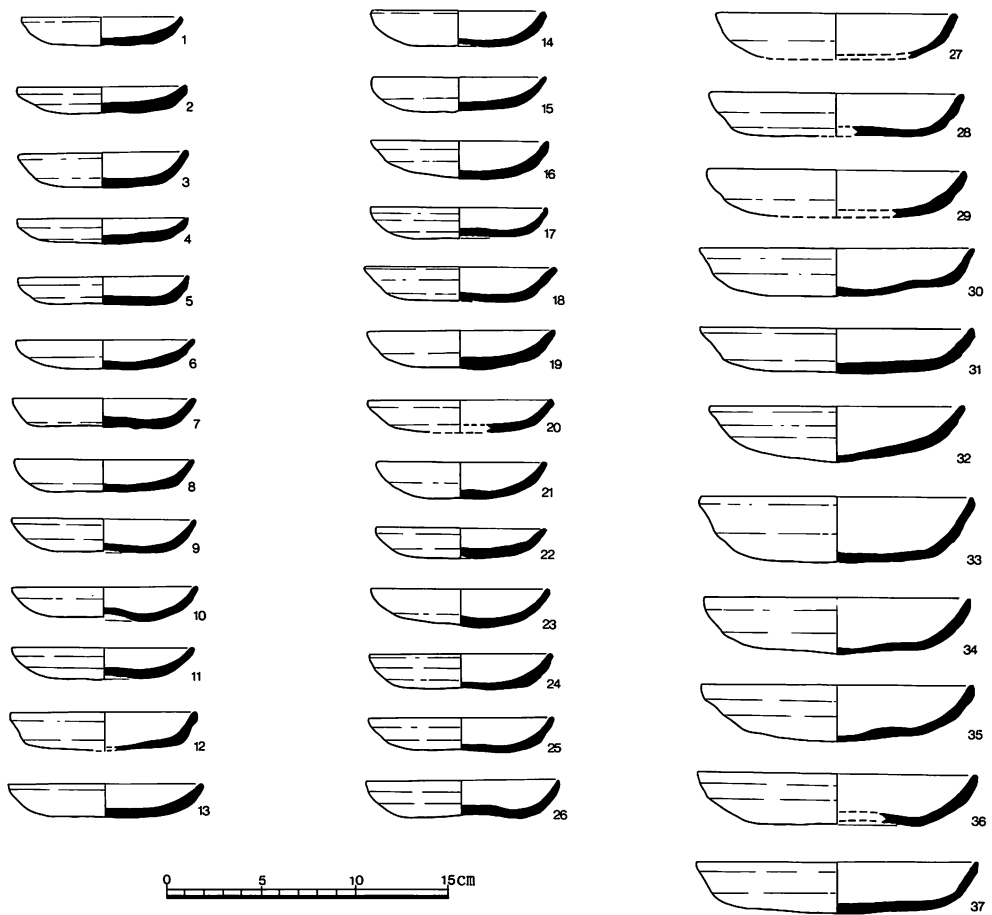


図14 土器実測図 (土師器, 1/4)

4. ま と め

今回調査を行った場所のすぐ東方には聖護院があり、南西には熊野神社が存在するものの、白河街区跡に関しての当該地付近の遺跡については現在のところ不明である。

この敷地の北方及び南方で行われた既往の調査では、尊勝寺の西を通る今朱雀大路に係するとみられる溝跡や路面及び築地跡などを数箇所^{注1}で検出しており、それを結ぶと調査場所付近には南北に推定の今朱雀大路が通ることになる。さらに東西は、平安京の中御門大路末を延長すると敷地南半を通ることになる。

平安京の条坊を、そのまま東へ延長して白河の条坊が成立していたかは現在のところ明確ではない。しかし少なくとも六勝寺の中心的な場所以外の広範囲にわたって条坊地割りが成立していたことは、『鯨珠記』（『史料綜覧』所収）大治2年（1127）7月10日条に「法勝寺西門自り神楽岡至る大路成る」とあり、承暦元年（1077）に供養された法勝寺の西辺に沿った南北の大路は、12世紀の初めころ北方にある神楽岡（吉田山）へ向って延長されたとあり、条坊地割りが長期にわたって行われていたことを浜崎一志が指摘されていることから明らかである。また京都大学構内でも白河の条坊地割りに関係するとみられる溝跡などが検出されることから、白河街区の地割りは一条大路末付近まで施工されていた可能性のあることも報告^{注2}されている。

以上、文献や既往の調査結果からも、調査場所が白河街区の地割りに関係した大路の交差点付近と推定されるものの、南北溝や路面などは検出しておらず、時期不明の東西溝を南方で検出したにとどまった。また院政期からあまり隔てず埋没した可能性のある井戸跡の存在は、出土した土師器を含めて、この付近に邸宅などの存在を伺わせるものであり、今後付近の調査に注目したい。

（梶川敏夫）

注1 浜崎一志「白河の条坊地割」（『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ』—京都大学病院構内遺跡の調査—）京都大学埋蔵文化財研究センター 1991年

注2 注1に同じ



写真6 1トレンチ全景（北から）

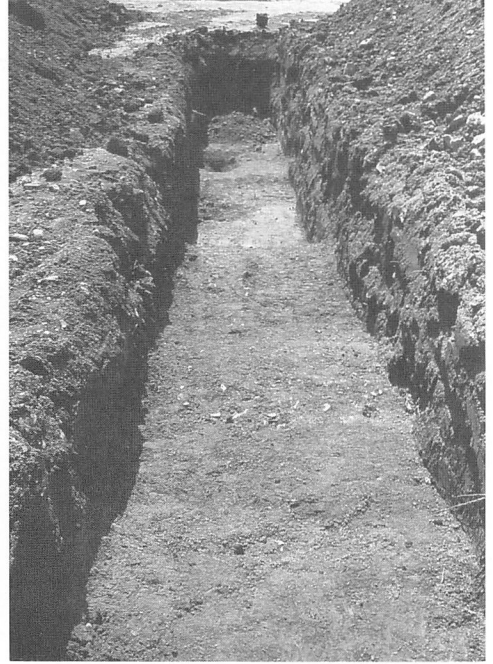


写真7 2トレンチ全景（北から）



写真8 1トレンチで検出した井戸跡（南半掘削状況）西から

V 成勝寺跡（六勝寺の一寺院） No.61

1. 調査経過

京都市左京区の岡崎界隈は、京都市内で最も公的な文化施設が集中した地域で、その一画を占めるのが勸業館である。

勸業館は、明治44年3月に現在の京都市美術館の敷地に、旧美術館建物を移築して第一勸業館として発足した。その後、大正2年には、現在の敷地に第二勸業館北館が、同4年には南館が建設されている。第二勸業館は、昭和9年の室戸台風で倒壊したため、多くの市民や業界の協力を募って昭和12年秋に建物が竣工した。これが現在の勸業館である。第2次大戦後は昭和27年5月まで米軍が建物を一時接收したこともあったが、現在では地の利を生かし、京都の産業振興や公益・文化の向上に役立つ事業の会場として、多くの企業や市民に親しまれる施設となっている。

この勸業館を管理する京都市経済局は、老朽化した建物の建て替えを計画し、平成3年

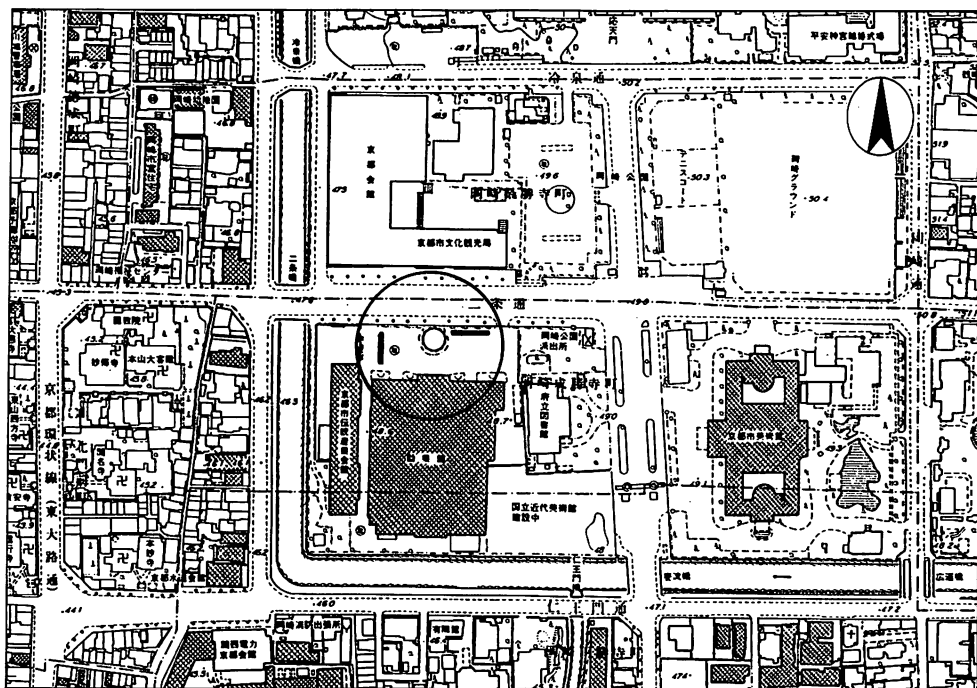


図15 調査地位置図（京都市都市計画基本図〔岡崎〕部分使用，1/5,000）

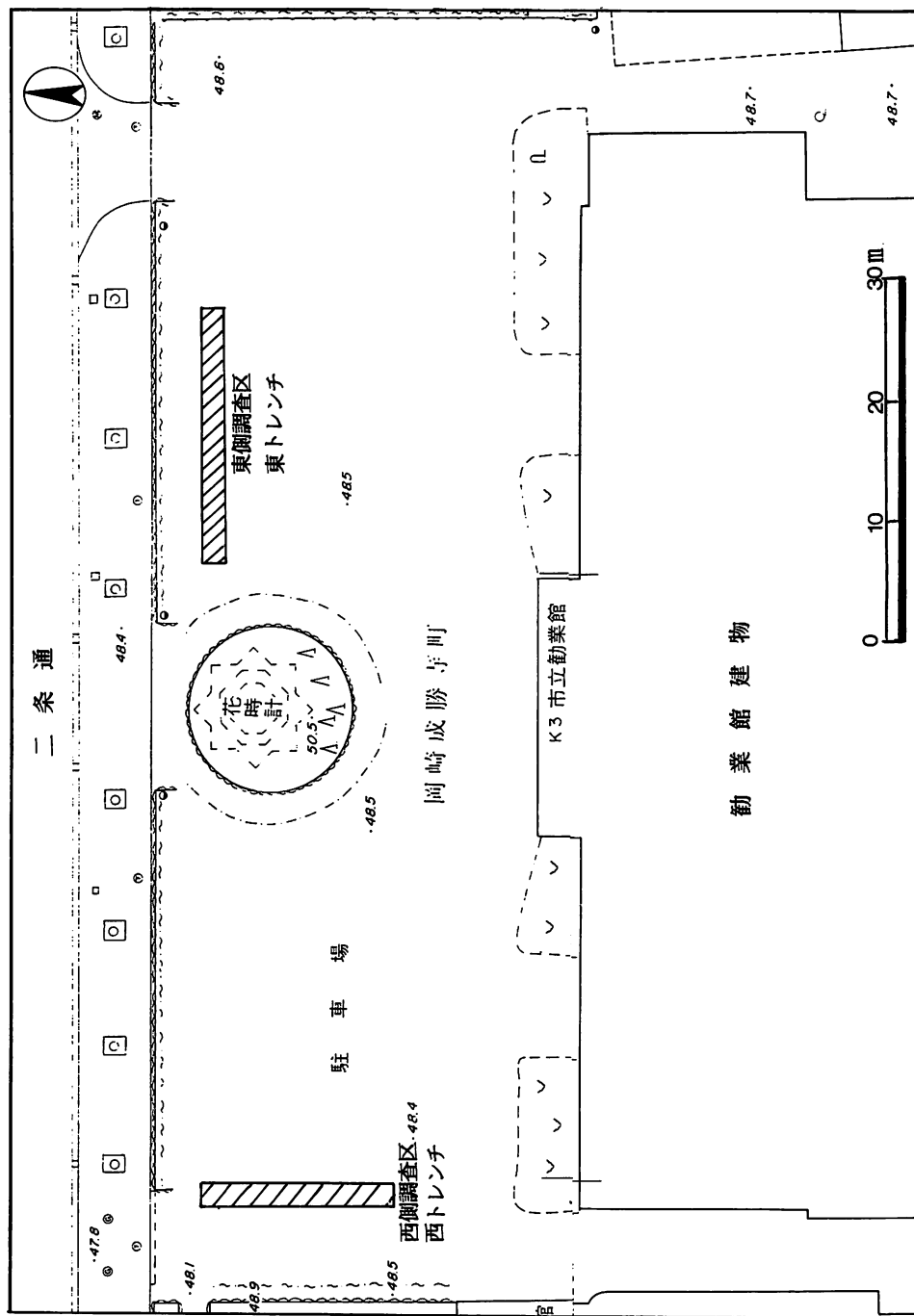


図16 調査地付近見取図



写真9 西トレンチ全景と勸業館（西北から）



写真10 西トレンチ全景（南から）



写真11 中央で検出した東西の二本の溝跡（上から）

度末には具体的な解体工事が行われることとなった。

現在の岡崎一帯には、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡とみられる岡崎遺跡のほか、平安時代後期の一般に院政期とよばれる頃、六勝寺と総称して呼びならわされた、天皇や上皇など皇室関係の御願寺があいついで建立され、多くの寺院建物や院の御所、御堂が薨を連ねていた。「京・白河」と並び称され、平安京の鴨東に外京として発展した六勝寺であったが、その後、応仁・文明の大乱などを経て地上からその姿を消し、現在では地名の一部などによって往時を忍ぶほかはない。

この院政期を代表する六勝寺跡の一画に当たる勸業館の敷地は、現在の町名が岡崎成勝寺町となっており、今より850年以上前の保延5年(1139)に、崇徳天皇の御願によって建立された成勝寺があったと推定される場所である。

昭和12年の勸業館建設時には、埋蔵文化財の調査は実施されておらず、現在西隣にある伝統産業会館建設に伴って埋蔵文化財調査が実施されたものの、成勝寺に関する明確な遺構はみつかっていない。

今回の調査は、勸業館建て替えに伴い、岡崎遺跡並びに六勝寺跡関係の遺構・遺物の残存状況を確認するための事前試掘調査として実施したものである。

調査は、勸業館が開館中であったため、北側の駐車場部分について、2箇所のトレンチを設け合計72㎡について試掘調査を実施した。

2. 遺 構

(1)西側調査区(第1次調査, 9月2~4日, 南北15m×東西2m, 面積30㎡)

勸業館の駐車場西入り口から南北に長く調査区を設定した。駐車場は盛土されて北側の二条通りより若干高くなっており、北へ緩く下がりぎみの土地である。

アスファルト舗装以下1.2m(北では0.7m)までは、勸業館建設前後の廃材が多数混入した盛土で、その下層には耕作土が存在する。耕作土には江戸から明治期頃の染め付け茶碗片などを含み、勸業館建設前は田畑であったことが分かる。

調査区南端では、この耕作土の下層(地表下1.5m)で平安時代後期頃の黒色粘質土の整地層を確認し、同じく調査区北端でも、地表下1.6mで同様の整地層を検出した。

整地層以下は地山とみられる北白川砂(砂礫)の自然堆積層となり、遺構・遺物の存在は確認できなかった。

整地層は、厚いところで0.6~0.7mあり、部分的には後世に削られて地山が露出してい

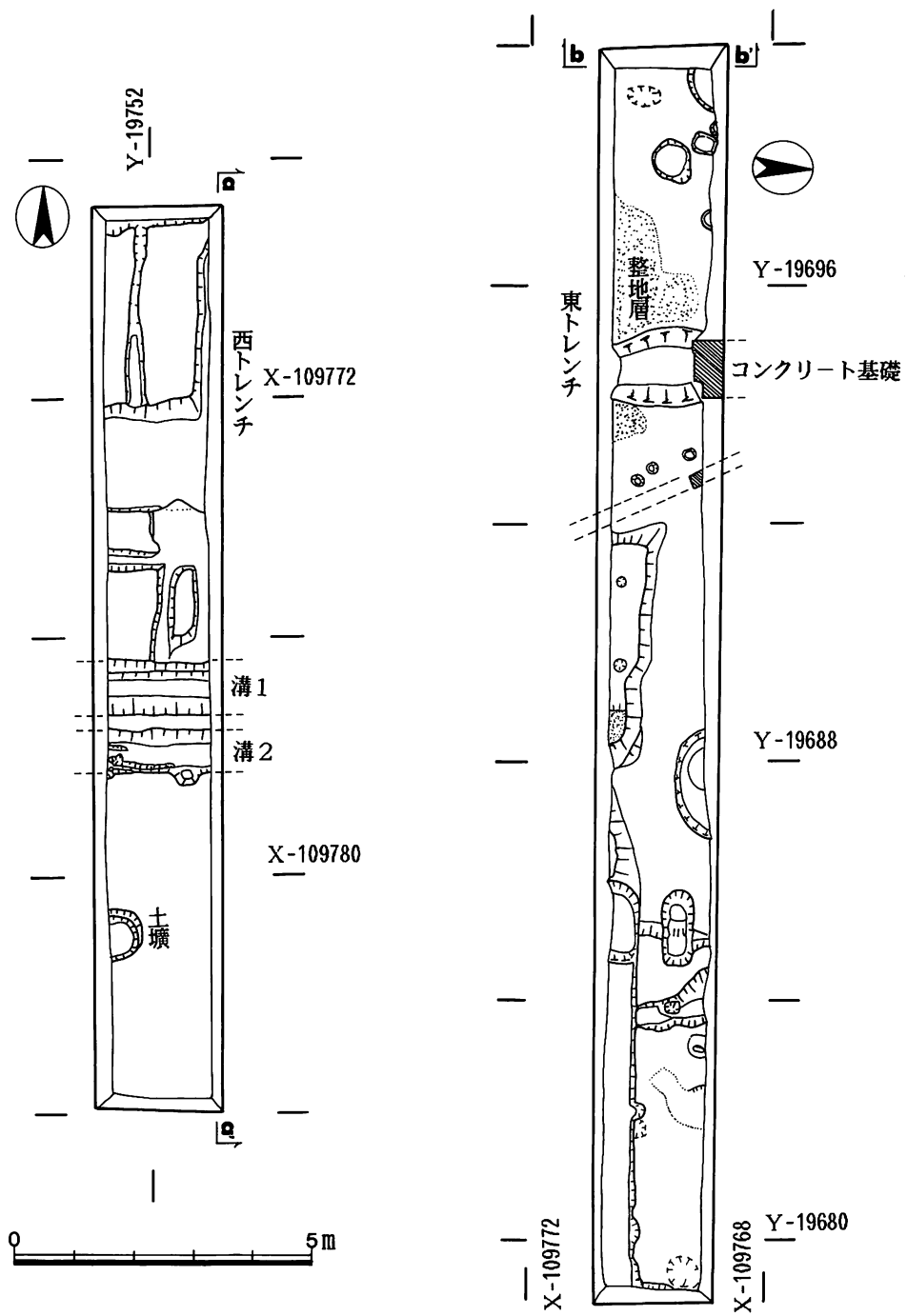


図17 遺構実測図



写真12 西トレンチの二本の溝跡全景（東北から）

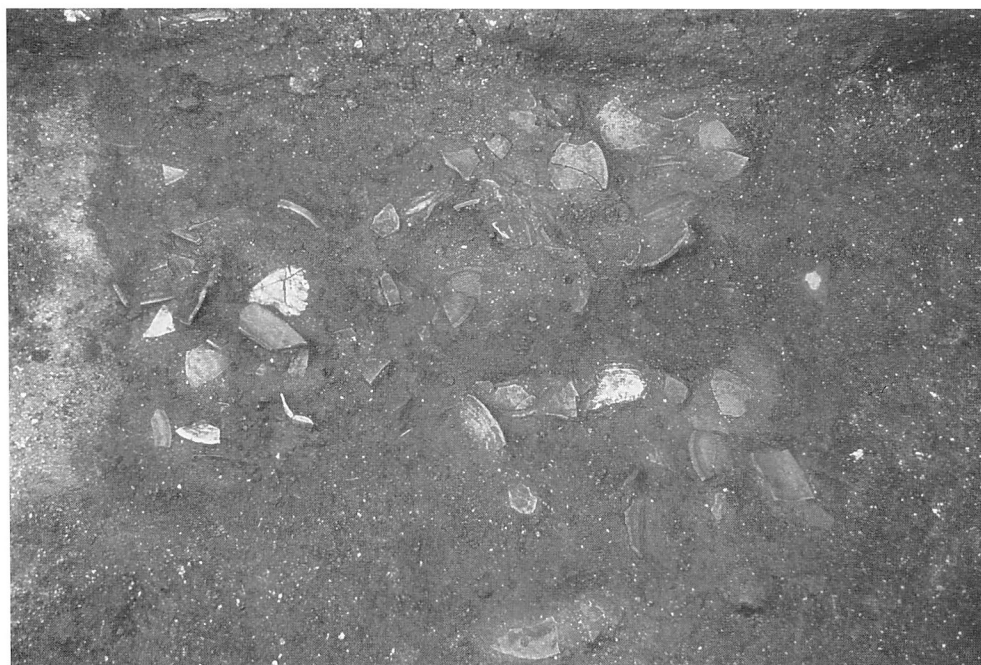


写真13 遺物出土状況（西トレンチ南半の西）

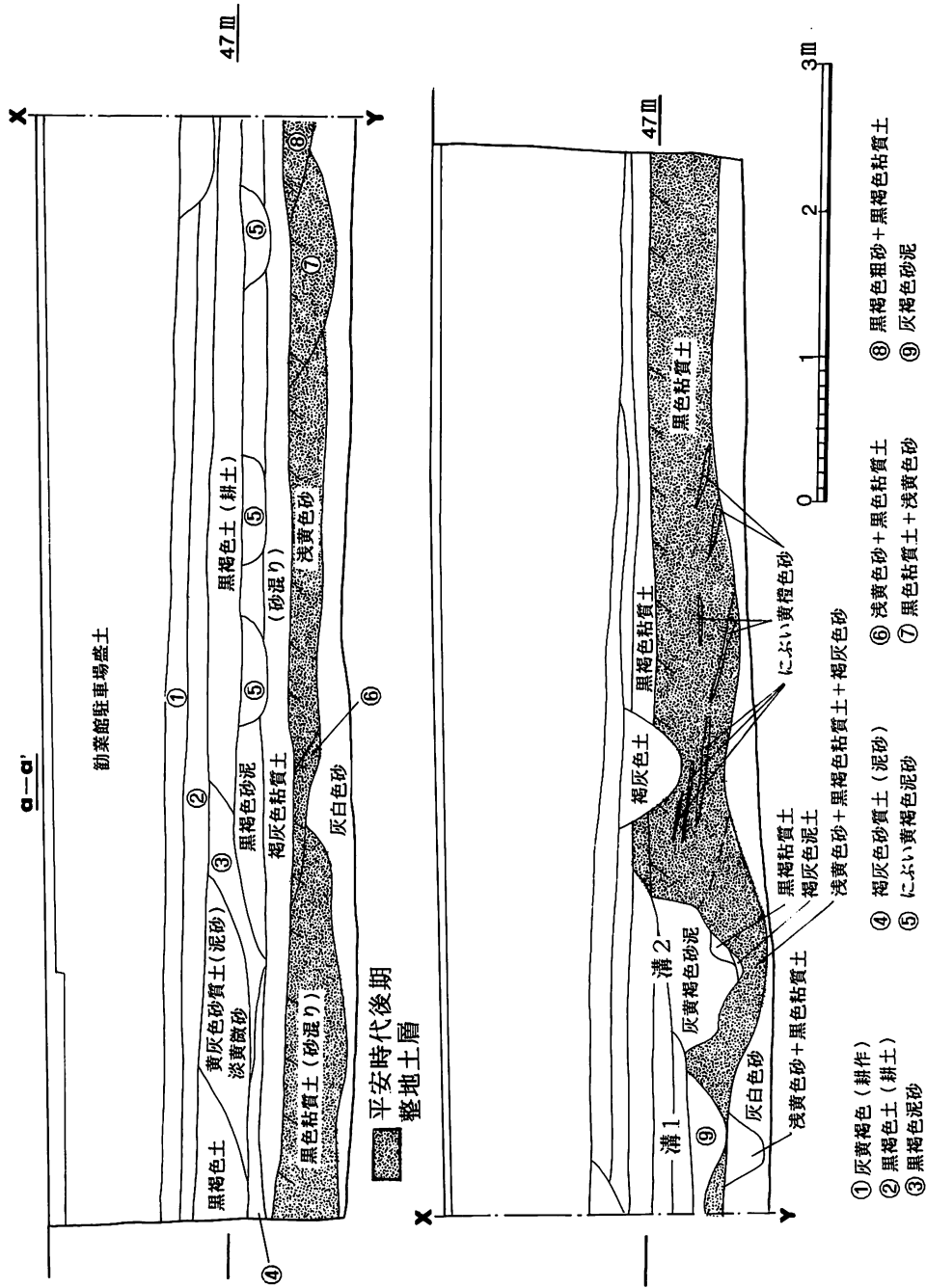


図18 西トレンチ東壁土層図

るところもあるが、ほぼ全体に広がっており、平安時代後期の土師器や瓦を含むところもある。

調査区中央では、この整地層を切って東西方向に延びる2本の平行した溝跡を検出した。この溝を境にして北と南とは整地層の残存状況が異なり、南方の整地層は厚く、高く残存する。溝の幅は約1～0.7m、深さ0.3～0.5mほどで、溝内から平安時代後期の土師器片や瓦がみつまっている。

南方の溝跡南肩は、ほぼ垂直に立ち上がり、それに沿って下方に細い溝が走ることから、かつてはこの壁面に当て板が施されていた可能性がある。

この東西溝跡の南方西壁際に整地層を切って直径0.9mの土壇がみつき、土師器が一括して出土している。

(2)東側調査区(第2次調査、9月17～19日、東西21m×南北2m、面積42m²)

駐車場の東入り口を入ったすぐ西側に、二条通りに平行して東西に長い調査区を設定した。ここにはかつて事務所があったとされる場所である。

アスファルト舗装下はすぐに攪乱層で、旧建物の基礎や地中ケーブルなどが存在し、駐車場整備の際に解体建物の廃材を埋めて整地したらしい。

攪乱層下の地表下0.8～0.9mには、1次調査区と同様に耕作土があり、その下の地表下1～1.2mで平安時代後期の整地層を確認した。この土層以下は砂礫の地山で、遺構・遺物は確認していない。

この整地層は西調査区に比べて薄く、厚いところでも0.2m程度で、調査区の中央から西に存在し、南へ広がっていることは確認できるが、北へ続くかは不明である。またこの整

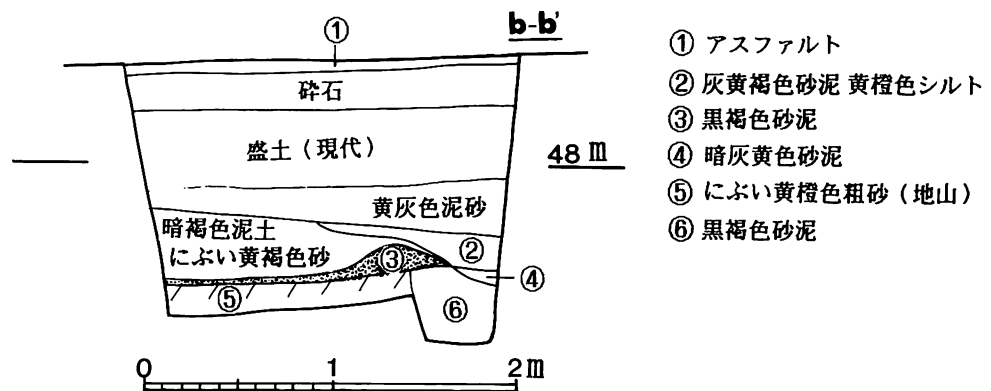


図19 東トレンチ西壁土層図



写真14 東トレンチ全景（東から）

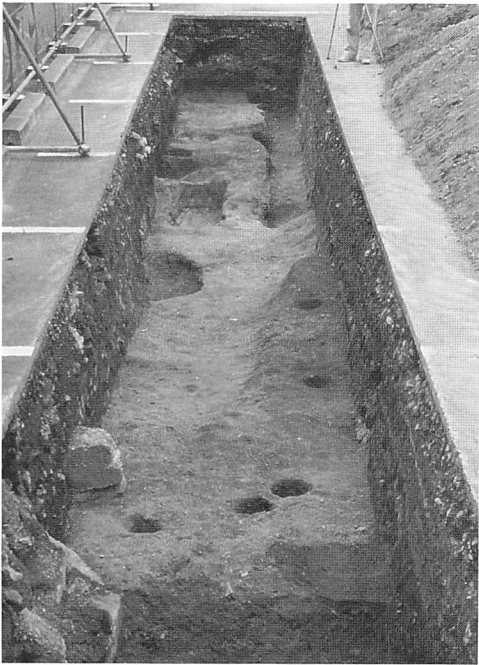


写真15 東トレンチ（西から）



写真16 東トレンチの整地層
（左下の黒い部分）東から

地層が残る西地区では、性格不明のピットを数箇所検出した。

調査区の東側には、耕作土下に整地層は認められず、砂礫の地山上にピットを数箇所検出したに過ぎないことから、この付近は元から地面が高かった可能性がある。

3. 遺物

出土した遺物はコンテナに3箱分ほどある。

大半が平安時代後期の遺瓦で、多くは整地層上面から出土している。また同時期の土師器が西調査区南の土壌からまとめて出土した。そのほか弥生から古墳時代頃の高杯脚部の小破片とみられるものや、近世陶磁器、伏見人形の破片などがある。

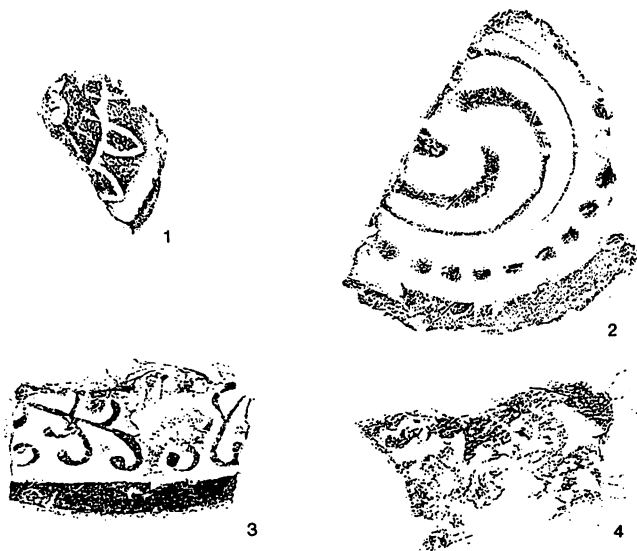


図20 軒瓦拓影

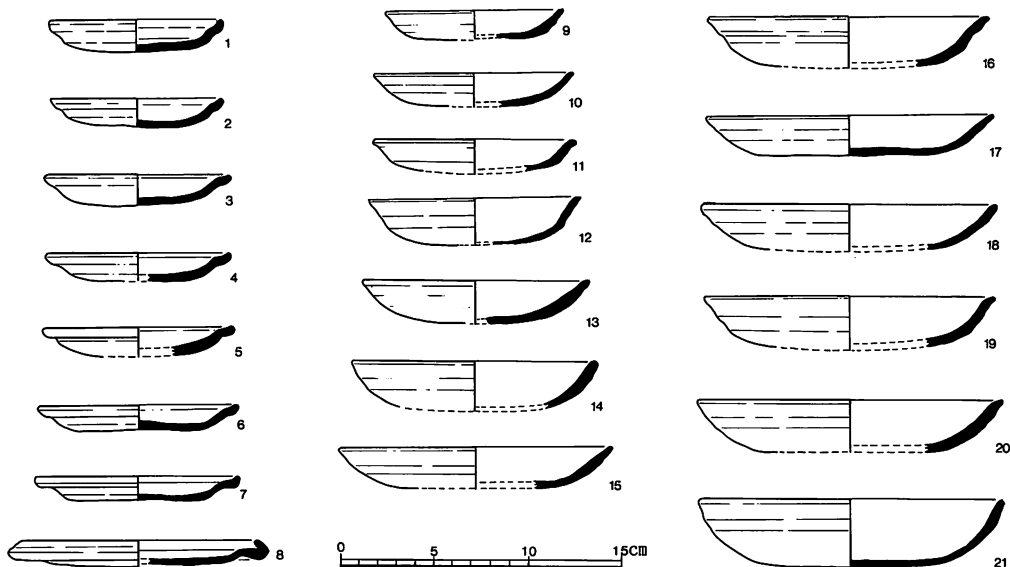


図21 土器実測図（土師器，1/4）

(1)瓦類 (図20)

軒先瓦は4点出土した。いずれも既往の六勝寺跡から出土しているもので院政期に建立された建物屋根に使用されていたものである。

(2)土師器 (図21)

西調査区の南側で検出した土壌から一括して出土したもので、特徴的なコースター形の皿などを含み11～12世紀にかけてのものである。

4. ま と め

成勝寺は位置を示す資料が極めて少ない。『明月記』建暦2年(1212)10月4日の条に、
三条東行、延勝寺南門大路北行、件南門前東折、自成勝寺西出二条、尊勝寺南大門前東行…

とあり、延勝寺の南門前を東に折れ、成勝寺の西より二条(大路)に出るとすることから、成勝寺が二条通りに面し、西側には延勝寺が、また北方には尊勝寺があったことが分かる。

成勝寺は、保延5年(1139)10月26日に供養され、主な建物は、金堂・東西軒廊・東西廻廊・経蔵・鐘楼・観音堂で東・西・南・北に門を構える。福山敏男氏の復元案^{註1}によると寺の規模は一町四方面程度と考慮される。

清水 擴氏は「六勝寺の伽藍とその性格」^{註2}で、成勝寺の金堂は裳層をもち、桁行11間で、七間四面裳層付の仏堂とされ、国王の氏寺とされる法勝寺の金堂と同様、金堂から左右に軒廊と廻廊がL字形に延び、先端には経蔵と鐘楼が設けられていたとされる。

勸業館とは二条通りをはさんだ北側にある京都会館では、建設に伴って発掘調査が行われている。その報告(『尊勝寺跡発掘調査報告』昭和36年^{註3})のなかで、杉山信三氏は六勝寺の復元案を掲載されている。それによると成勝寺の推定位置は、二条通りの南で西端が勸業館、東端が京都市美術館、つまり京都府立図書館付近の一町四方をそれに当てておられる。また福山敏男氏も同じく『日本建築史研究』(昭和43年)の復元案で、京都府立図書館付近をそれに想定されている。

ところが成勝寺の北方に想定される尊勝寺は、推定寺域内の発掘調査が進展したのに伴い、二条大路の北は動かさず、一町西へずらして東限を京都会館敷地の東、西限を現在の東大路より一筋東にある通称「平安通」とする四町四方の修正案が、昭和54年頃に杉山氏から出された。さらに最近の講演会資料『六勝寺と白河御所』^{註5}では、大治3年(1128)3

月13日に待賢門院によって供養され、一町四方とみられていた円勝寺（推定地は京都市美術館付近）を、南北は一町のままで、東西を一町から二町に拡幅する案が出された。

この結果、円勝寺の西にあったと推定される成勝寺は、もとの推定位置から一町西へずれて勸業館敷地が成勝寺に該当することになる。

円勝寺は、大治3年3月13日に供養され、文献から五重塔（中御塔）・三重塔二基（東・西御塔）・中央精舎（金堂）・五間層軒（五大堂）・九間飛甍（薬師堂か）・六時堂・二階門・築垣・西面門・鐘楼など多数の建物の存在がうかがえ、一町四方の寺域では窮屈とも思えることから、東西二町としても問題は少ない。

勸業館は先にふれたように町名が成勝寺であり、今回の調査でも平安時代後期の遺物を伴う整地層が検出された。ただし明確な建物跡や二条大路の南限は確認していない。

既往の六勝寺跡の発掘調査においても、寺域内の建物の建設される場所以外にも広く、版築状の整地が行われていたことを確認しており、整地層の存在は、寺域内であることの裏付けともなろうし、また近辺に建物跡が存在する可能性を示唆している。特に勸業館北方にあった尊勝寺跡では、建物周辺の広範囲が整地されているのを確認しており、今回の勸業館敷地が成勝寺跡である可能性は大きいといえる。

勸業館敷地は先にふれたように町名が成勝寺町とよばれ、成勝寺に関係する遺構が今後発見されることも十分考えられるが、いずれにしても今回の調査面積は狭小であり、成勝寺であるとする結論は今後行われる付近の調査結果に委ねたい。

（梶川敏夫）

注1 福山敏男「六勝寺の位置」(『日本建築史研究』昭和43年6月20日)

注2 清水 擴「六勝寺の伽藍とその性格」(『建築史学』第5号, 昭和60年9月30日)

注3 杉山信三「尊勝寺跡発掘調査報告」(『奈良国立文化財研究所学報第10冊』昭和36年3月)

注4 『六勝寺跡』(京都予備校・文化財資料室開設記念資料) 昭和54年3月

注5 杉山信三ほか『六勝寺と白河御所』(京都市埋蔵文化財研究所講演会資料, 平成3年11月)

(参考) 六勝寺の寺院 法勝寺(白河天皇御願) 承暦元年(1077) 供養

尊勝寺(堀川天皇 々) 康和4年(1102) 々

最勝寺(鳥羽天皇 々) 元永元年(1118) 々

円勝寺(待賢門院 々) 大治3年(1128) 々

成勝寺(崇徳天皇 々) 保延5年(1139) 々

延勝寺(近衛天皇 々) 久安5年(1149) 々

VI 鳥羽離宮跡 No.54

1. 調査経過

調査地は、伏見区竹田真幡木町48, 48-10に所在し、鳥羽離宮跡東殿の北限推定地に位置するため、平成4年7月24日に試掘調査を行った。調査は、2箇所にてトレンチ（1・2トレンチ）を設定した。その結果、2トレンチにおいて鎌倉時代の木組井戸一基を検出し、井戸枳材については取り上げた。他に遺構と見るものはなかった。

2. 遺 構

基本層序は、上から盛土（厚さ55cm）・耕土（厚さ25cm）・床土（厚さ18cm）・暗褐色粘質土（厚さ37cm）・青灰色微砂及び粘土である。2トレンチのほぼ中央、GL-1.2mの暗褐色粘質土上面において木組井戸一基を検出した。

井戸 井戸の深さは検出面から約1.5m。底部は玉石を敷き、水溜等の施設は認められない。井戸側は二重の構造を持ち、外側に縦板を並べ、内側を縦板組隅柱横棧どめ型とする。北井戸側は、土厚によって内側に大きく傾いている。外側の一边は、105~110cmで方形を呈する。縦板は、各辺に2枚程度である。縦板どうしは固定されていない。内側は、一辺

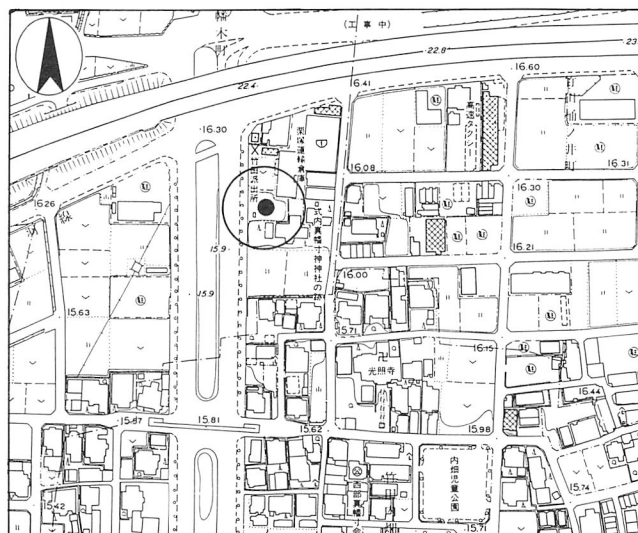


図22 調査地位置図（基本図〔城南宮〕1/5,000）

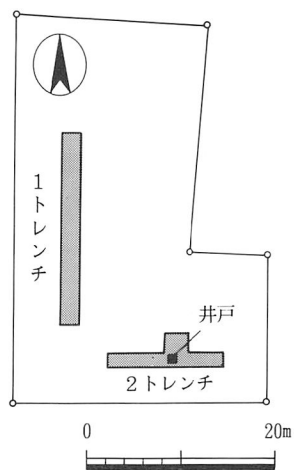


図23 トレンチ配置図 (1/800)

が東西約95cm、南北70~80cmを測り、矩形を呈する。横棧は、四隅の柱に柄穴をあけ、上下二段に大入れとする。縦板は、幅20cm前後のものを用いる。上段の横棧から下は、縦板との間に割り竹を縦に密に並べる。

井戸内の埋土は、上下二層に分けられ、上層は灰色泥土、下層は暗灰色泥土（厚さ45cm）である。外側の縦板と内側の縦板との間は、砂利と粘土を充填している。

なお、井戸枠材には、建築部材から転用したと考えられるものが多々ある。これらの部材は、鳥羽離宮の堂宇に使用されていた可能性が強い。

3. 遺物

井戸内の下層埋土から、鎌倉時代の瓦器香炉や土師器皿等が出土した。

図25に示した瓦器香炉は、鳥羽離宮跡では初めての出土である。身は完形で蓋は約半分を欠く。身と蓋を重ねた香炉の高さは9.8cmある。

香炉蓋は直径13.2cm、器高6.4cm、口縁部から4.9cmほど急に立ち上がり、天井部は平で、縦長の宝珠つまみが付く。中心から等間隔に三箇所にかか葉をイメージした「へ」の字形の透かしを肩部に入れる。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整を施す。蓋の内面および蓋の透かしのまわりには、ヤニが付着する。

香炉身は、直径13.9cm、器高3.8cm、古墳時代後期の須恵器の杯身に形状がよく似ており、底部には小さな三つのフジツボ形の足が付く。身の内面は暗灰色を呈し丁寧なナデ成形を施す。

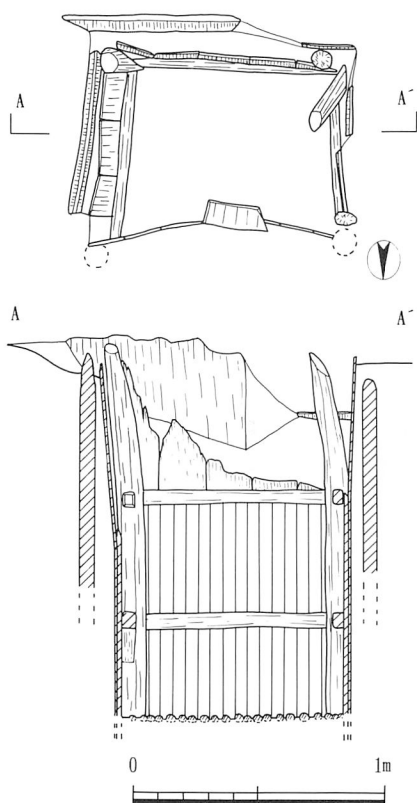


図24 井戸実測図 (1/30)

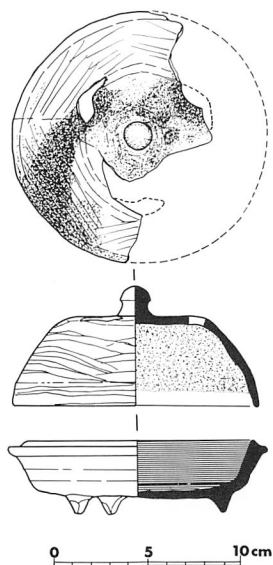


図25 土器実測図 (1/4)

(長谷川行孝)

4. 井戸枿材の観察

井戸枿に用いられた部材は、分厚く幅広の板や薄板を用い、寸法がそろわず、建築部材の転用品が多いと思われる。

1は板扉を転用した部材と考えられ、厚さ9cm、幅62cm、長さ153cmを測る。一辺のみ残り他は腐植及び破損し、傷みが激しいが、表裏とも平に調整されている。腐食していない一辺に沿って、穴が穿たれているが、鍵穴の痕跡かと思われるが、破損が激しいため形状が不明瞭である。2, 18, 20は自然の腐食以外に、斧状の刃物で裁断している。

7～13の7点は厚さが2～3cm、幅が23～25cm、長さ96～160cmの同形状を示す薄板である。井戸には縦に使用されていたが、上部はすべて腐食している。いずれも両面ともに削りの痕跡を残しているが、7～9は手斧^{ちような}、10と11は槍鉤^{やりかん}で調整している。

3～6は井戸の支柱として用いられたもので、槍鉤で八角形に面取りしている。直径は12～15cm、長さは162～190cm以上を測る。上方は腐食している。下から50cmと115cmの2箇所的位置に、L字形に柄穴を穿ち、横棧を差し込んでいる。

14～17は井戸の横棧に用いていた部材で両端を尖らしている。16には木釘の痕跡が認められる。

(前田義明)

5. まとめ

今回の試掘調査では、鳥羽離宮跡に直接関連する遺構はなかったが、井戸枿材には鳥羽離宮の堂宇からの転用材と考えられるものが多々含まれ建築史上、貴重な資料を得た。

表2 井戸枿の樹種鑑定（大きさの括弧つきは欠損を示す） 岡田文男

番号	樹種	大きさ（長さ×幅×厚さ 単位cm）	備考	番号	樹種	大きさ（長さ×幅×厚さ 単位cm）	備考
1	ヒキ	(153)×(62)×9	板扉	11	モミ	(112)×23×3	
2	ヒキ	(76)×(73)×7	板扉？	12	スギ	(150)×(7)×2	
3	コウヤマキ	(190)×直径15		13	モミ	(96)×25×2	
4	ヒキ	(184)×直径13		14	ヒキ	91×6×4	
5	ヒキ	(185)×直径12		15	ヒキ	102×6×3	
6	ヒキ	(162)×直径12		16	スギ	105×9×4	
7	ツガ	(155)×24×2		17	ヒキ	(96)×(8)×8	
8	モミ	(160)×24×2		18	ヒキ	(53)×(37)×7	板扉？
9	スギ	(154)×25×3		19	ヒキ	(60)×(18)×8	板扉？
10	モミ	(135)×25×2		20	ヒキ	(65)×(31)×6	板扉？



写真17 1 トレンチ全景 (南から)

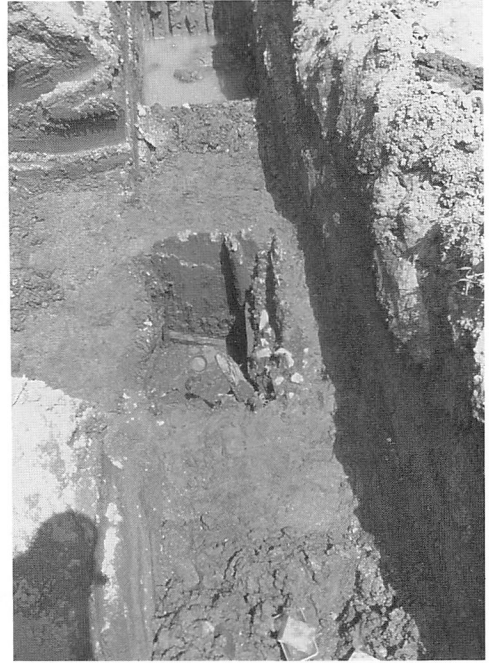


写真18 2 トレンチ全景 (西から)



写真19 井戸全景 (西から)



写真20 井戸枠取り上げ作業 (東から)

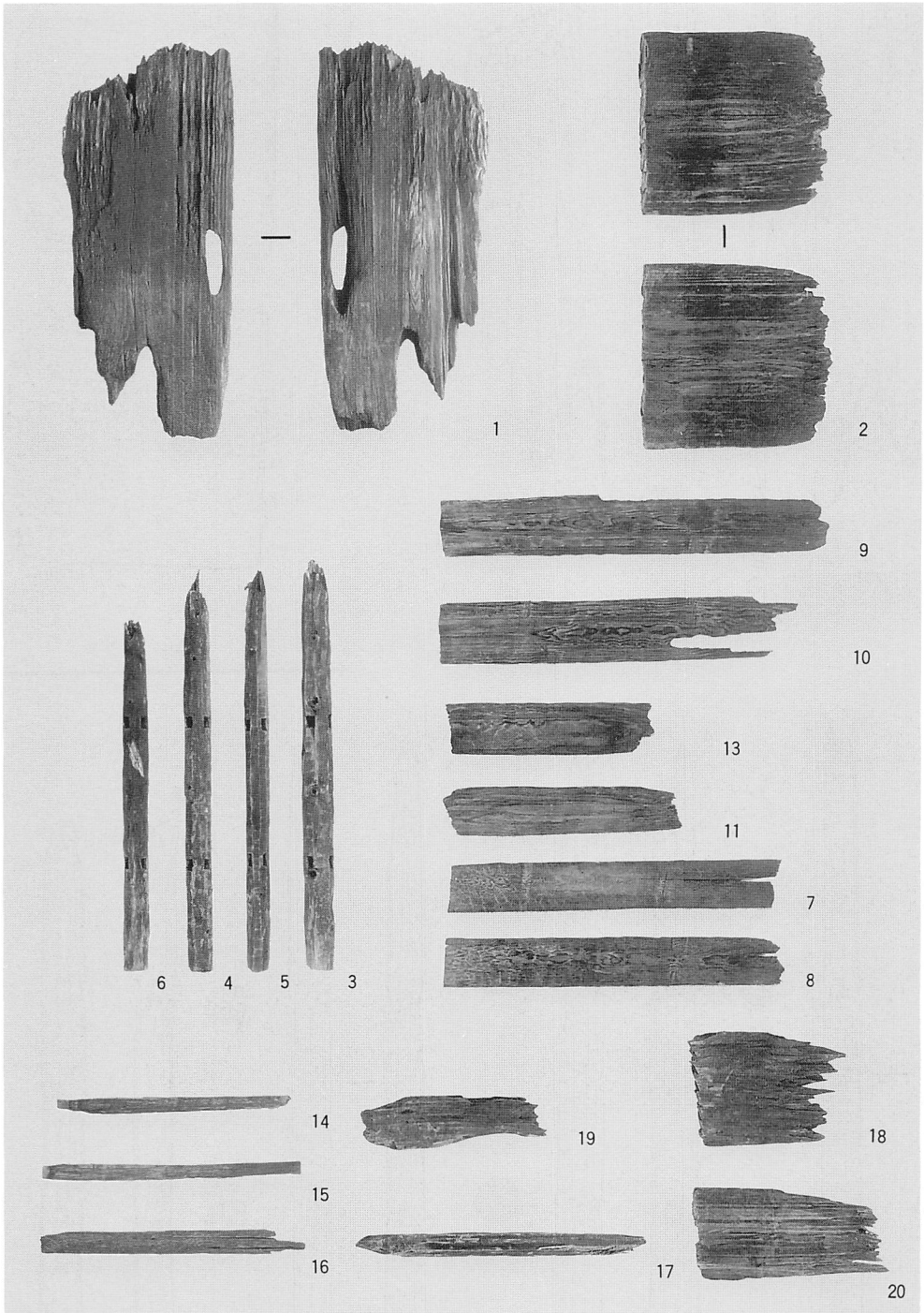


写真21 遺物写真（井戸枠に転用されていた建物部材）

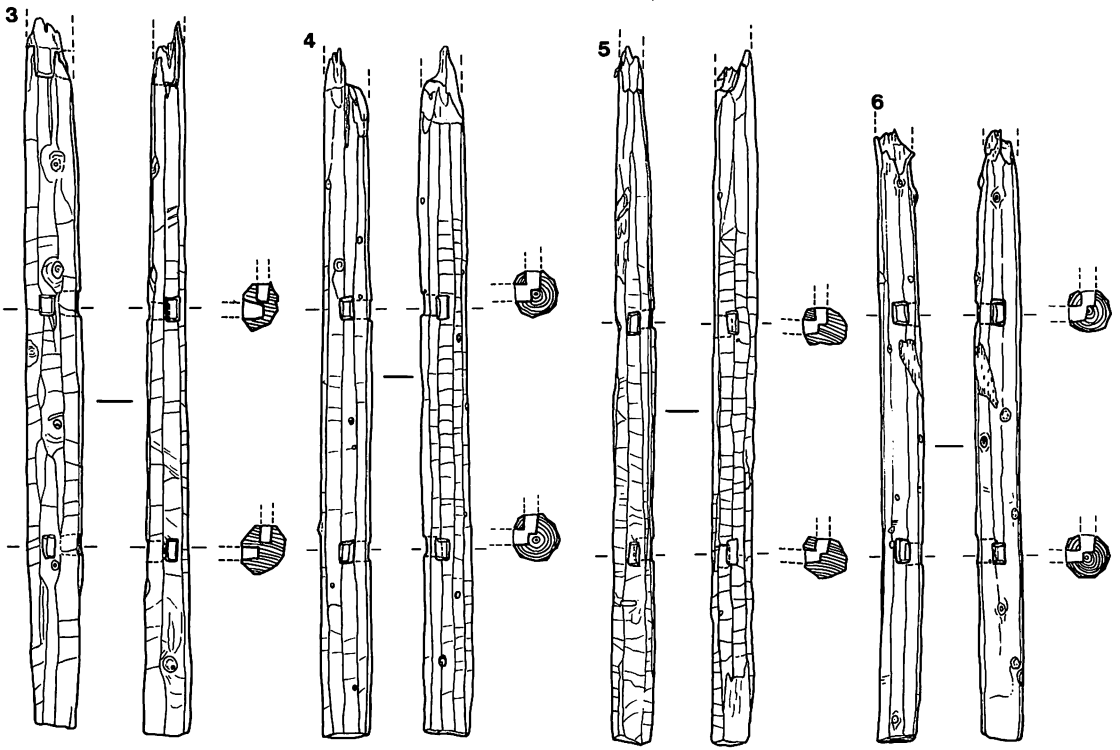
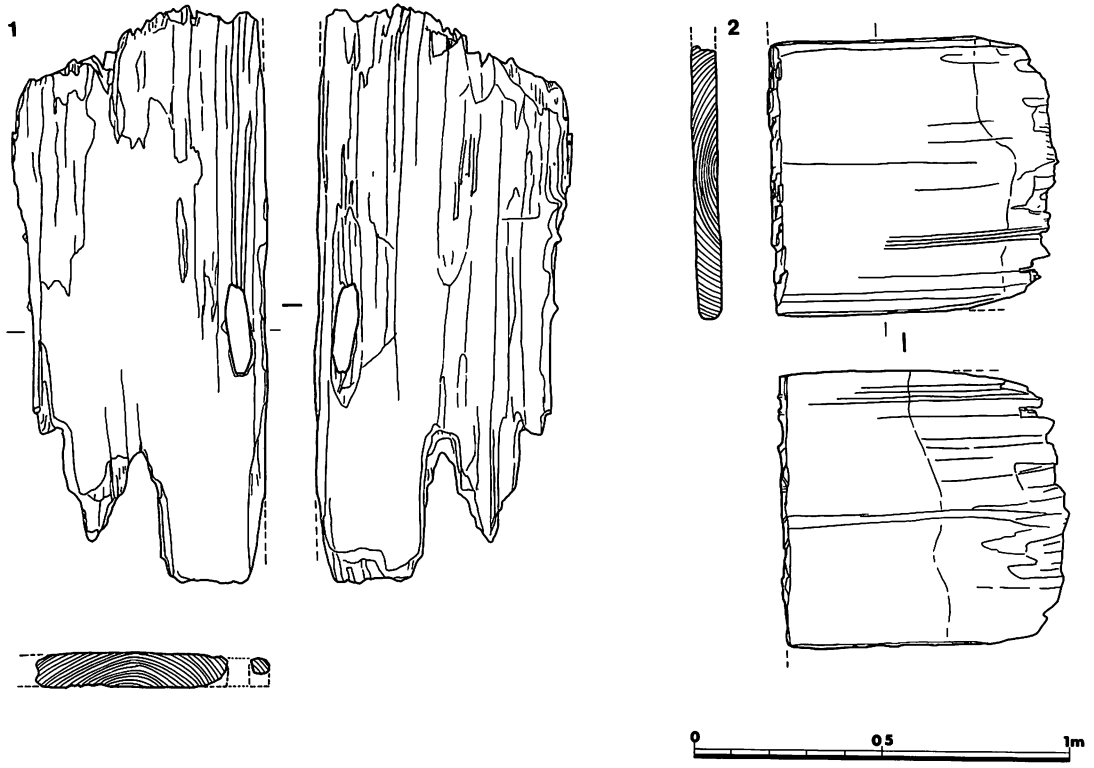


图26 井戸部材実測图 (1/20)

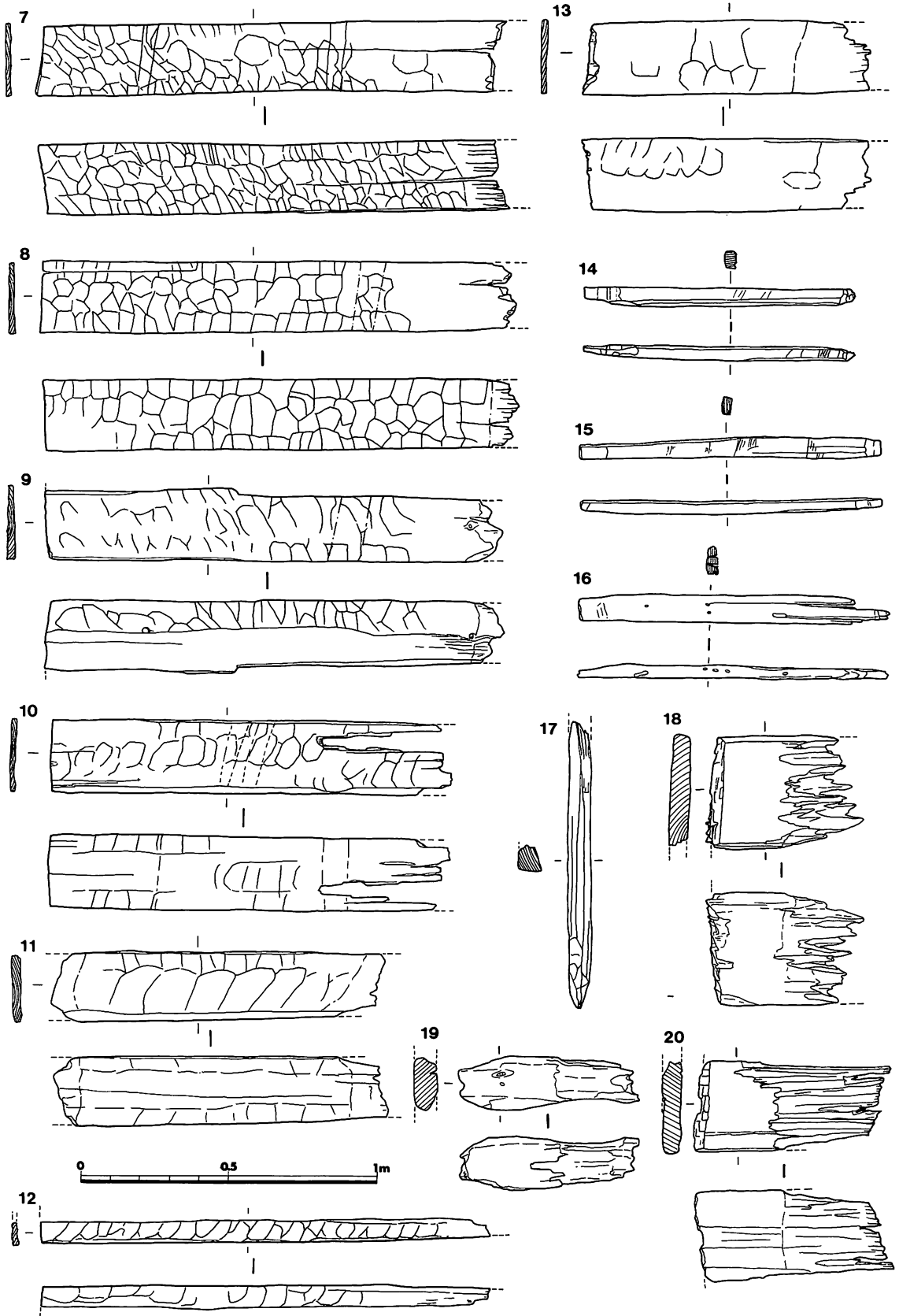


图27 井戸部材実測图 (1/20)

VII 中久世遺跡 No.49

1. 調査経過

調査地は、京都市南区久世中久世町4丁目19, 20番地に位置する。当該地は弥生時代から古墳時代にわたる集落跡の中久世遺跡に含まれていることから、平成3年7月15日に試掘調査を行った。調査はトレンチを2箇所設定し、いずれのトレンチにおいても地表下約0.30mで古墳時代の柱穴を認めた。そのため、埋蔵文化財調査センターと関係者との間で協議を行ったが、遺構の検出面が浅くて設計変更が無理ため、試掘調査を8月5日から9日まで延長して行った。調査は調査区を南北2箇所(A・B区)に設定して行った。

2. 遺構・遺物

調査地はもと畑で、標高約16.60mの平坦地である。基本層序は、A・B区とも同じで、上から耕土(厚さ10cm)・にぶい褐色泥砂(厚さ10cm)・灰黄褐色シルト(厚さ7cm)・明褐

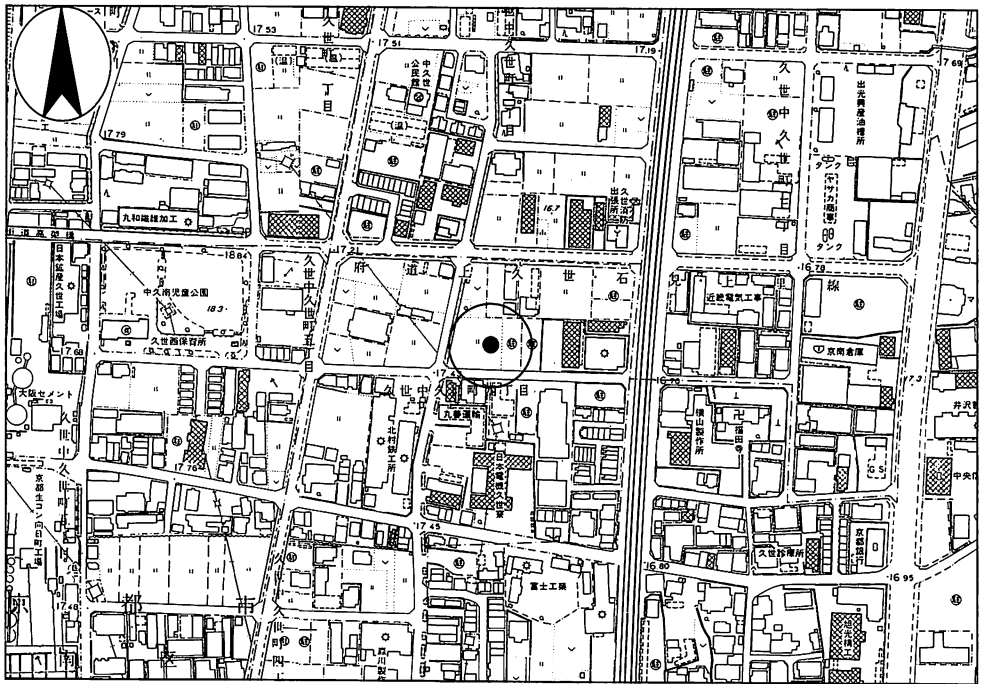


図28 調査地位置図(京都市都市計画基本図〔寺戸・久世〕部分使用, 1/5,000)

色砂泥（厚さ8cm）・明褐色粘土（地山）が堆積し、遺構は、全て地山上面（標高約16.25m）で検出した。

A区で発見した遺構には、弥生時代の竪穴住居・土塋，古墳時代の掘立柱建物・柱穴，平安時代の溝，中世の耕作に伴う溝などがあり，そのほかに柱穴や，土塋を発見したが出土遺物が細片のため時期を特定できないものが多い。また，柱穴については，建物として扱うことができないものが多々ある。

B区では柱穴や土塋を検出したが，柱穴は建物としてまとめられず時期も不明である。

以下，A調査区で検出した代表的な遺構について概説する。

竪穴住居 1（図32） 調査区の中央北よりで検出した住居で，後世の土塋や溝によって壁面や床面の一部が削平されている。

住居の平面形は不整形な円形を呈し，検出面から床面までの深さは，6～10cmを測る。規模は，直径約4m弱，床面積約12.5㎡と推定される。柱穴は7箇所検出したが，この内P4，P6は別の住居のものと思われる。残り5箇所の柱穴の大きさは，直径15～35cm，深さ8～46cmある。これらの柱穴から考えられる柱配置には二とおりあり，一つは壁面にそって並ぶ4箇所の柱穴（P1・P2・P5・P7）を構造材とする考えと，方形に並ぶ4本柱（P2・P3・P7・？）と考える案がある。屋内施設としては，中央で土塋を検出した。平面形は円形で，直径約65cm，深さ約55cmある。埋土のうち下層部は炭を多く含むが，壁面・底部は焼けていない。埋土や土塋内から弥生時代後期の土器片が出土した。

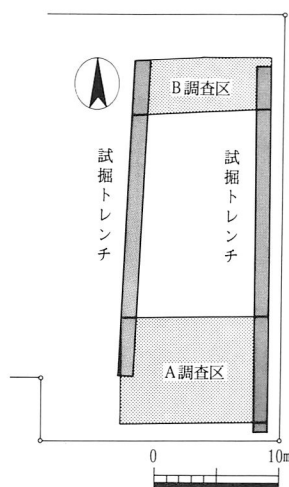


図29 調査区設定図 (1/600)

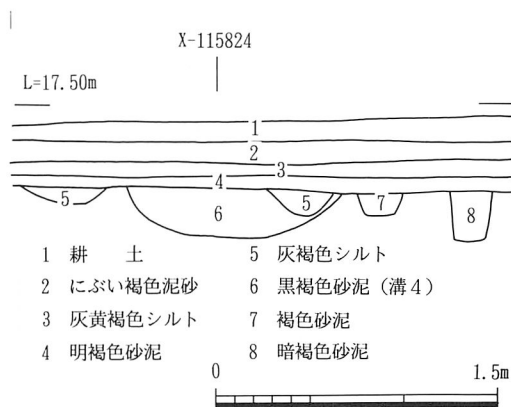


図30 A調査区東壁土層図 (1/40)



写真22 A調査区作業風景（西北から）

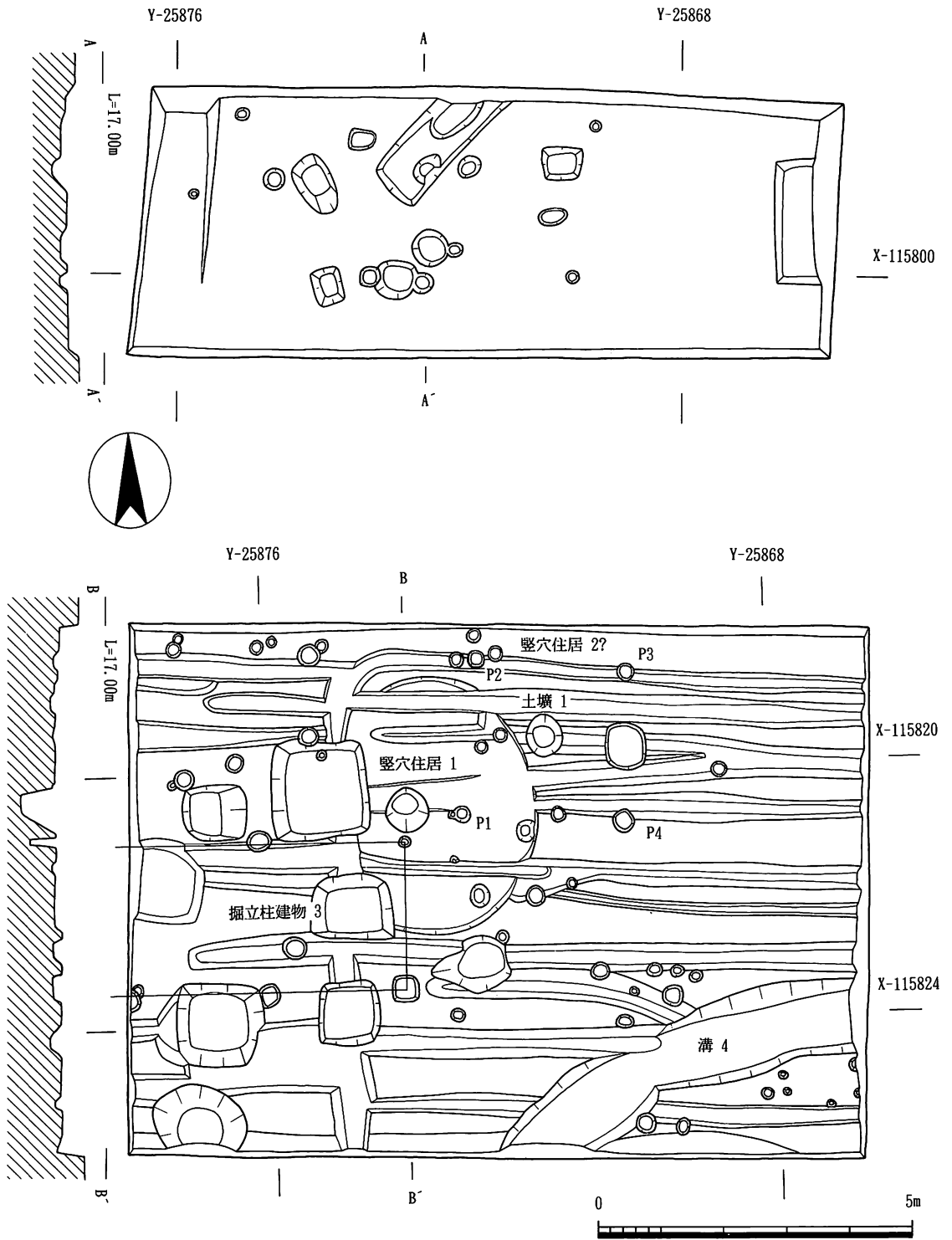


図31 遺構実測図 (1/100) 上: B調査区 下: A調査区

竪穴住居 2 ? (図31) 竪穴住居 1 の北東で土壙 1 とこの土壙を中心として 4 箇所に柱穴 (P1・P2・P3・P4) を検出した。

壁面や床面は検出していないが、住居の中央に土壙のある 4 本柱の竪穴住居の可能性が強い。柱穴の直径は、25~35cm、深さは、38~55cm、柱間寸法は、P1 の柱穴から時計回りに 2.45・2.42・2.35・2.57m を測る。土壙の平面形は不整円を呈し長軸約 67cm、短軸約 60cm、深さ約 73cm を測り、埋土内に炭を多く含む。壁面や底部は焼けていない。土壙内から弥生時代後期の土器片が出土した。

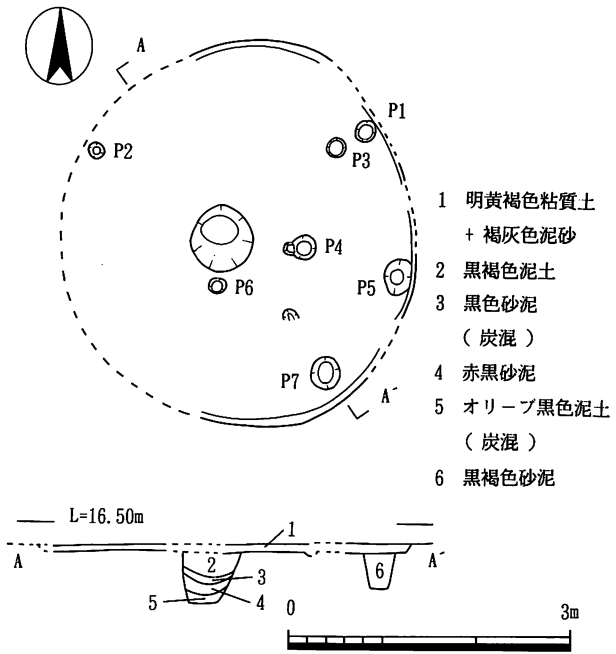


図32 竪穴住居 1 実測図 (1/80)

掘立柱建物 3 (図31) 調査区の西よりで検出した、南北 1 間、東西 2 間以上の東西棟の建物である。規模は、南北柱間約 2.35m、東西柱間 1 間約 2.25m の等間である。柱穴の直径は 20~43cm、深さは約 15cm である。柱穴内から古墳時代前期の土師器が若干出土した。

溝 4 (図31) 調査地の南東隅部にあり、僅かに湾曲する。溝の幅は、1.2~1.3m、断面は逆台形を呈し、深さは 0.14~0.27m、埋土は黒褐色砂泥。埋土中から平安時代の緑釉陶器片が出土した。

3. まとめ

中久世遺跡はこれまでの調査から、遺跡内を流路が幾筋も流れることが判明している^{注1}。今回の調査地はこれらの流路に隣接した微高地と考えられ北隣接地での発掘調査成果を踏まえると、弥生から古墳時代にかけての集落の中心部に位置していると推定される。

(長谷川行孝)

注 1 吉崎伸 『中久世遺跡発掘調査概報 平成元年度』 (働京都市埋蔵文化財研究所 1990年)



写真23 調査前全景（南から）



写真24 西試掘トレンチ全景（北から）

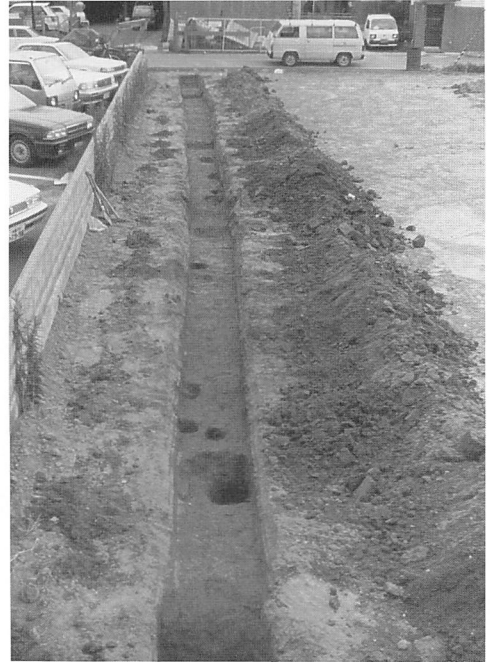


写真25 東試掘トレンチ全景（北から）



写真26 A調査区全景（北から）

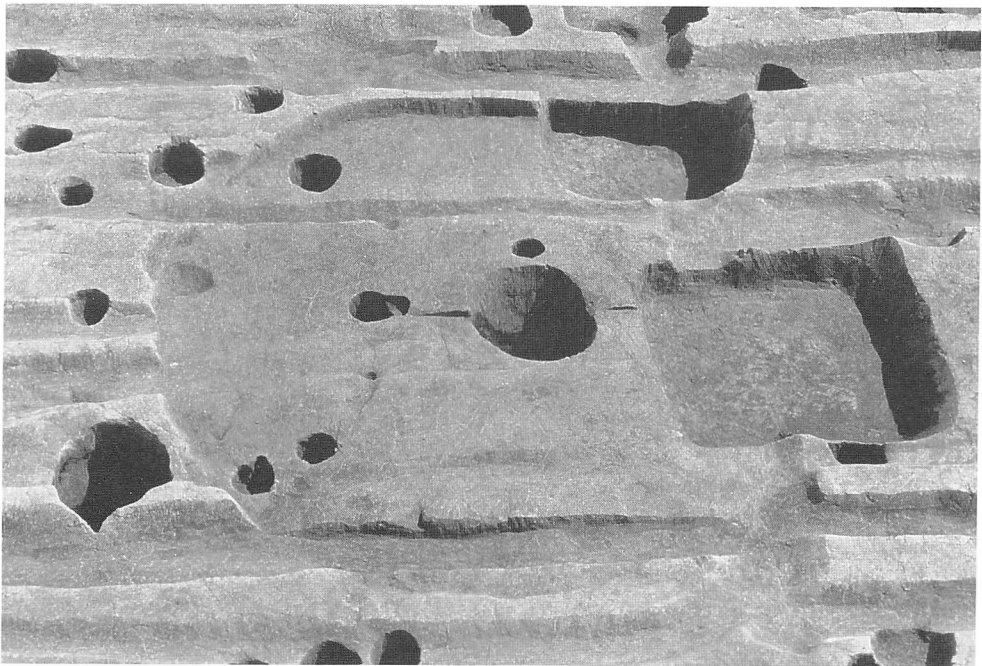


写真27 竪穴住居1（北から）

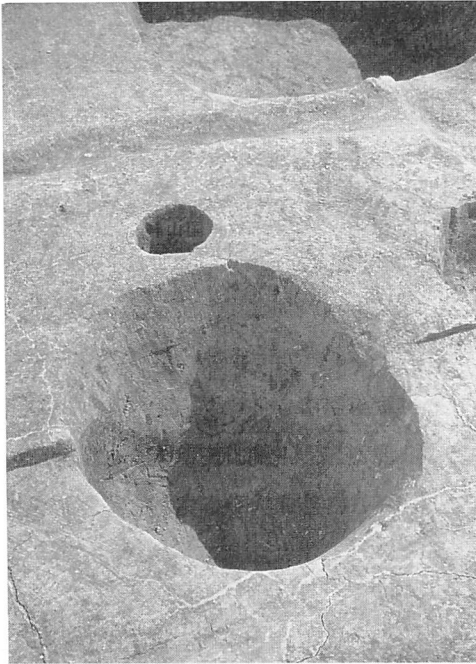


写真28 竪穴住居1の中央土壙（北から）

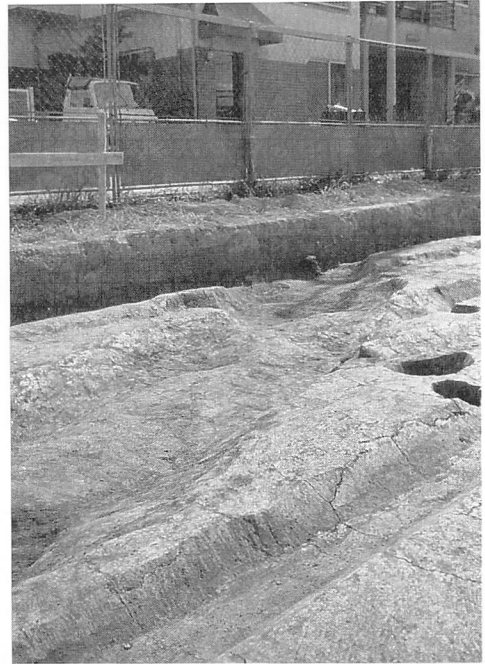


写真29 溝4（北東から）



写真30 B調査区全景（南から）

VIII その他の調査

平安京右京五条二坊十五町跡

1. 調査経過

調査地は京都市右京区西院北矢掛町42番地で、
条坊制では平安京右京五条二坊十五町東一行北
五・六門跡及びび道祖大路東半分^{みなど}に該当する。

6階建の集合住宅建設に先だって、試掘調査
を実施したところ、地表下0.8mで平安時代前期
の瓦や土器を含む南北溝跡が検出され、しかも
遺構の残存状況が頗る良好であったため、部分
的な調査を実施して一部遺構の検出を試みた。

この調査は平成2年11月13日から19日にかけて
実施し、さらに翌平成3年1月初旬に行われ

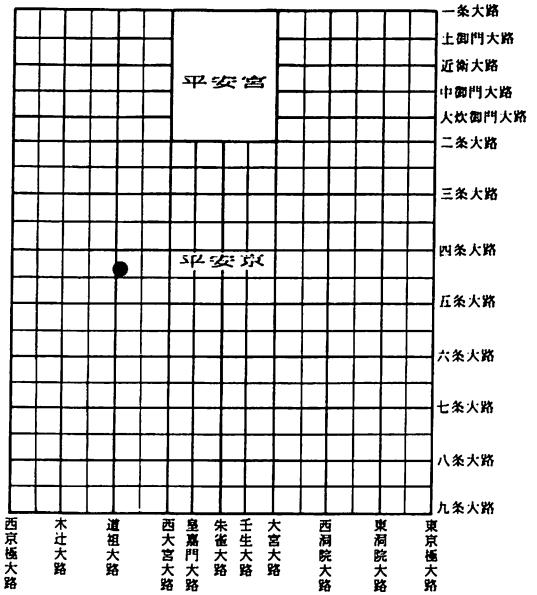


図33 平安京条坊図（調査位置）

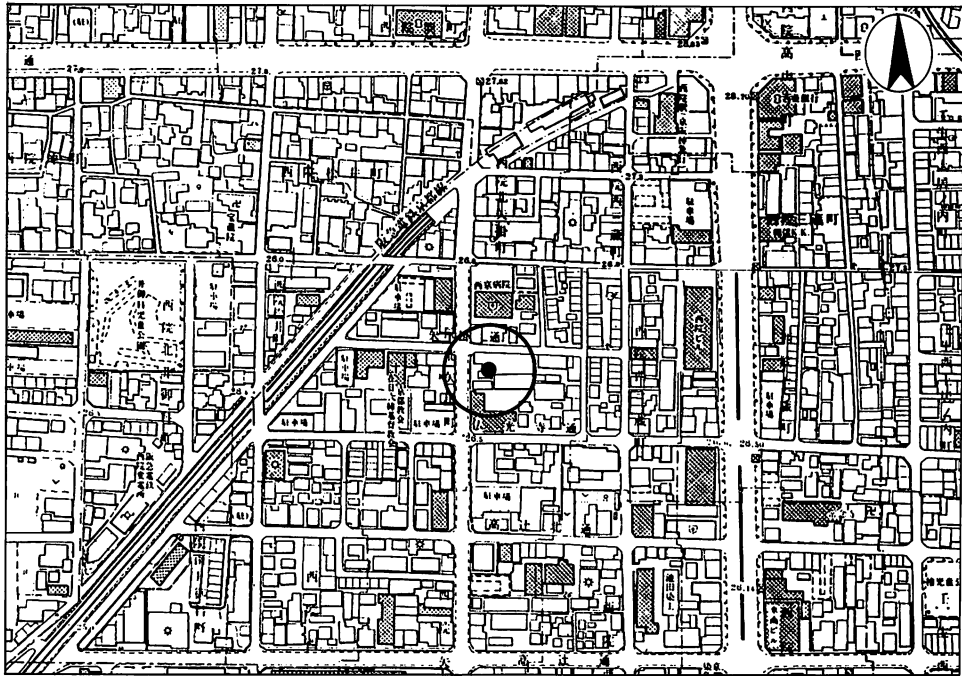


図34 調査地位置図（京都市都市計画基本図〔山ノ内・西京極〕部分使用，1/5,000）

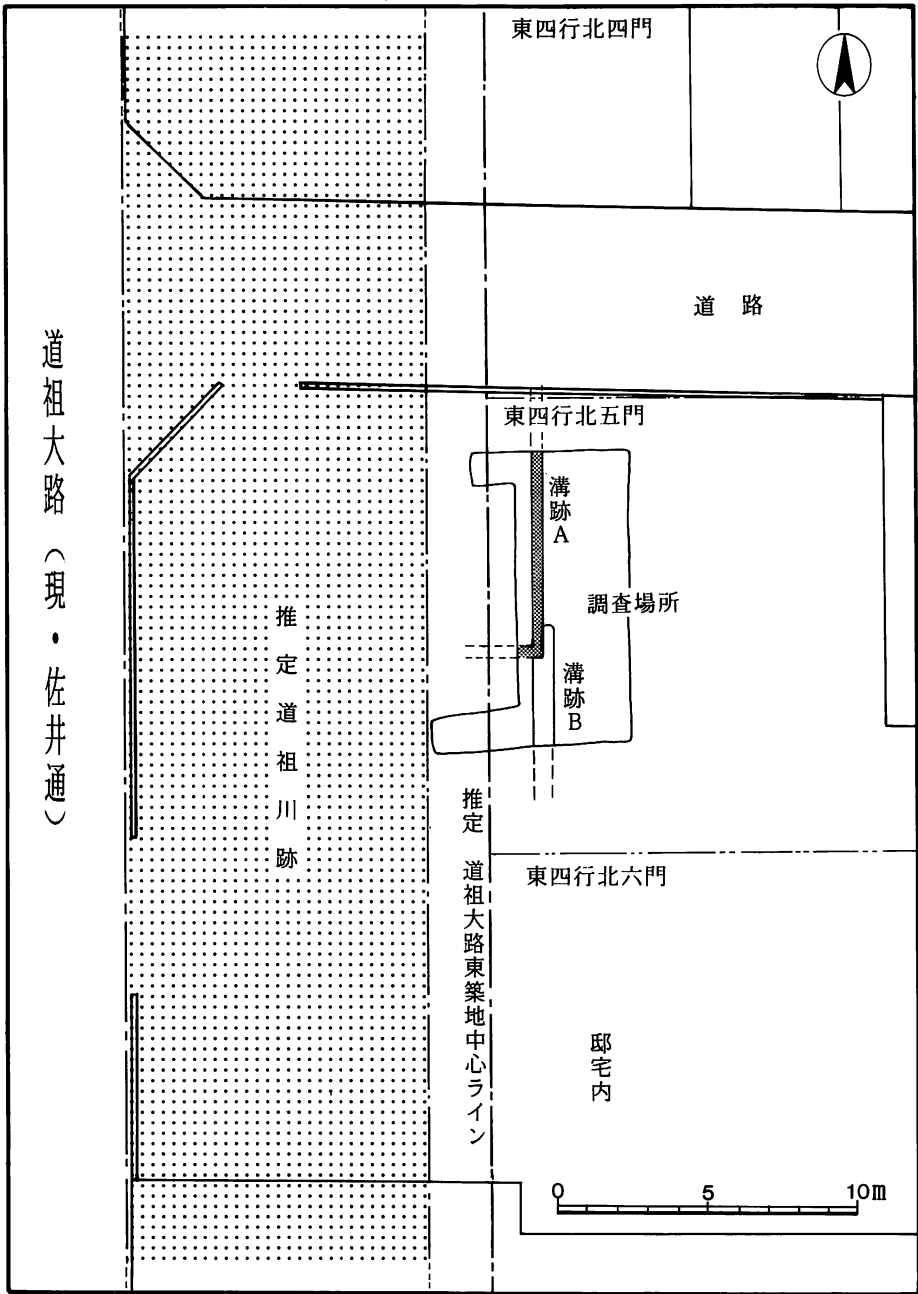


図35 調査地付近見取図 (1/250)

た建築基礎工事に際しても立会調査を実施し、重要な成果を得たため、今年度の調査報告に掲載することとした。

調査場所は、佐井通りに面した東側の敷地で、調査面積は約44㎡と狭小なものである。

検出した遺構は、南北溝跡・築地・建物跡などがあり、既知の平安京復元モデルから、今のところ道祖大路東築地並びに邸宅内溝跡と建物跡と考えている。

2. 遺 構

(1) 溝 跡

敷地の西端、佐井通りから東に13.5mの所からみつかった南北溝跡は、現地表から0.9m余り、幅50~60cm、深さ40~50cmで、長さ9.3mを検出した。溝底は現地表から1.4m余りでU字形を呈し、残存状況は極めて良好である。

この溝跡は道祖大路東築地の邸宅内の溝とみられ、調査区北端から南へ6.6mの所で西へ本流が折れ曲がるものの、さらに南方へ浅く幅を増して溝が続いている。折れ曲がった溝は、邸宅西側の築地の下を潜り、道祖大路の東側にあった道祖（佐比）川に繋がっていた可能性がある。

この溝は黄褐色粘質土の地山を掘り下げた浅いもので、底の一部は南方でさらに下層の黄灰色シルト層まで達し、側面には、溝の開削時又は改修した際の鋤か鍬の削り痕が明瞭に残る。

この溝が折れ曲がる場所から北へ4m余りの溝内に、確認できるもので7本の木杭が、塞き止めるように打たれていた。杭は板状の木材の先を尖らしたものと、丸杭の2種があり、想像をたくましくすれば、溝が先で折れ曲り築地下を通過する際に暗渠が詰まること

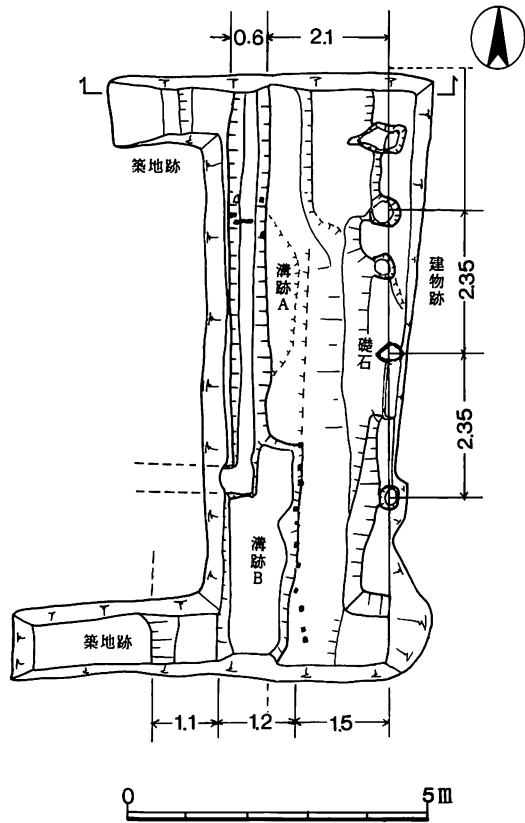


図36 遺構実測図（黒点は杭列，1/125）



写真31 建物跡西側に沿って検出した石と遺物(焼け炭片を含む)北から



写真32 完掘状況(南から)

を防止するため、溝に流入するゴミを溜めるための「しがらみ」的な役割をしていた可能性がある。この付近の溝内には、土師器や須恵器・緑釉陶器などの土器や瓦のほか、焼け炭が多量に混入していた。また溝の上層には、拳大からひと抱えもある河原石に混じって、瓦、土器、木炭や加工木の破片などが多量に混入しており、火災にかかる建築物や生活用品を一括して投棄したものが低い溝周辺に残存したものとみられる。ただし溝内と溝上方とでは、河原石の存在の有無以外に遺物の変化はなかった。

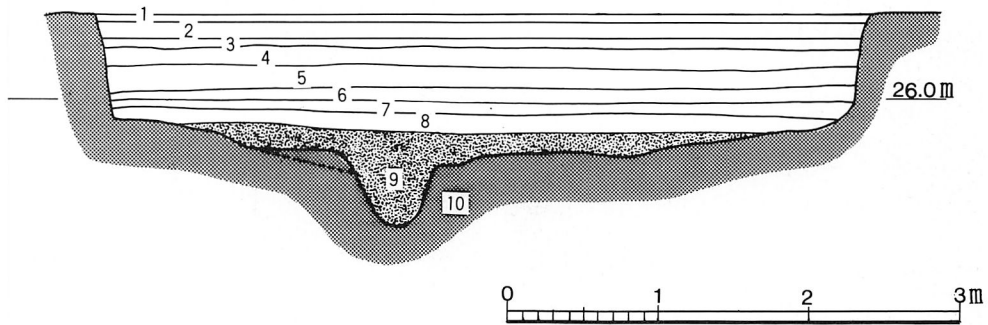
溝が折れ曲がる所より南方に続く溝には、遺物はあまり含まれず、幅も1.2mと広くなり、溝肩にそって杭が打ち込まれていた。またこの溝を埋める土と北方の溝とは異なり、溝上層も遺物や河原石も少なく、この付近に溝を渡す橋の存在も考えられる。

(2)築地跡

調査区の西に当たり、明確には遺構は検出していない。ただし、南北溝上層で検出した幅4m程の河原石を含む遺物包含層下の地山が、西側で高くなることが判明しており、その付近に削平を受けているものの凸地で道祖大路東築地が残存している可能性がある。

(3)建物跡

調査区の東端の地表下約0.75mで礎石を1個を検出した。その南北に2.35mの間隔で2



- ① アスファルト舗装 ② アスファルト ③ パラス層 ④ 石炭ガラ層
- ⑤ 旧耕作土（畑） ⑥ 褐色粘質土層（床土） ⑦ 褐色粘質土層
- ⑧ 暗褐色粘質土層（瓦・土師器・須恵器・緑釉陶器・焼炭ほか混み）
- ⑩ 粘土混黄褐色砂礫層（地山）

図37 調査区北壁土層図 (1/50)



写真33 石及び遺物の検出状況（北から）

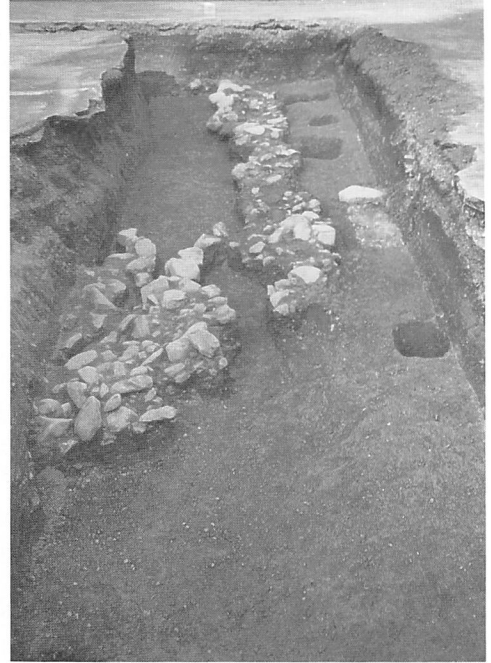


写真34 石及び遺物の検出状況（南から）



写真35 邸宅の内溝跡と築地（東から）

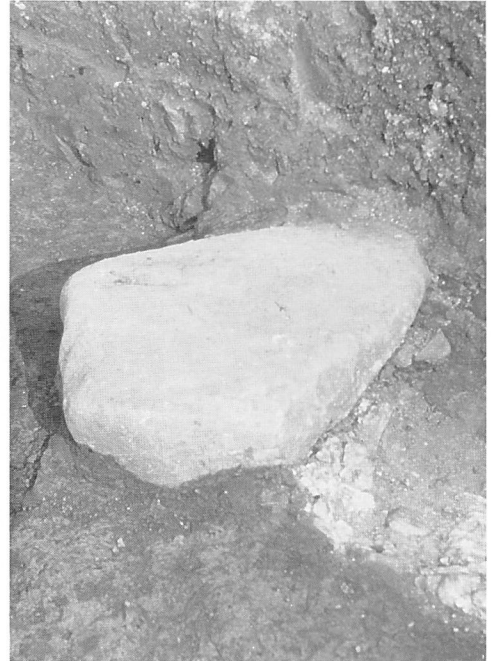


写真36 中央東端で検出した礎石（南から）



写真37 溝跡全景（西へ折れ曲がる部分）南東から



写真38 南北溝跡と溝内の木杭（南から）

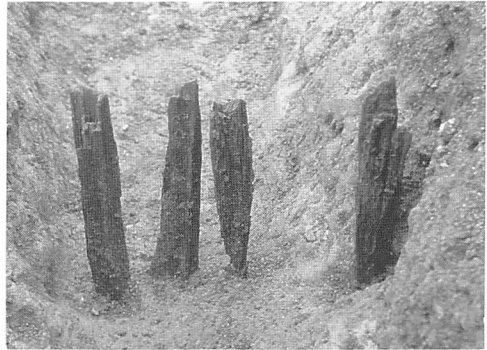


写真39[右上] 杭部分（北から）

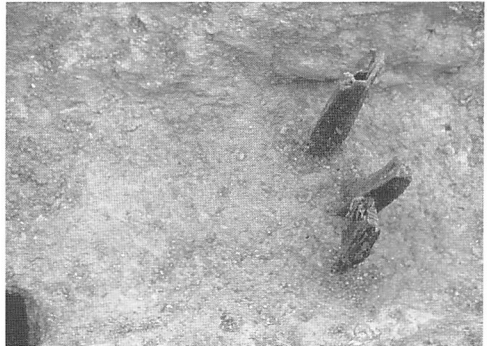


写真40[右下] 杭部分（上方から）

個のピットを検出したことから、建物の西端の柱列を検出したものとみられる。検出した礎石の南方ピットの南では柱跡を示す痕跡はなく、このピットが建物の南端である可能性がある。この建物の軸線は南北溝とほぼ平行であり、溝の肩からは基壇状に20～30cm程高く、基壇肩に沿って先述の河原石や多量の遺物が残存していた。この中に含まれる遺物は、溝内検出遺物とは時期差が認められないことから、溝が埋没してからあまり時間を経ずに、二次的に埋没したものとみられる。ただし溝の中には河原石は混入しておらず、溝が埋まった後に石を含む遺物が一括投棄されたものと考えられる。この河原石は、建物に平行しているものと、そうでないものがあり、溝が西に折れ曲がる所に沿ってとぎれ、南方へは続かない。

この河原石や瓦・土器・焼け炭などの遺物の混入状況から、道祖大路東築地から邸宅内建物の間に、火事の後始末の灰材を一括投棄されたものであろうか。

3. 遺物

出土した遺物はコンテナに10箱ほどあり、内訳は瓦が7箱、土器類が3箱程度で、ほかに取り上げ不可能な木製遺物があった。遺物はほとんどが平安時代前期（9～10世紀代）に属するものである。

(1)瓦類（図38）

軒先瓦は11点出土し、内1種3点が軒丸瓦、2種8点が軒平瓦、そのほかは平・丸瓦であるが、1点だけ緑釉丸瓦の破片を含む。

1・2・3は複弁四弁軒丸瓦で、今回の調査地で軒丸瓦はこれ1種類しかない。中房の蓮子は1+4とみられ、焼胎、土成は良好で、表面が暗灰色で中が淡白色を呈するものと、表面が淡白色で中が暗灰色をしたものがある。2は瓦当裏面に瓦衣の布目圧痕を明瞭に残し、1も布圧痕がかろうじて認められる。

この特徴的な文様をもつ複弁四弁の瓦は一本造りで、外区珠文数は16個とみられ、後の弁に対応した珠文数が12個の定型化した四弁のものより、さらに古い形式のものである。

4は京外より搬入された有郭重弧文軒平瓦で、平安宮・京内ではよく出土する。

5～11はすべて同文の軒平瓦で、5の瓦から文様面の右半下外区に『西』銘を横向きにしていることが分かる。文様の中心側文は対向C字形で、左右に蕨手が3転し、平安宮・京や西寺からも出土している。胎土は良好で焼成も普通である。表面が灰色で内部が淡白

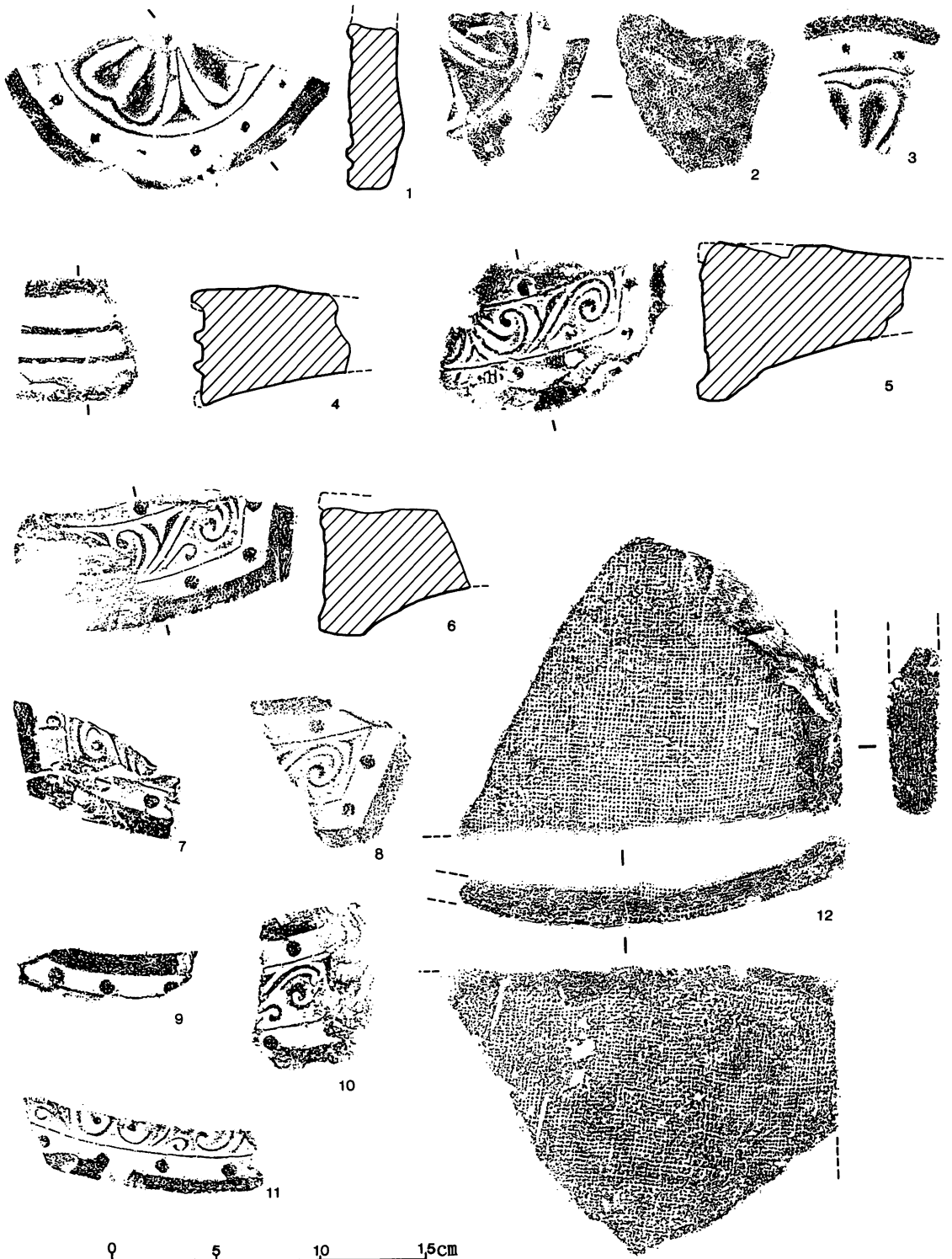


图38 軒瓦，平瓦拓影·实测图 (1/3)

色のものと、それとは逆のものがある。文様両端のやや直線的で伸びやかな蕨手が楕円状に巻き込む特徴は、洛北「上庄田」瓦窯製瓦の文様形に近い。

今回の調査で出土した軒丸瓦は、複弁4弁が1種で、軒平瓦も4を除くと同じ対向C字形左右3転式の瓦である。両者は胎土や焼成が酷似しており、複弁4弁軒丸瓦と『西』銘対向C字形左右3転式軒平瓦はセット関係にある可能性がある。ただし出土点数が少ないため結果は今後の調査に期待したい。

そのほか緑釉丸瓦（6×4.5cm程度）の小破片が1点出土している。

また12は平瓦の全体に瓦衣圧痕を残すもので今回15点ほどみつまっている。瓦衣圧痕は連続して付着しており、作瓦時に平瓦を一枚ずつ包み込んで成形した後、端面ほかをケズリ調整している。中に文様部の欠損した軒平瓦も含まれる。

(2)土器類 (図39)

土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入白磁などがある。

[土師器類] コンテナに1箱余り出土したが、破片が多く実測できるものは土師器の杯1, 2, 3で、内部はナデ調整、外部と底は表面をケズリ調整している。土師器は削り成形を主体としたものが多く、平安時代前期の特徴をよく示している。

そのほか高杯の破片が20数点あり、甕・羽釜などの破片もいくつか出土している。

[須恵器] 瓶子4・杯5, 6のほか椀・甕・水甕・壺などの破片がコンテナに半箱程度出土している。

[緑釉陶器] 椀7～20があり、そのほかにも椀・皿の破片がコンテナ1/4箱程度出土している。

[灰釉陶器] 21～22のほか椀・壺などの破片がコンテナ1/4箱程度出土している。

[輸入白磁] 多数の土器のうち、輸入白磁の小破片が1点だけ出土している。

4. ま と め

調査の主要因となった集合住宅建築計画は、試掘調査段階で遺構が残存良好であることが判明したことから、設計変更により工事掘削場所を大幅に縮小させた。その結果、調査面積が狭小となったものの、いくつかの重要な成果をあげることができた。

平安京の道祖大路とその東側邸宅跡については、今回調査地の北方で、昭和63年5～8月に行われた発掘調査や、ここより南方の、五条通りと佐井通りの交差点の北方東側の発

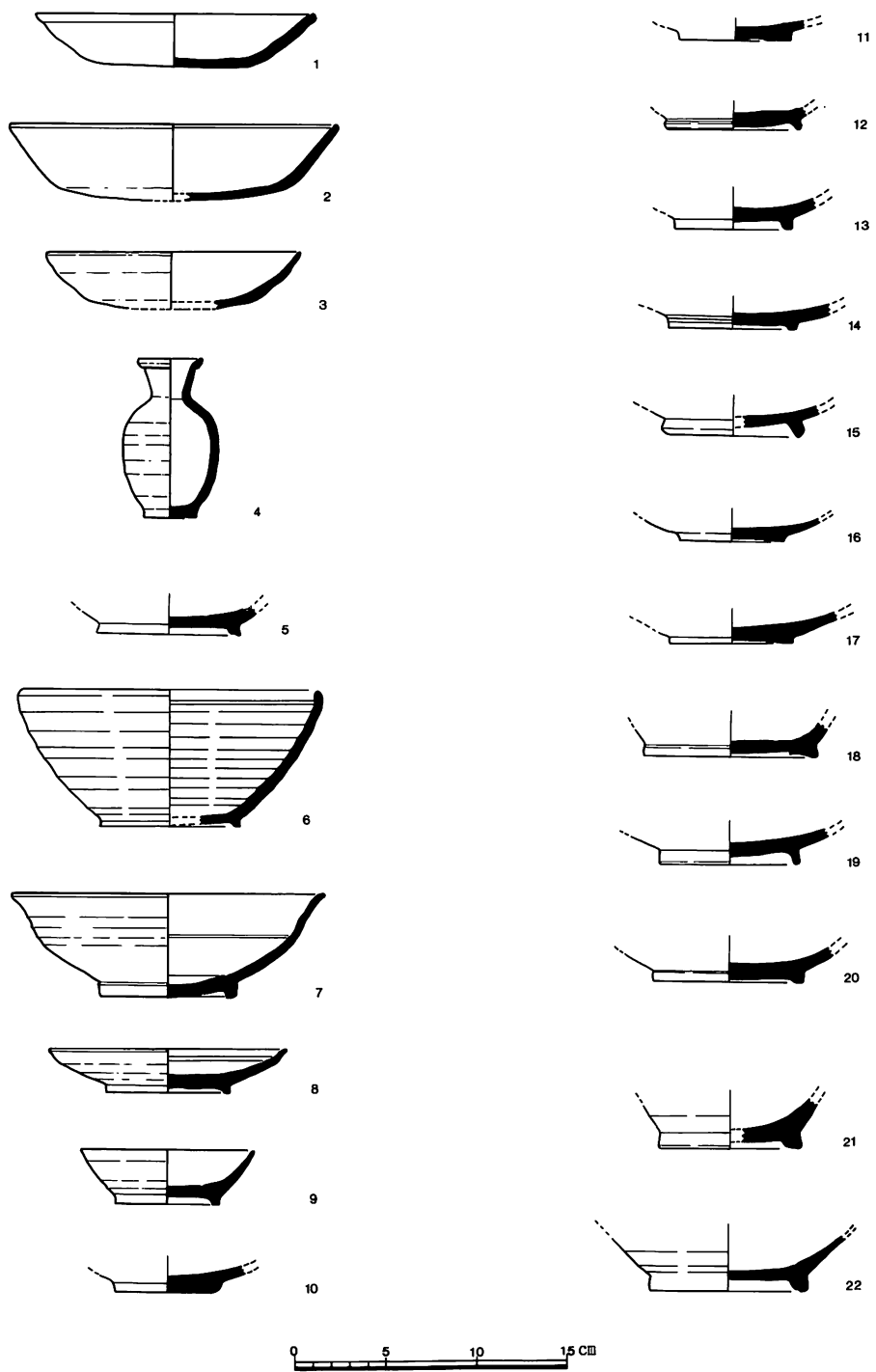


图39 土器实测图 (1/4)

掘調査などの例（未報告）がある。

北方の調査場所は、佐井通りを三条通りから南に入った東側の敷地（平安京右京四条二坊跡）で、検出された推定道祖大路東築地推定ラインは、今回想定した築地位置に近似している。ただしこの発掘調査で検出された築地の内側溝は、幅が6～9mもある底の浅い溝で、今回検出したものとは異なる。また南流する道祖川は、東築地の際から西に幅が9m以上もあり、大路の幅8丈（23.86m）の少なくとも半分あまりまでが川となっていたことが判明している。川の底は洪水による凹凸が激しく、東肩は大路築地のライン近くまで及んでいた。また溝内には10世紀と12世紀の遺物を含む砂礫が堆積しており、その頃に土砂を多量に堆積させるような大きな流れが発生した可能性を示している。

今回の現場における工事着工後の立会調査でも、敷地西端から東へ10m余りまで、川跡を示す砂礫層を検出しており、ここも同様な川の流れがあったことを裏付けている。

検出した築地内溝跡からは、遅くとも10世紀代頃までの土器や瓦を含み、焼けた木製品などが含まれる。検出状況から短時間に埋まったらしく、付近で火災が発生した可能性を示唆している。この付近の邸宅の主についてはまったく不明であるが、当該地の西方は荘園である小泉庄があり、北方は一町おいて淳和院となっている。

淳和院は9世紀前半、淳和天皇が右京にあった南池院を整備して後院としたもので、天長10年（833）2月28日には、ここで譲位も行われ、また同年8月25日には嵯峨・淳和両上皇が遊宴を催しており、淳和上皇は譲位して以後7年間をこの院で過ごしている。

淳和上皇は承和7年（840）5月に死去し、その後、淳和院は皇后正子（嵯峨天皇第一皇女）が寺とし自ら落飾して在所とした。この院は貞観16年（874）4月19日夜に失火により焼亡している。その後再興されたものの廃院の時期については明らかでない。

『日本三代実録』巻25の貞観16年（874）4月の条には

十九日丁未。丑刻。淳和院失火。飛燼轉行。飄落禁中。諸衛警陣。左右近衛分登東西諸殿屋上。迎遏飄燼。右大臣藤原朝臣基経。大納言藤原朝臣常行。参議左大弁藤原朝臣家宗。昇殿侍衛。勅遣左衛門権佐藤原朝臣維範。左兵衛佐源朝臣平。率兵衛衛士等。救問火災。参議左衛門督大江朝臣音人率僚屬。馳往救難。黎明火勢折滅。是夜。淳和太皇太后御素車出宮避火松院。在院西南。

夜半に失火した淳和院の火災は、燼が飛び伝わって、飄が禁中（平安宮）にまで達して落ちたとされ、諸殿の屋上に登って飄燼を遮ったとしている。淳和院の火災は明け方になってようやく鎮火したとし、この時、正子は素車に乗って西南にあった松院に避難したと

記されていることから、淳和院の西南には別亭である松院があったことが分かる。

当該調査地より検出した、火災に伴うとみられる焼け炭を多く含む一括遺物は、時期的にこの焼亡記事に関係するものとも考えられる。もしこの時の火災に伴うものであれば、一括遺物は9世紀の第3四半期以前のものとなる。

淳和院の火災によって、火の粉が1 km以上も北東に離れた大内裏まで達したというのであるから、相当大規模な火災と考えられる。しかし火災がどの程度の規模で被害を及ぼしたのか、また文献から院の南西にある松院は当該地に近いにもかかわらず、罹災を被っていないなどの問題点もあり、当該調査地で検出した遺物については、今後付近の調査結果を待って結論付けたい。

(梶川敏夫)

試掘調査一覧

I 平成2年度 1～3月期

平安宮

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
大炊寮	上・竹屋町通猪熊西入藁屋町536	01/28	GL-0.66mで弥生時代の南北溝、GL-0.84m以下地山。	4
大膳職	上・日暮通丸太町下る南伊勢屋町751他	01/30	攪乱のみ。	5
西雅院	上・日暮通丸太町上る西入西院町747-11	03/12	GL-0.4mで江戸時代の土壌、GL-1.4mで地山。	13

平安京右京

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
一条三坊六町	中・西ノ京伯楽町5-1	03/20	GL-1.05mで平安時代の湿地堆積。	18
四条一坊一町	中・壬生朱雀町29-5	03/18	GL-1.02m以下、流れ堆積。	17
五条二坊六町	中・壬生檜町8,9	02/01	1 T, GL-0.6mで時期不明の溝・土壌。2 T, GL-0.6mで平安時代の包含層。3 T, GL-0.3mで楊梅小路北側溝を検出。	6
六条三坊十三町	右・西院六反田町39	01/11	GL-1.8～2.3mで地山。	1
七条二坊八町	下・西七条東御前田町39	01/18	GL-1.6m以下、流れ堆積。	2
七条三坊十六町	右・西京極豆田町31	03/29	検出できず。	19

平安京左京

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
一条三坊二町	上・中立売通西洞院西入三丁町460他	01/24	1 T, GL-1.4mで鎌倉～室町時代の土壌・溝を検出。4 T, GL-1.3mで鎌倉～室町時代のピット数基検出。	3
三条四坊二町	中・東洞院通押小路下る舟屋町406	02/22	1 T, GL-1.9mで平安時代の土壌・柱穴・井戸状落込み。2 T, GL-1.8mで平安～室町時代の溝状遺構。	9
四条二坊十二町	中・油小路通四条上る藤本町549	03/15	1 T, GL-1.13mで平安～室町時代の土壌6基。GL-1.5mで平安時代の土壌群。設計変更を指導する	16
九条四坊六町	南・東九条南山王町1-1	03/13	2 T, GL-0.6mで平安～室町時代の柱穴・土壌・溝を検出。3 T, GL-0.8mで鎌倉時代の落込み。4 T, GL-0.5mで鎌倉時代の溝・土壌4基を検出。設計変更を指導する。	15

太秦地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
広隆寺旧境内	右・太秦峰岡町36	03/01	GL-1.7mで時期不明の土壌・柱穴・竪穴住居状遺構を検出。発掘調査を指導する。	12
仁和寺院家跡	右・常盤一ノ井町8-3他	03/12	GL-0.5mで平安時代の溝、弥生時代の包含層を検出。発掘調査を指導する。	14

洛東地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
中臣遺跡	山・東野森野町23-4他	02/06	GL-0.8m以下、地山。	7

鳥羽地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
鳥羽離宮跡	伏・竹田浄菩提院町43-2	02/18	1 T, GL-1.6mで古墳時代の包含層。2 T, GL-0.32mで鳥羽離宮期の整地層、GL-0.6mで流路堆積、GL-1.7mで古墳時代の包含層。3 T, GL-1.08mで鳥羽離宮期の池状堆積。設計変更を指導する。	8
鳥羽離宮跡	伏・竹田浄菩提院町84,85	02/25	1 T, GL-0.7mで鎌倉時代の包含層。2 T, GL-0.69mで瓦積み井戸を検出。発掘調査を指導する。	10

長岡京地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
長岡京	伏・淀樋爪町457-2	02/27	検出できず。	11

II 平成3年度 4～12月期

平安宮

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
応天門跡	中・聚楽廻南町38	07/19	GL-0.7mまで近世の泥土層、以下地山。	52
酒殿釜所	上・智恵光院出水下分銅町557	04/17	GL-2.0mまで近世の盛土層、以下地山。	21
中務省	上・下樫木町通浄福寺西入中務町490-90	07/22	GL-0.95mで平安時代?の包含層。発掘調査を指導する。	53
中務省	上・土屋町通丸太町通上中務町491-10	09/24	GL-0.95mで平安時代の塙組溝を検出。発掘調査を指導する。	63
中務省隣接地	上・下立売通千本東入中務町490-43	10/03	GL-0.28mで平安時代の瓦・凝灰岩等を含む包含層を検出。発掘調査を指導する。	65
中和院	上・下立売通千本東入中町419	12/09	GL-0.52～0.62mで近世の遺物包含層。検出遺構なし。	83
朝堂院	中・聚楽廻東町2	04/24	現代の攪乱層のみ。	24
内裏桂芳坊	上・浄福寺通出水上白銀町260-1	10/11	近代の攪乱・盛土層のみ。	67
民部省	上・智恵光院通竹屋町下主税町828	06/17	GL-1.2～1.4mまで近世の盛土層、以下地山。	41

率分蔵・聚楽第跡	中・中立売浄福寺西入加賀屋町404-1,他	07/18	GL-1.68mまで近世～近代の盛土、以下地山。	51
----------	-----------------------	-------	--------------------------	----

平安京右京

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
一条四坊三町	右・花園木辻南町12-11	04/25	GL-0.24~0.30mで平安時代の柱穴群を検出。発掘調査を指導する。	25
二条三坊五町	中・西ノ京塚本町14,14-4,5	05/02	1 T, GL-0.5mで地山。時期不明の柱穴3。2 T, GL-0.5mで時期不明の包含層。GL-0.8mで地山	27
三条三坊一町	中・西ノ京西中合町	05/09	GL-2.0m前後まで時期不明の流れ堆積。	29
四条一坊三・六町	中・壬生花井町3	12/16	A区 GL-1.1mの地山で近世の土塋・溝などを検出。B区 GL-1.17m以下、池状堆積。	86
四条四坊十三町	右・斎院笠目町6	06/21	GL-1.9m以下、時期不明の湿地状堆積。	43
五条三坊五町	右・西院太田町26-1	06/07	1 T, GL-1.0mで平安時代前期の遺物を含む池を検出。2 T, GL-1.0mで平安前期の池及び州浜を出。設計変更による遺構保存を指導する。本文4ページ	40
五条四坊十三町	右・西院西田町90-1	10/14	GL-1.5mで中世の包含層、GL-1.7mで地山。	68
五条四坊十六町	右・西院東貝川町40,41	05/27	GL-1.4mまで盛土・耕土層、以下地山。	36
六条一坊七町	中・中堂寺北町44	10/25	GL-0.82mの床土面で調査終了。	72
七条四坊七町	右・西京極東池田町42	08/26	GL-0.7~1.4mで時期不明の池状堆積。	59
七条四坊十五六町	右・西京極西池田町9-1	07/17	GL-0.6m以下、御室川の氾濫堆積土。	50
八条一坊三町	下・歎喜寺町	12/25	1 T, GL-1.92mで湿地状堆積。2 T, GL-1.8mで平安時代の南北溝。推定朱雀大路西側溝。	89
八条一坊六町	下・歎喜寺町	12/02	検出遺構なし。	81
八条二坊十六町	下・西七条南衣田町17,19	05/17	GL-0.8mで地山。平安～近世の遺物を含む東西方向の溝（推定塩小路北側溝）。	32
八条三坊八町	下・七条御所ノ内西町45	05/07	GL-1.85mまで近代の盛土層。以下地山。	28
八条四坊七町	右・西京極畑田町55-2	12/13	GL-0.93mで時期不明の包含層、GL-1.23mで地山の砂礫層。	85
九条三坊十六町	南・吉祥院中河原西屋敷町3	05/13	GL-1.35mまで盛土・耕土層、以下地山。	30
九条三坊十六町	南・吉祥院前河原町9	10/23	GL-1.1~1.24mで流れ堆積層。	71
九条四坊十四町	南・吉祥院内河原町3-2,4,6,7-1	10/21	検出遺構なし。	70

平安京左京

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
二条二坊十一町	中・夷川通堀川東入西夷川町563-1,堀川通竹屋町下る8丁目539-3	07/01	1 T, GL-1.05mで室町時代の包含層、GL-1.6mで鎌倉時代の包含層。2 T, GL-0.5mで室町時代の包含層、GL-0.9mで室町時代の西への落込み。	45
三条二坊十三町	中・西洞院姉小路下る姉西洞院町531	06/19	GL-1.3mまで、近世の盛土層、以下地山。	42
四条一坊五町	中・壬生坊城町20-1	10/16	1 T, GL-0.84mの地山で平安時代の東西溝、溝より南は、地山が一段下る。2 T, 1 T同様の地山の段差を検出。	69

四條一坊十三町 四條三坊十町	中・錦大宮町113 中・蛸薬師通烏丸西入橋弁慶町 225,227,637-6	11/11 04/30, 05/29	GL-0.6~1.0mで地山。検出遺構なし。 1 T, GL-1.3mで室町時代の包含層、GL-1.7m以下地山。室町時代の土壌1基。2 T, 近世の攪乱層のみ。3 T, GL-1.8mで鎌倉時代の包含層、GL-2.0mで平安後期の包含層。	76 26
四條三坊十一町	中・烏丸通錦小路上手洗水町 569他	07/12	1 T, GL-1.9mで室町時代の包含層。近代・江戸時代の井戸各1基。2 T, GL-1.6mで室町時代の包含層、GL-2.0mで室町時代の土壌1基、GL-2.0mで古墳時代(?)の包含層。	48
五條三坊六町	下・室町高辻上る山王町561	05/15	1 T, GL-1.5mで室町時代の包含層及び土壌5基。2 T, GL-1.1mで室町時代の包含層。GL-1.7mで鎌倉時代の土壌1基。	31
五條三坊十六町	下・四條通烏丸東入長刀鉾町20他	08/05	1 T, GL-1.0mで室町時代の包含層。2 T, GL-0.78mで室町時代の包含層、GL-1.1mで室町から鎌倉時代の包含層。発掘調査を指導する。	56
六條一坊二町	下・中堂寺命婦町1	06/24, 25	A区, 現代の攪乱層のみ。B区, GL-1.05mで室町時代の包含層、GL-1.13mで室町時代の土壌1基。	44
六條三坊七町	下・室町と新町の間五条上る小田 原町244-1,2,3,東鋸屋町179	09/11	GL-0.6mで六條坊門小路の路面と北側溝を検出。発掘調査を指導する。本文12ページ	62
七條三坊八町	下・室町通西入乾町290-1	10/28	1 T, GL-0.7mで江戸時代の包含層、GL-1.1~1.15mで鎌倉時代の包含層、GL-1.4~1.45mで地山。地山面で時期不明の東西溝・土壌を検出。2 T, GL-1.18mで鎌倉時代の包含層。	73
八條二坊十一町	下・油小路塩小路下る南不動堂町 10他,西油小路町1他	09/27	1 T, GL-0.7mで室町時代の包含層。GL-0.7mで江戸時代の南北溝。GL-1.3mで室町時代の土壌1基2 T, GL-1.0mで室町時代の包含層、GL-1.2mで平安時代の包含層。	64
九條大路 九條二坊十六町	南・東九條字賀辺町2-1 南・西九條北ノ内町12他	05/28 12/18	GL-0.7mまで盛土・耕土層、以下地山。 GL-1.8mで平安時代の柱穴・土壌を検出。発掘調査を指導する。	37 87

太秦地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
西野町遺跡	右・太秦西野町21-3,48-2	08/21	GL-1.52mで時期不明の包含層。	58
広隆寺旧境内	右・太秦蜂岡町31	12/04	GL-0.4mで平安時代の東西溝一条を検出。発掘調査を指導する。	82

洛北地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
植物園北遺跡	北・上賀茂桜井町61	10/30	GL-0.5mの地山面で平安時代以降の柱穴2・土壌1基を検出。	74

北白川地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
北白川廃寺	左・北白川大堂町4	06/01	GL-1.0mで北白川廃寺の遺構面を検出。発掘調査を指導する。	38
白河街区跡	左・聖護院西町10	04/15	GL-0.7~1.2mで地山。平安後期の井戸1基、時期不明の東西方向の溝1条。本文14ページ	20
白河街区跡	左・聖護院円頓美町	05/22	GL-0.7mで鎌倉時代の包含層。GL-1.05mで南に下がる鎌倉時代の落込み。	34
法勝寺跡	左・岡崎法勝寺町 岡崎公園内	11/25	GL-0.44mで古墳時代?の流路堆積。	79
成勝寺・岡崎遺跡	左・岡崎成勝寺町9, 円勝寺町26	09/02~04 17~19	1 T, GL-1.5mで平安時代後期の伽藍整地層を確認。2 T, GL-1.0~1.2mで部分的に伽藍整地層確認。発掘調査を指導する。本文19ページ	61
法成寺跡	上・寺町通広小路下る東桜町59, 荒神口通河原町東入亀屋町131	12/20	GL-0.95mで江戸時代包含層、GL-1.23mで地山の砂礫層。	88

洛東地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
六波羅政庁跡	東・渋谷通東大路西入鐘鑄町399, 上梅屋町186-1	04/19	1 T, GL-1.4m以下、近世~近代の湿地状堆積。2 T, GL-1.4mまで近代の盛土、以下地山。	22

伏見・醍醐地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
深草坊町遺跡	伏・深草東伊達町65	04/22	GL-0.24mで奈良~平安の包含層、GL-0.6mで飛鳥時代の南北溝検出。発掘調査を指導する。	23
深草寺跡	伏・深草田谷町1	08/19	GL-0.84m以下、時期不明の湿地状堆積。	57
向島城跡	伏・向島本丸町17	07/10	GL-0.3m以下、時期不明の細砂層。	47

鳥羽地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
鳥羽離宮跡	伏・中島御所ノ内町27-3, 11	06/05	GL-1.15m以下、湿地状堆積。	39
鳥羽離宮跡	伏・竹田真幡木町48, 48-10	07/24	GL-1.2mで鎌倉時代の木組井戸1基。本文31ページ	54
鳥羽離宮跡	伏・竹田真幡木町56-1, 竹田内畑町33-1	11/27	GL-1.98mで弥生時代の包含層、GL-2.05mで地山。地山面で土壌1・柱穴?1を検出。	80
下鳥羽遺跡	伏・下鳥羽北端町	11/07	GL-0.82~0.86mで南北方向の自然流路を検出。	75

南・桂地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
中久世遺跡	南・久世中久世町4丁目19,20	07/15	GL-0.15mで古墳時代の柱穴を多数検出する。本文38ページ	49
中久世遺跡	南・久世中久世町2丁目107	11/18	GL-0.7~0.8mで流路を検出。	77
中久世遺跡	南・久世中久世町2丁目96	11/18	GL-0.2mで地山。検出遺構なし。	78

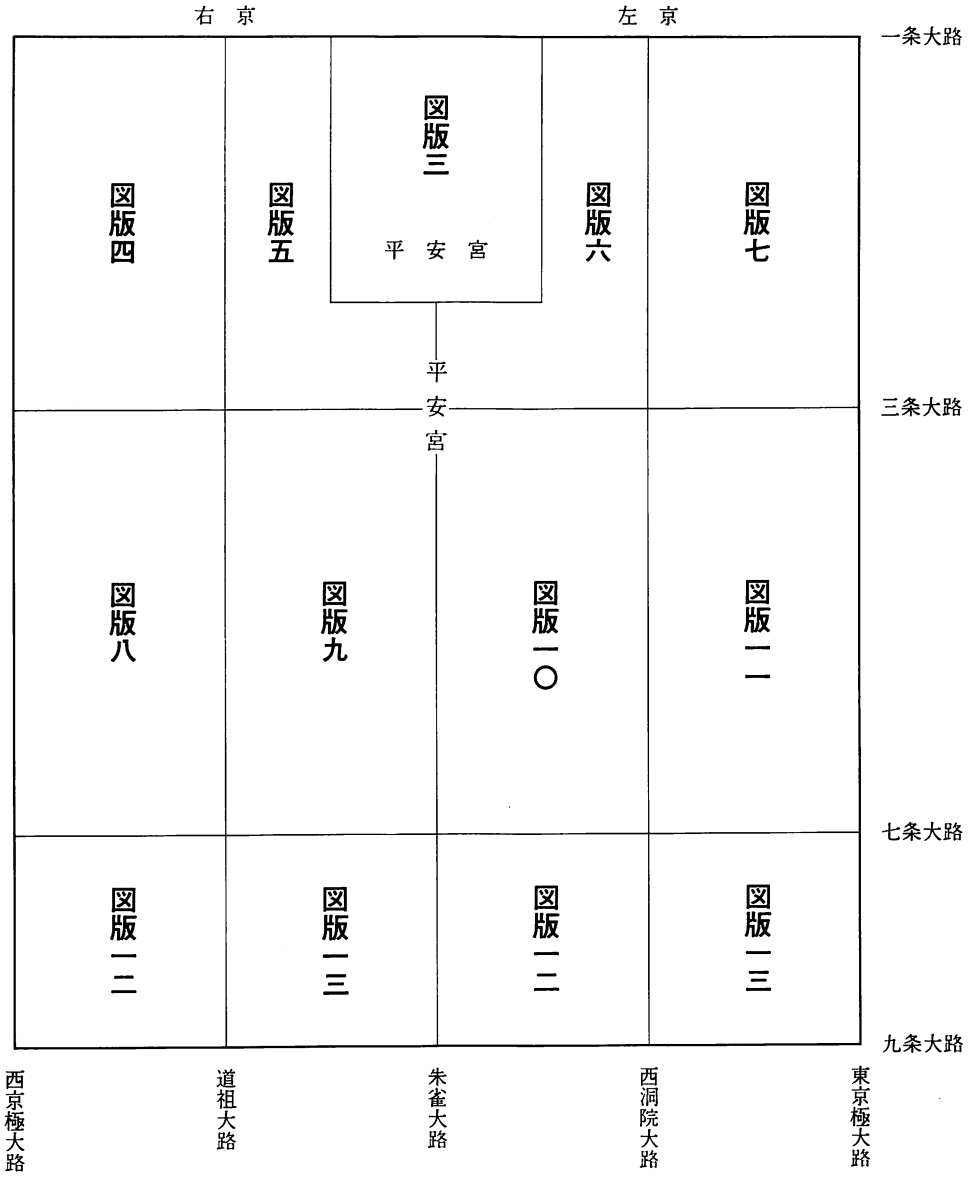
長岡京地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
長岡京跡	南・久世大藪町415,418	05/20	GL-1.0m以下、長岡京期の流路。	33
長岡京跡	伏・久我西出町2-21	05/24	GL-1.0m以下、湿地状堆積。	35
長岡京跡	伏・久我西出町4-15	07/03	GL-1.15で鎌倉時代の包含層。	46
長岡京跡	南・久世築山町240-1	07/31	検出遺構なし。	55
長岡京跡	伏・久我本町11-21	08/28	GL-1.3~1.4mで時期不明の包含層、GL-1.5~2.1mで地山。地山面で時期不明の土壌3基。	60
長岡京跡	伏・羽東師菱川町189-4,190-1,191	10/08	GL-1.15mで平安時代の包含層、GL-1.25mで長岡京期の包含層、GL-1.4mで東二坊大路西側溝を検出。発掘調査を指導する。	66
長岡京跡	伏・久我森ノ宮町15-10	12/11	GL-1.62mで耕土、GL-1.83mで床土、GL-2.05mで黄褐色粘質土。検出遺構なし。	84

版 圖

調査地点位置図

平安京図葉分割図



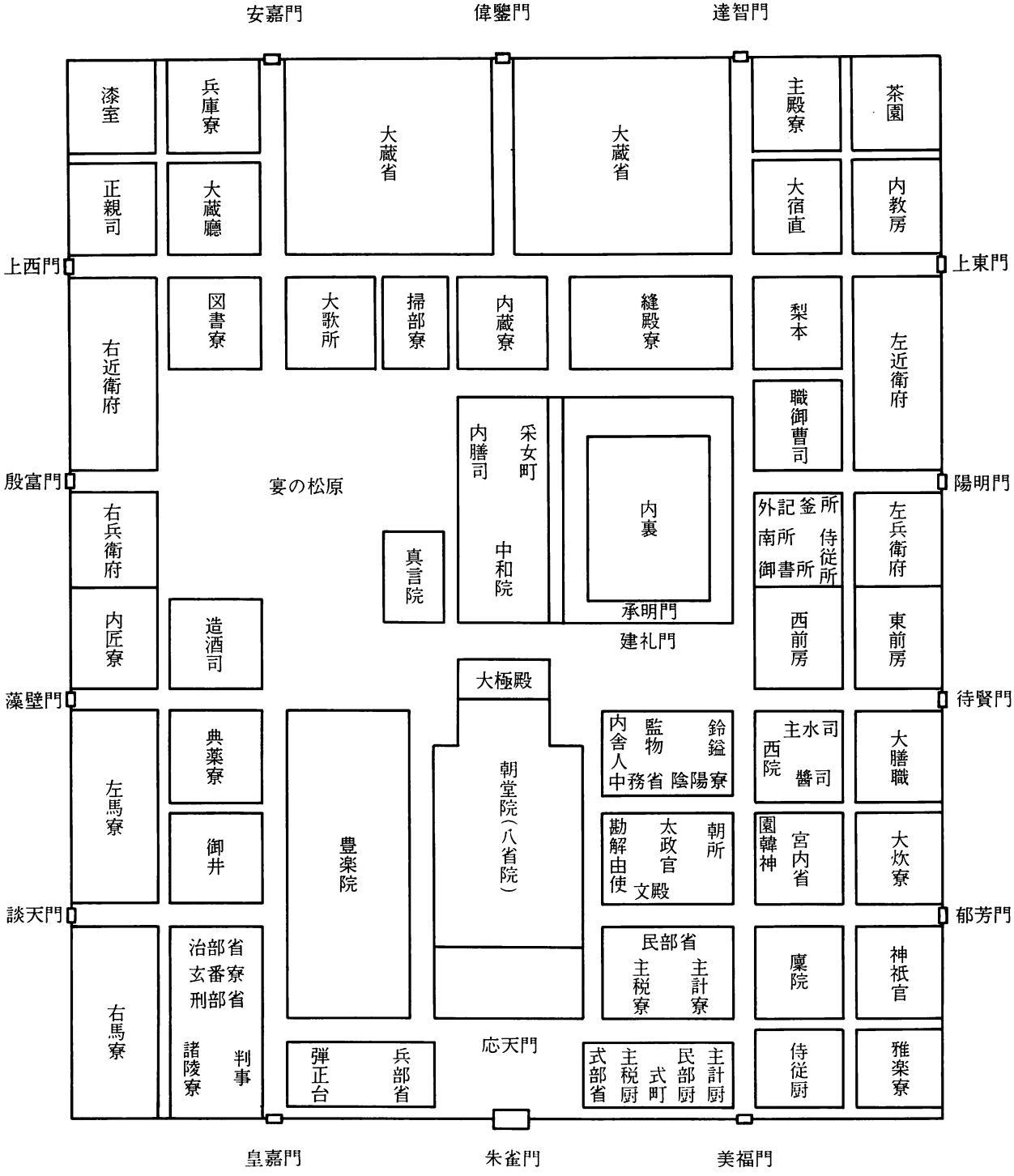
凡例

平成3年試掘調査地点

□ 1月～3月

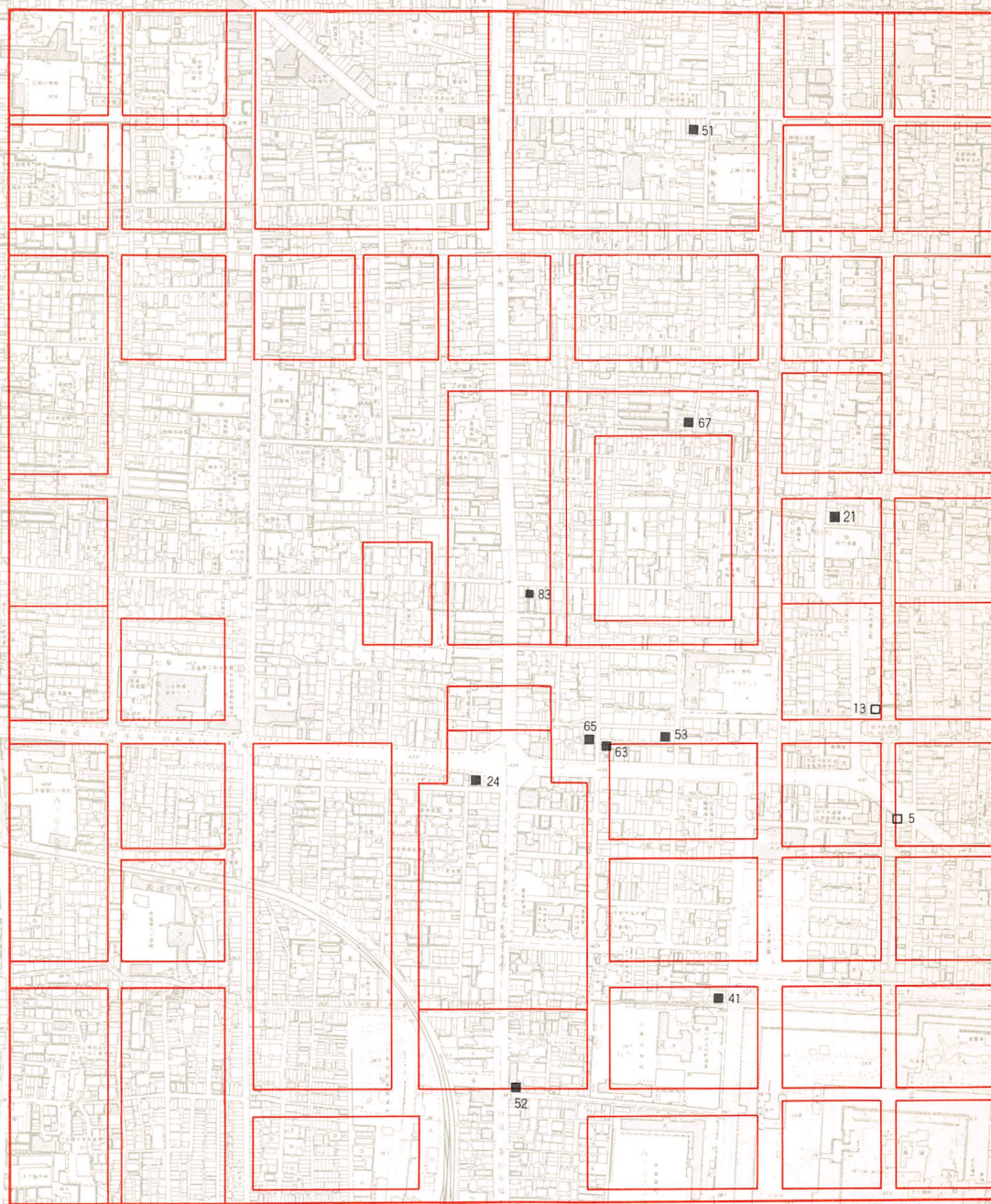
■ 4月～12月

----- 遺跡範囲

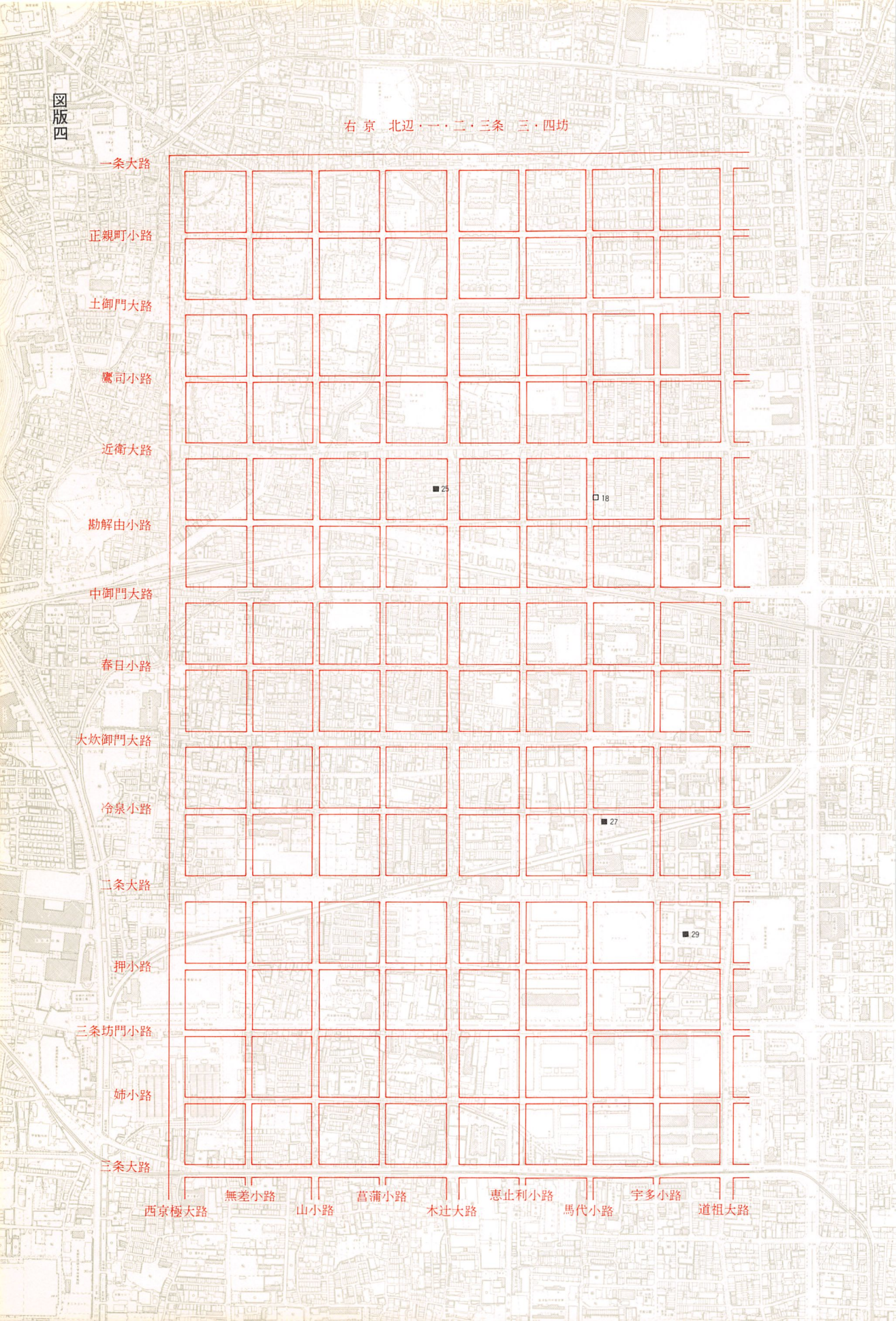


作図は九条家本・陽明文庫本による

平安宫



右京 北辺・一・二・三条 三・四坊



右京 北辺・一・二・三条 一・二坊

一条大路

正親町小路

土御門大路

鷹司小路

近衛大路

勘解由小路

中御門大路

春日小路

大炊御門大路

冷泉小路

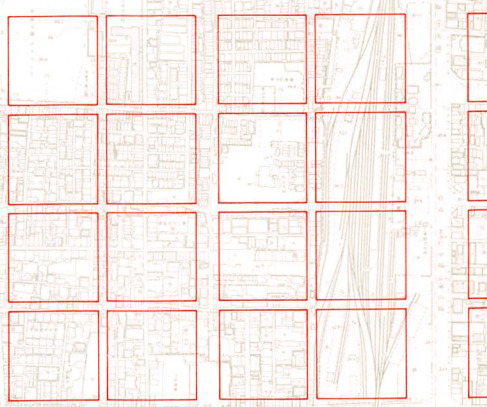
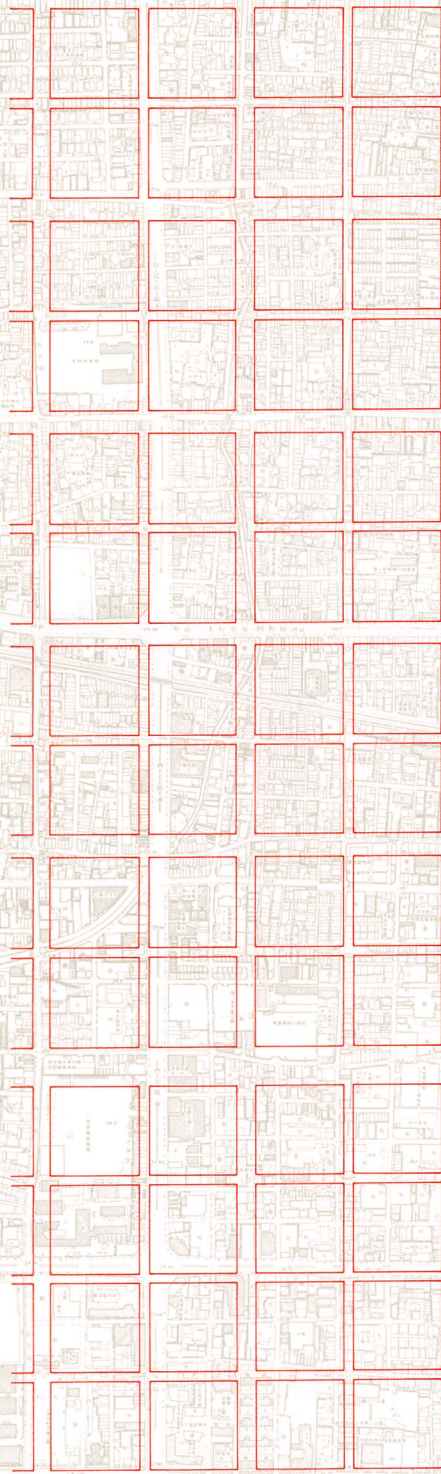
二条大路

押小路

三条坊門小路

姉小路

三条大路



道祖大路 野寺小路 西堀川小路 西鞆負小路 西大宮大路 西櫛笥小路 皇嘉門大路 西坊城小路 朱雀大路

左京・北辺・一・二・三条 一・二坊

一条大路

正親町小路

土御門大路

鷹司小路

近衛大路

勘解由小路

中御門大路

春日小路

大炊御門大路

冷泉小路

二条大路

押小路

三条坊門小路

姉小路

三条大路

朱雀大路

坊城小路

壬生大路

櫛笥小路

大宮大路

猪隈小路

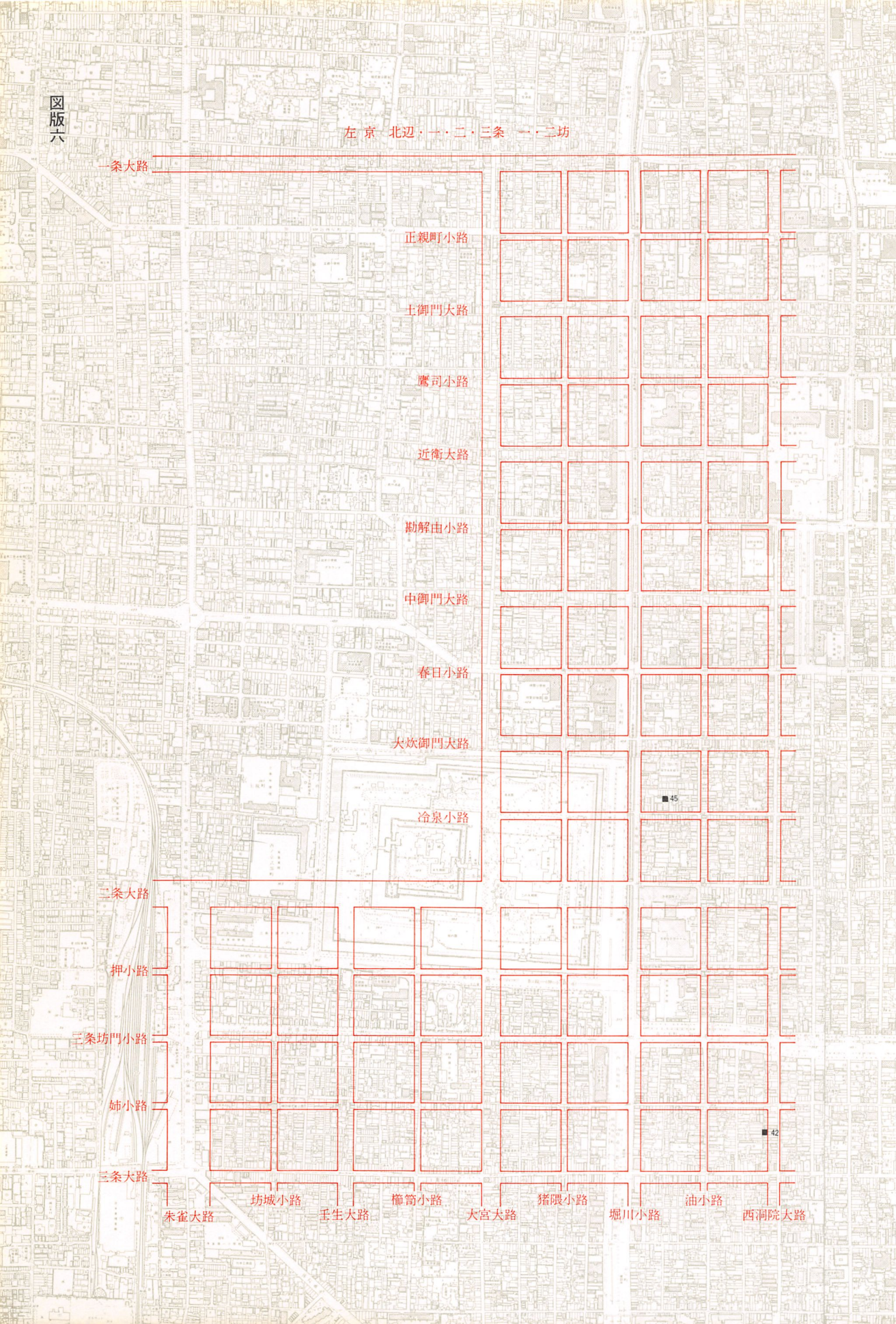
堀川小路

油小路

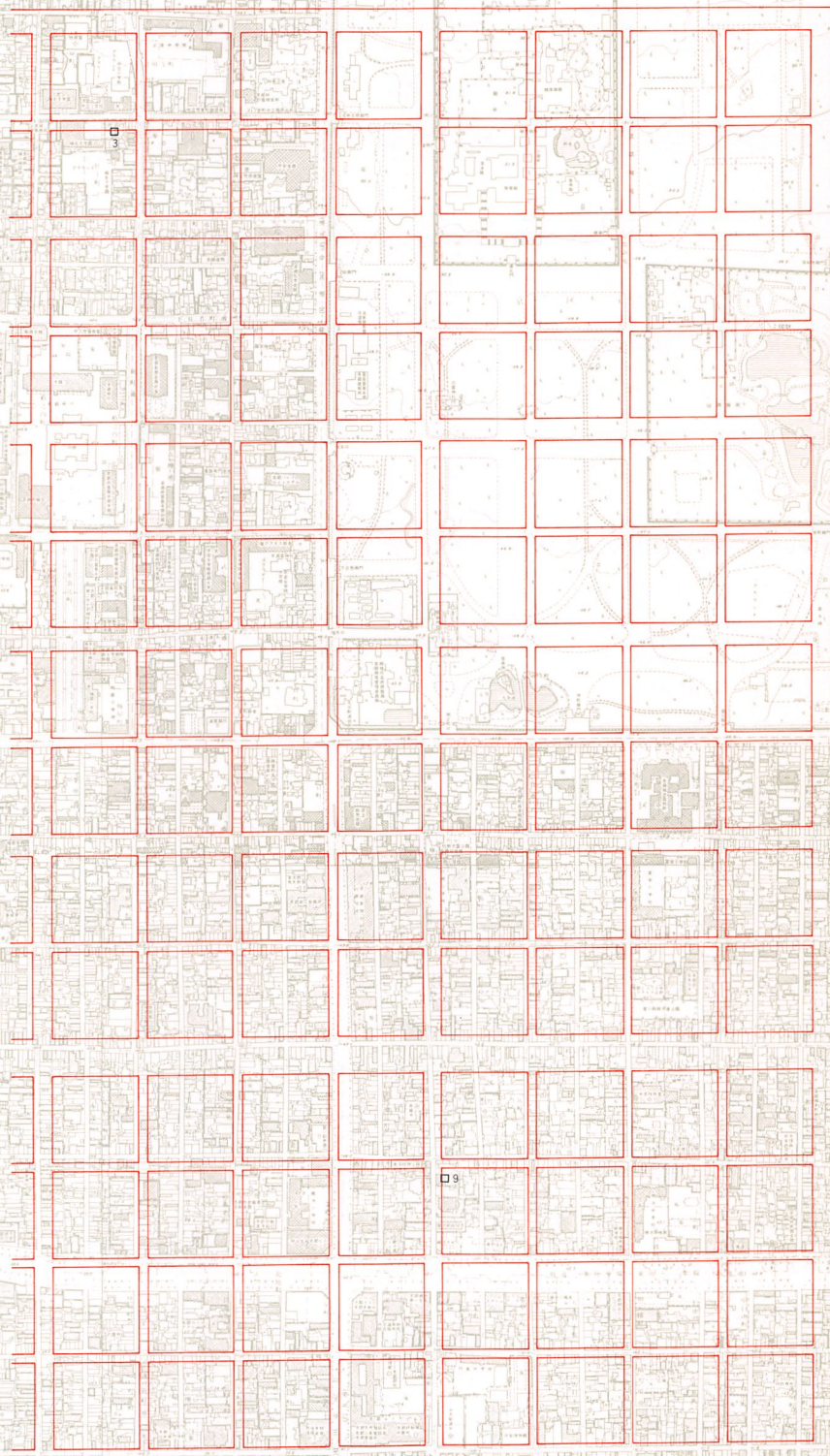
西洞院大路

45

42



左京 北辺・一・二・三条 三・四坊



一条大路
 正親町小路
 土御門大路
 鷹司小路
 近衛大路
 勘解由小路
 中御門大路
 春日小路
 大炊御門大路
 冷泉小路
 二条大路
 押小路
 三条坊門小路
 姉小路
 三条大路

西洞院大路
 町尻小路
 室町小路
 烏丸小路
 東洞院大路
 高倉小路
 万里小路
 富小路
 東京極大路

右京 四・五・六・七条 三・四坊

図版八

三条大路

六角小路

四条坊門小路

錦小路

四条大路

綾小路

五条坊門小路

高辻小路

五条大路

樋口小路

六条坊門小路

楊梅小路

六条大路

左女牛小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

無差小路

菖蒲小路

惠止利小路

宇多小路

西京極大路

山小路

木辻大路

馬代小路

道祖大路

■ 43

■ 36

■ 68

■ 40

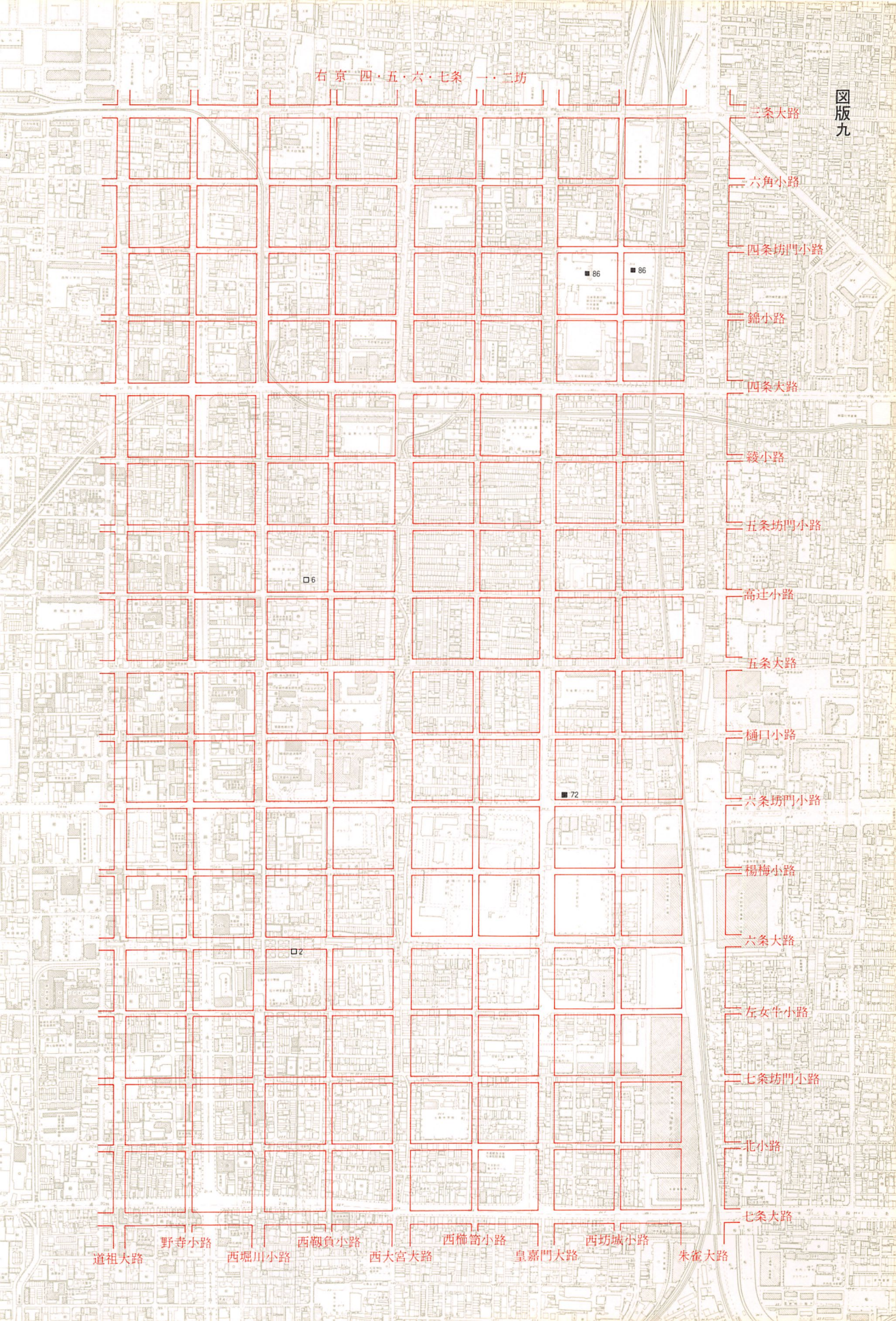
□ 1

□ 19

■ 50

■ 59

右京 四・五・六・七条 一・二坊



三條大路

六角小路

四條坊門小路

錦小路

四條大路

綾小路

五條坊門小路

高辻小路

五條大路

樋口小路

六條坊門小路

楊梅小路

六條大路

左女牛小路

七條坊門小路

北小路

七條大路

道祖大路

野寺小路

西堀川小路

西觀負小路

西大宮大路

西櫛笥小路

皇嘉門大路

西坊城小路

朱雀大路

6

66

68

72

左京 四・五・六・七条 一・二坊

図版
一〇

三条大路

六角小路

四条坊門小路

錦小路

四条大路

綾小路

五条坊門小路

高辻小路

五条大路

樋口小路

六条坊門小路

楊梅小路

六条大路

左女牛小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

朱雀大路

坊城小路

壬生大路

櫛笥小路

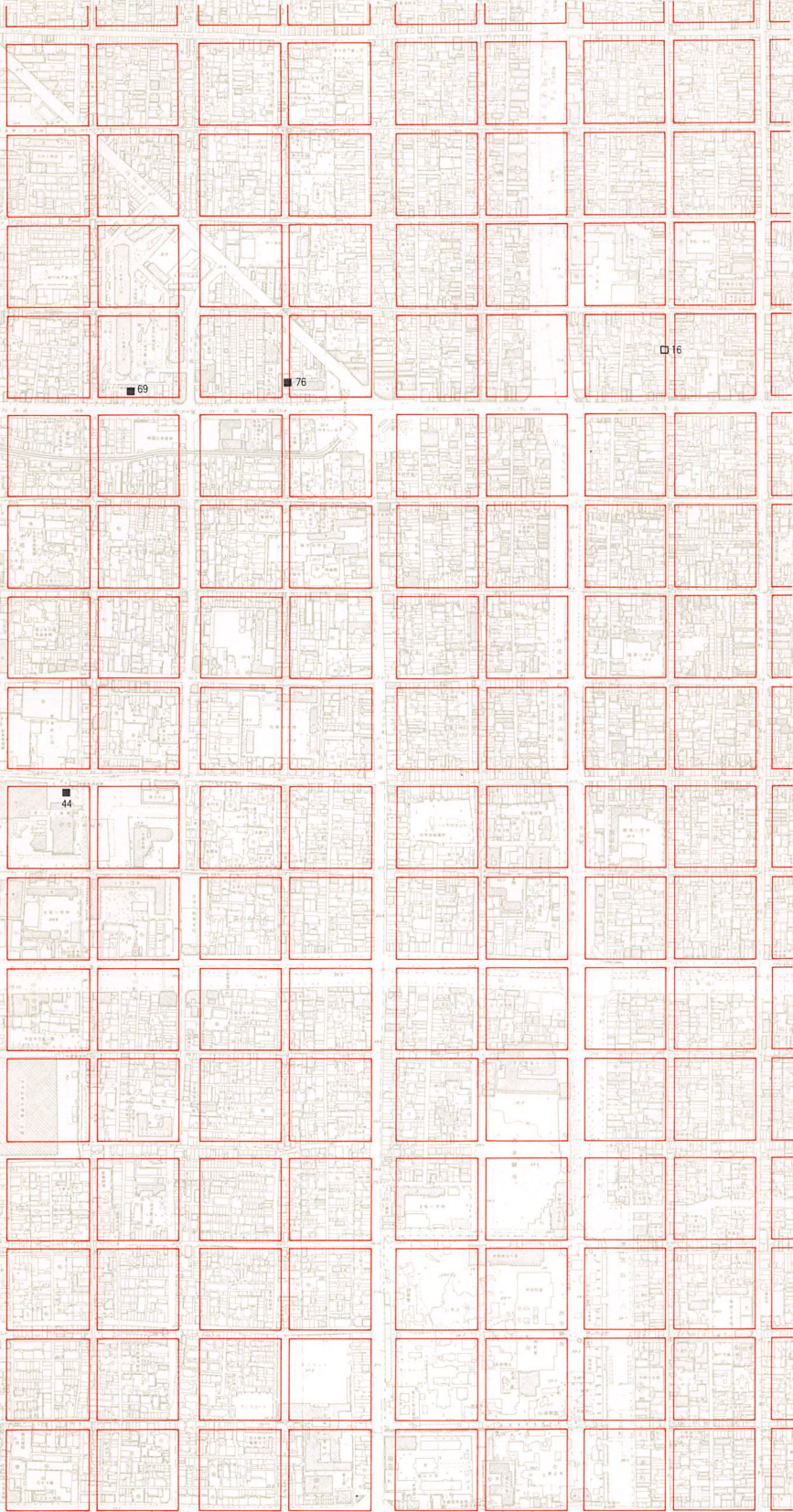
大宮大路

猪隈小路

堀川小路

油小路

西洞院大路



左京 四・五・六・七条 三・四坊

三条大路

六角小路

四条坊門小路

錦小路

四条大路

綾小路

五条坊門小路

高辻小路

五条大路

樋口小路

六条坊門小路

楊梅小路

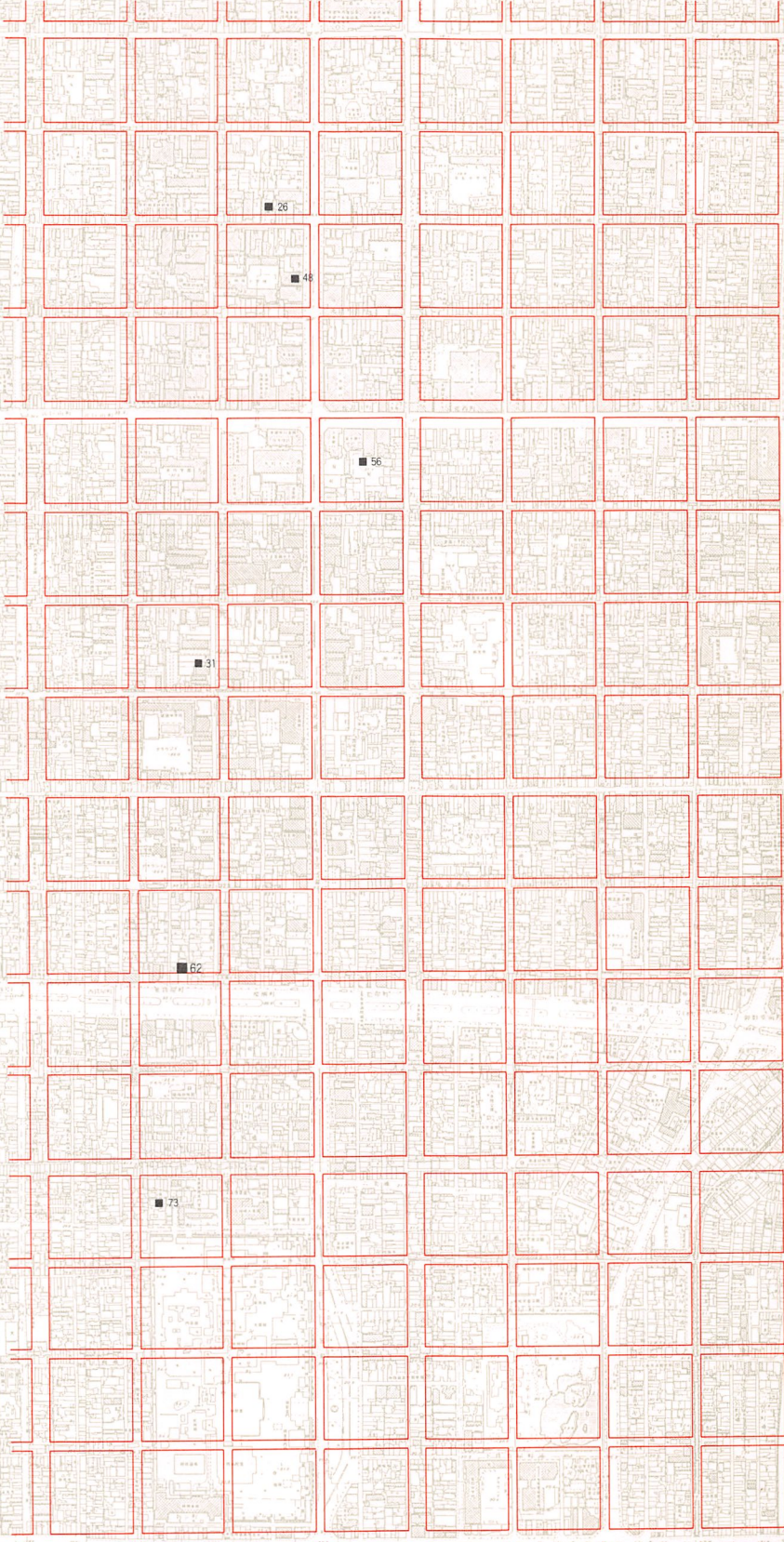
六条大路

左女牛小路

七条坊門小路

北小路

七条大路



町尻小路

烏丸小路

高倉小路

富小路

西洞院大路

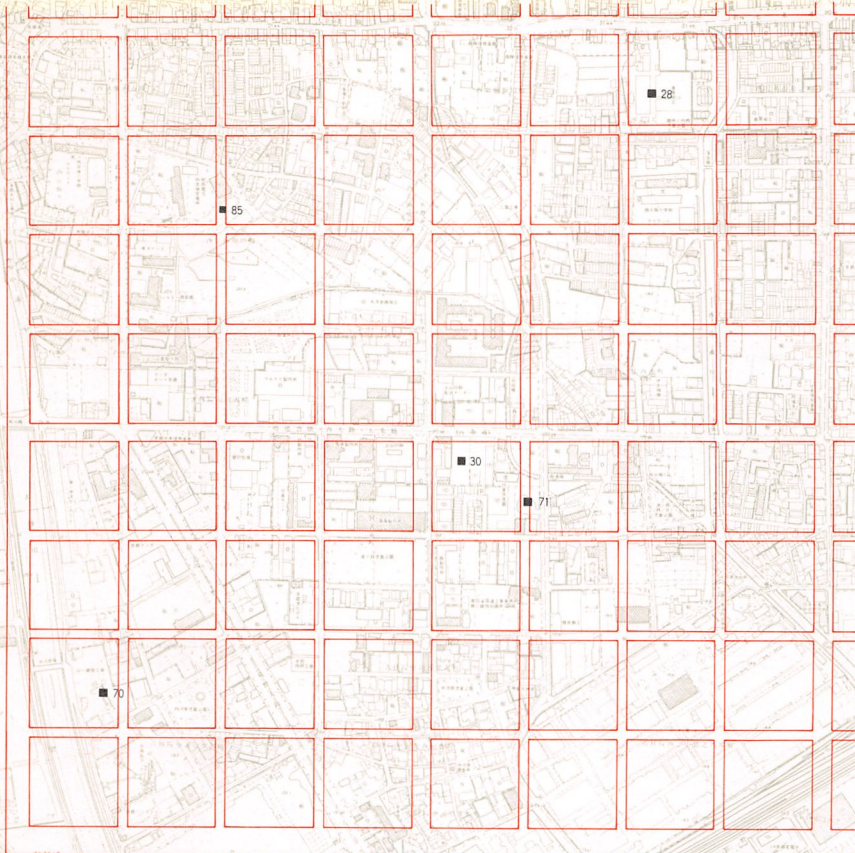
室町小路

東洞院大路

万里小路

東京極大路

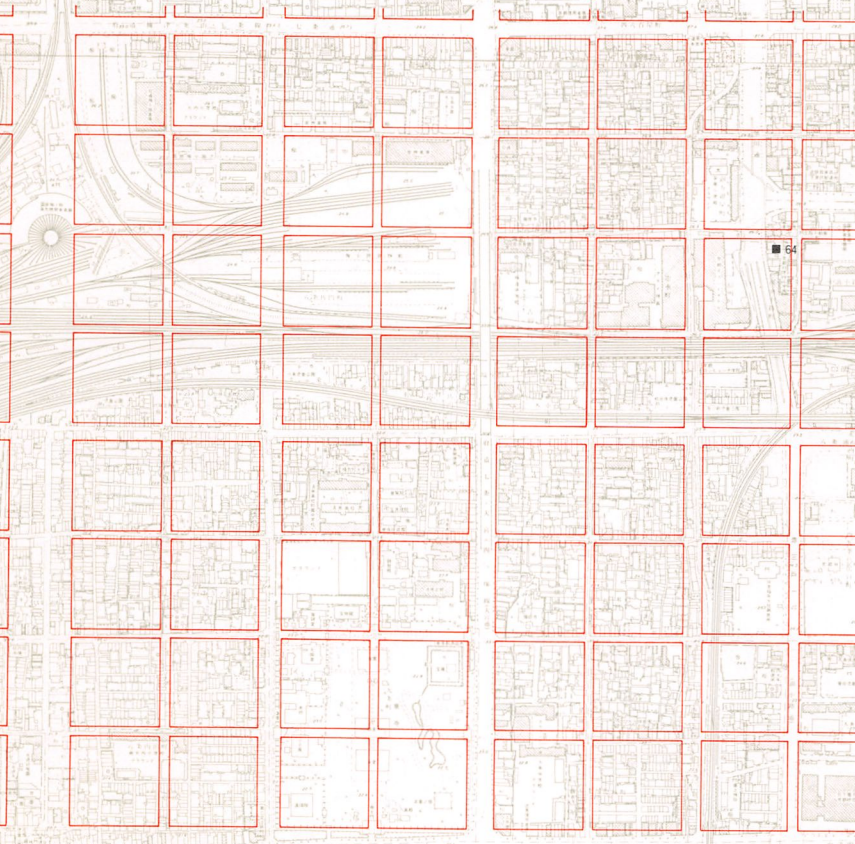
七条大路
塩小路
八条坊門小路
梅小路
八条大路
針小路
九条坊門小路
信濃小路
九条大路



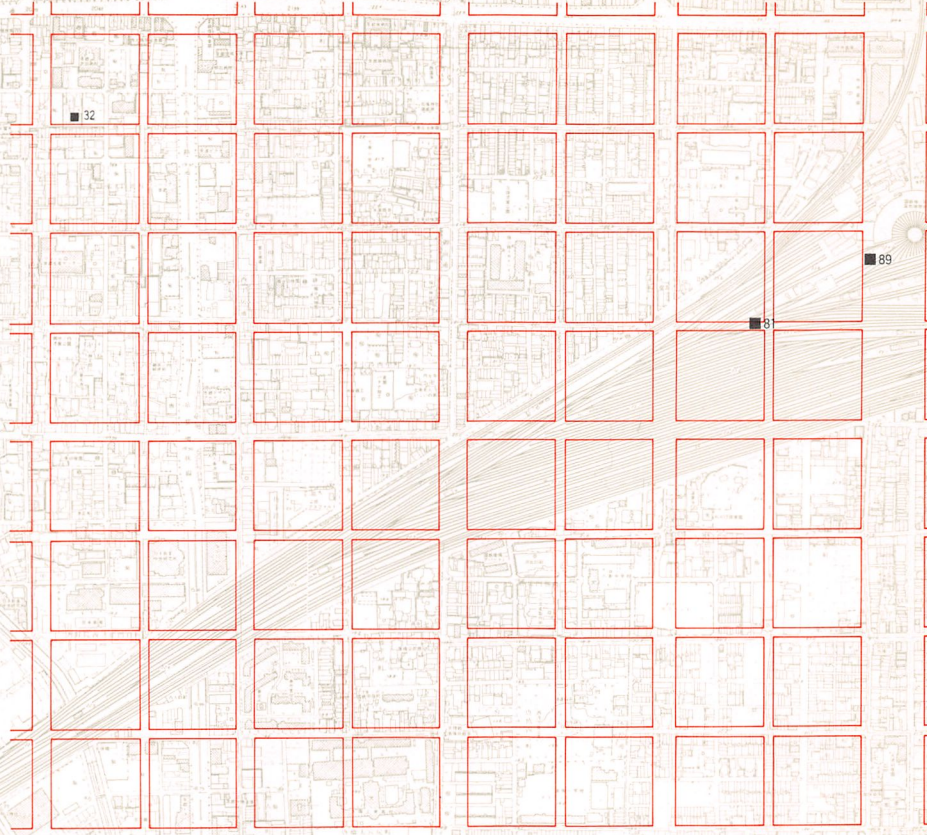
西京極大路 無差小路 山小路 菖蒲小路 木辻大路 惠止利小路 馬代小路 宇多小路 道祖大路

左京 八・九条 一・二坊

七条大路
塩小路
八条坊門小路
梅小路
八条大路
針小路
九条坊門小路
信濃小路
九条大路

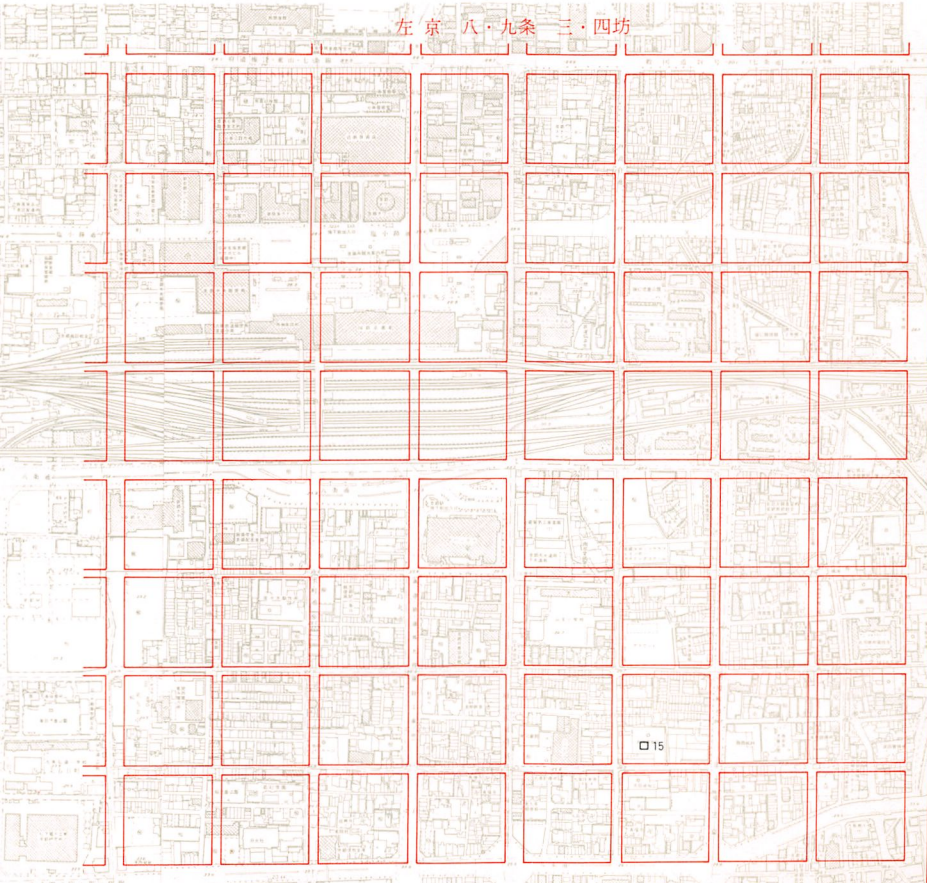


朱雀大路 坊城小路 壬生大路 櫛笥小路 大宮大路 猪隈小路 堀川小路 油小路 西洞院大路



七条大路
塩小路
八条坊門小路
梅小路
八条大路
針小路
九条坊門小路
信濃小路
九条大路

道祖大路 野寺小路 西堀川小路 西鞆負小路 西大宮大路 西櫛箭小路 西坊城小路 皇嘉門大路 朱雀大路



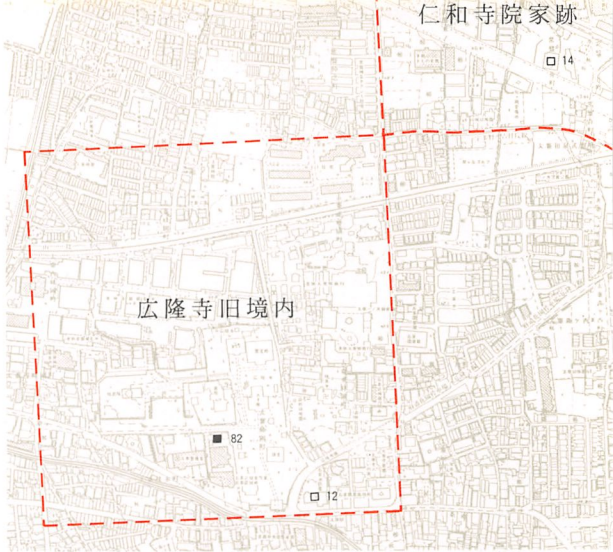
七条大路
塩小路
八条坊門小路
梅小路
八条大路
針小路
九条坊門小路
信濃小路
九条大路

西洞院大路 町尻小路 室町小路 鳥丸小路 東洞院大路 高倉小路 万里小路 富小路 東京極大路



西野町遺跡

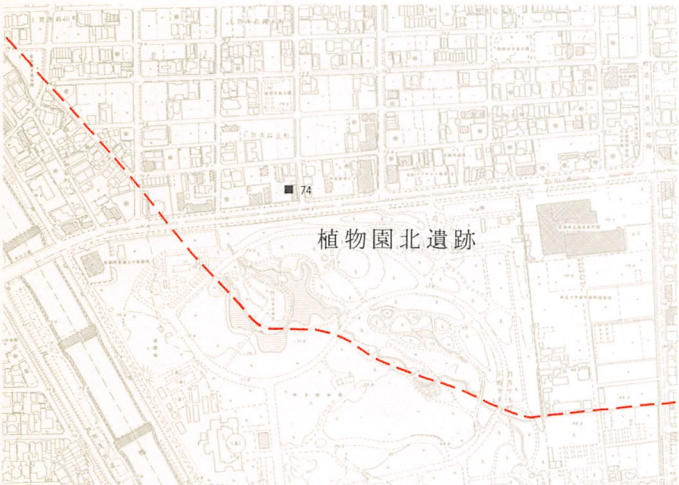
■ 58



広隆寺旧境内

■ 82

□ 12



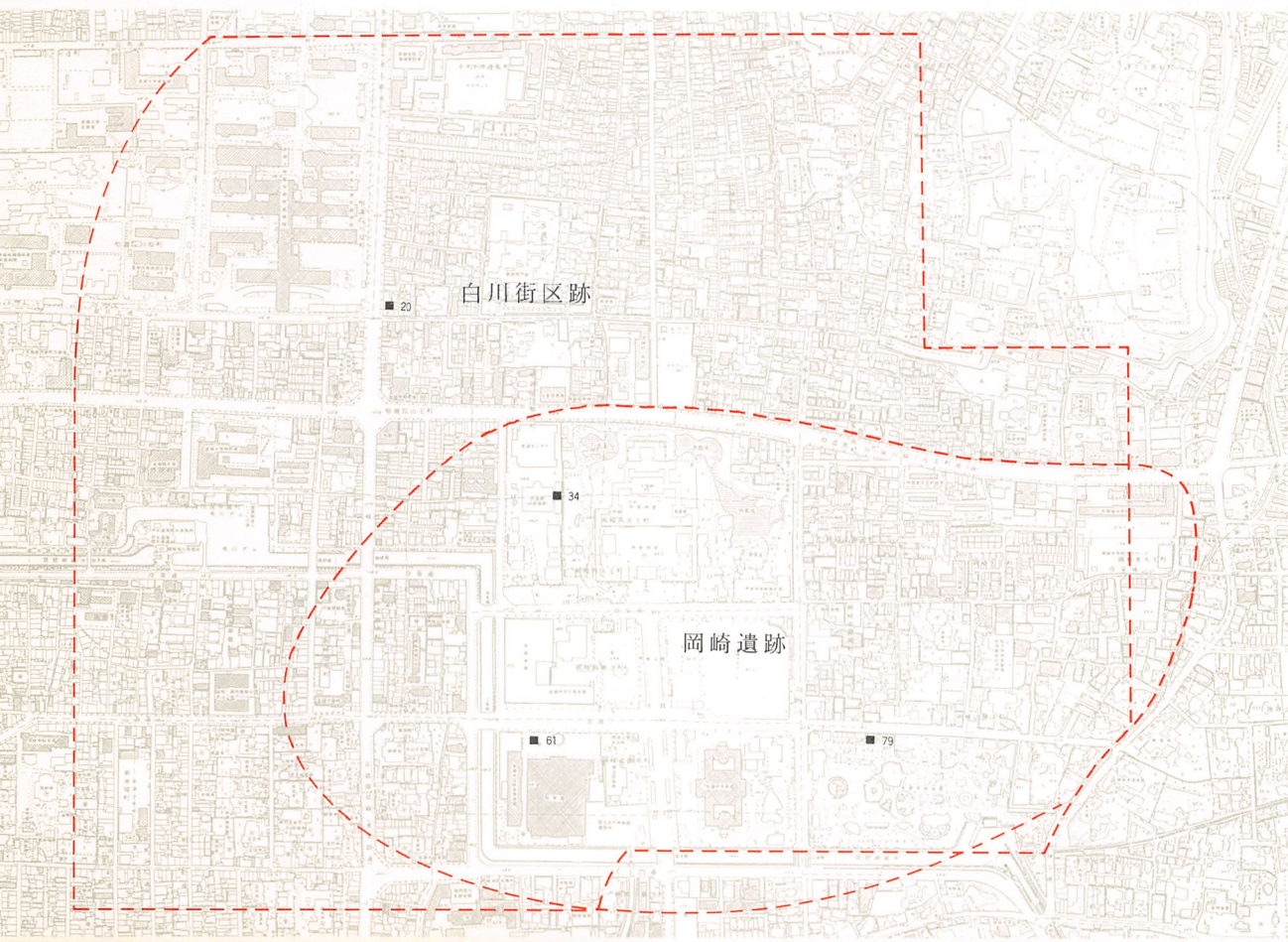
植物園北遺跡

■ 74



北白川廃寺

■ 38



白川街区跡

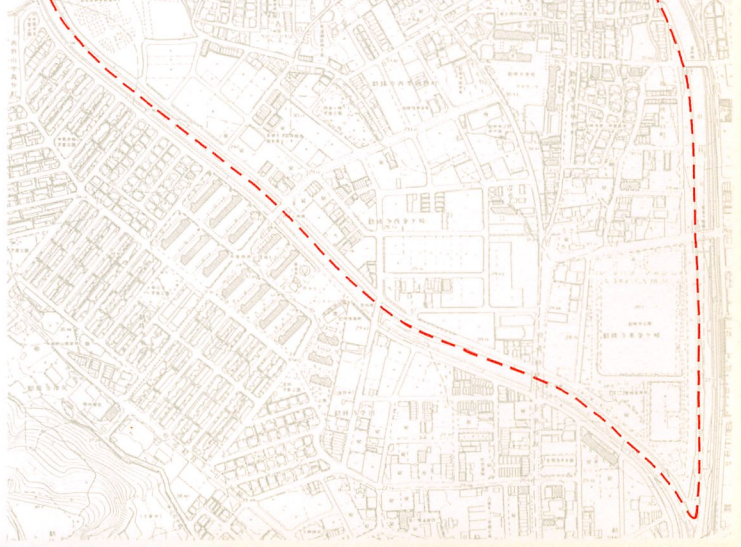
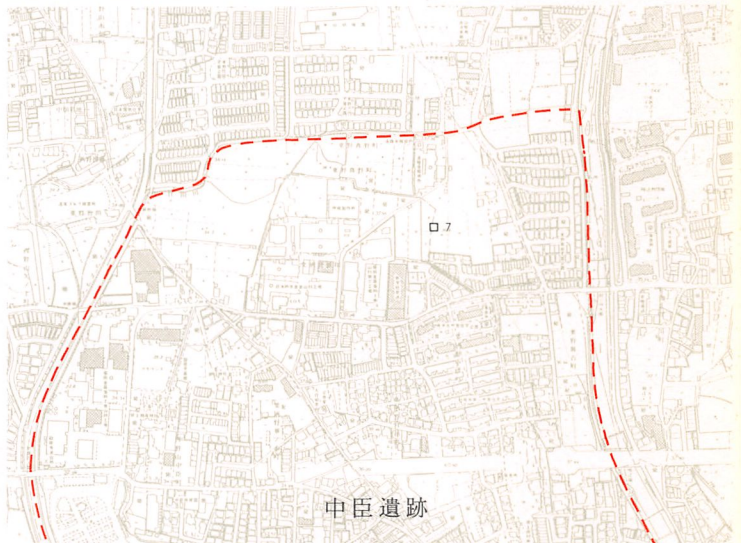
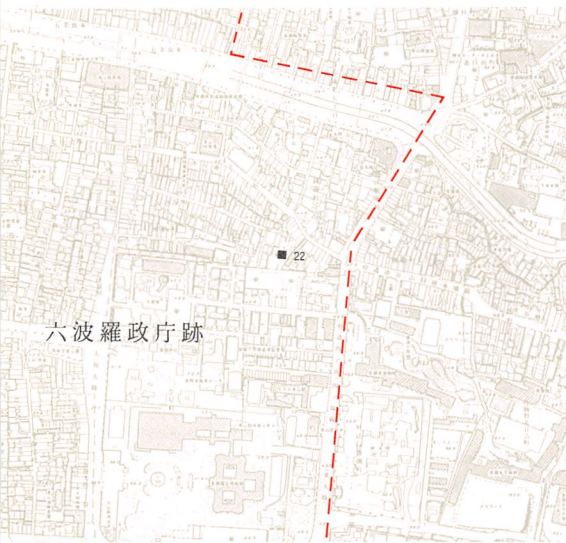
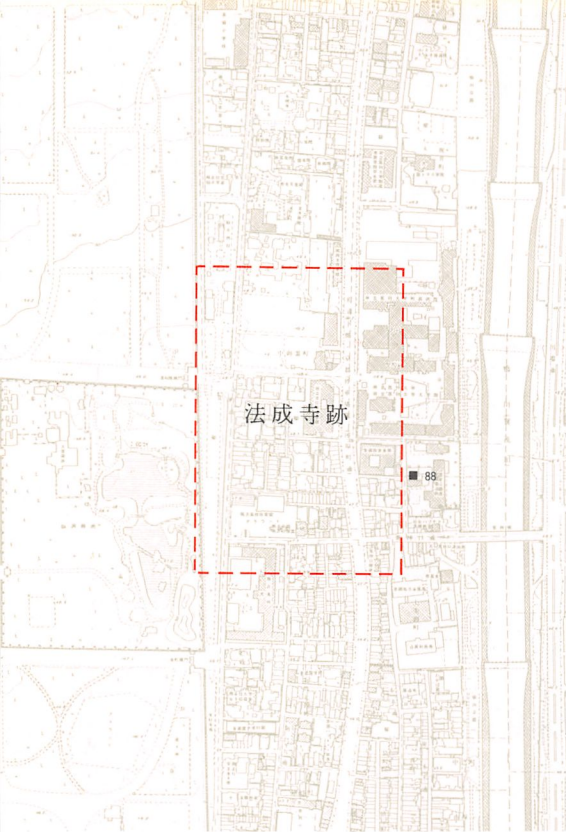
■ 20

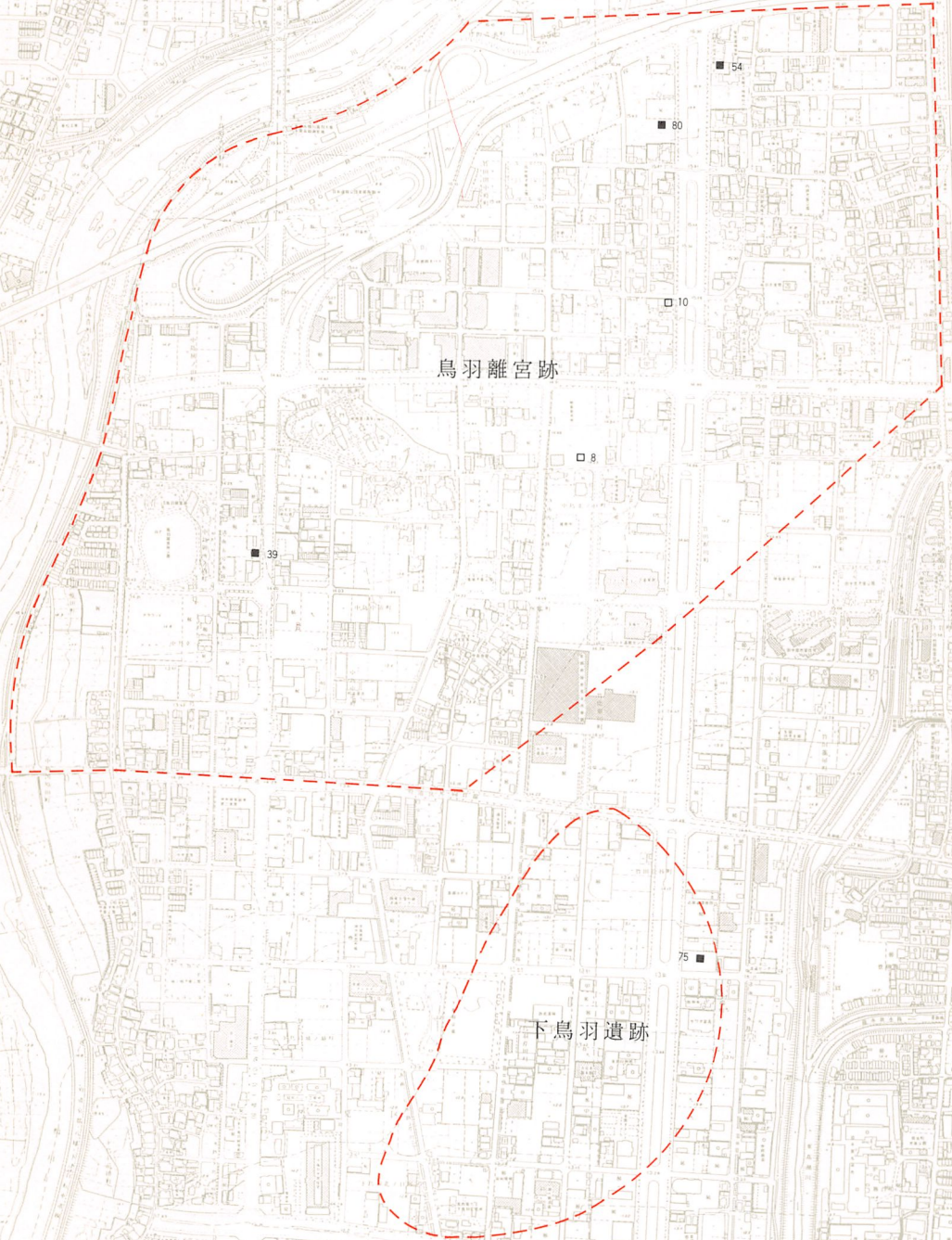
岡崎遺跡

■ 34

■ 61

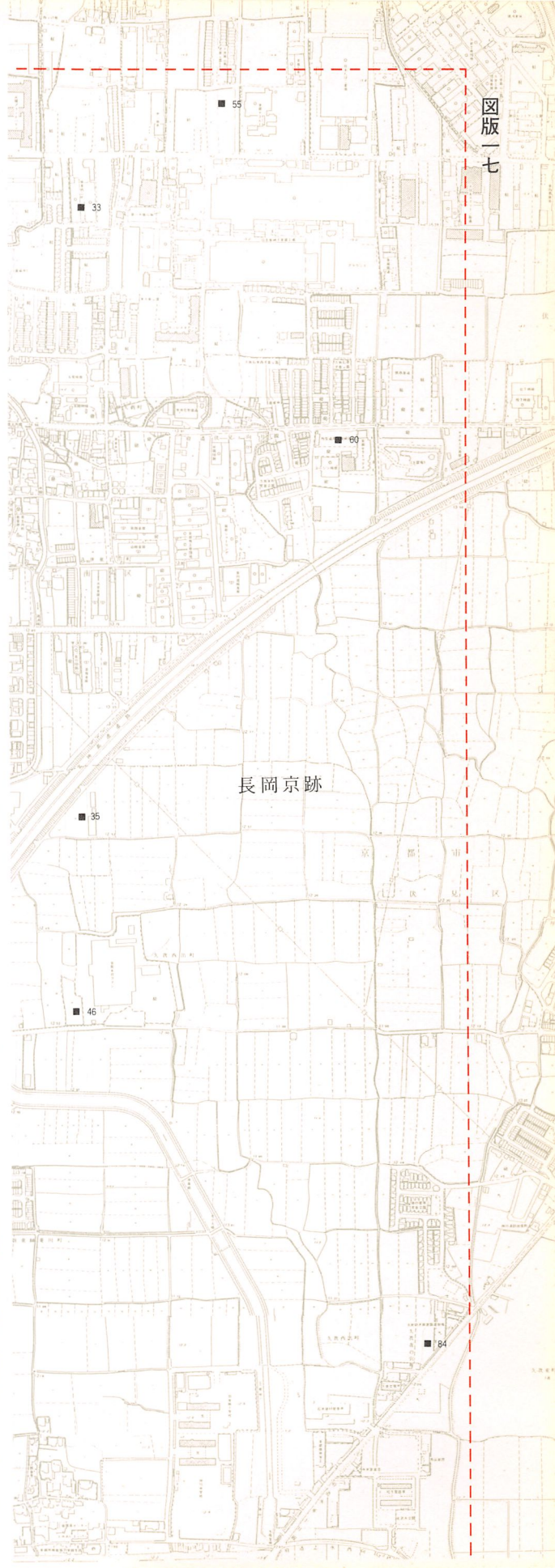
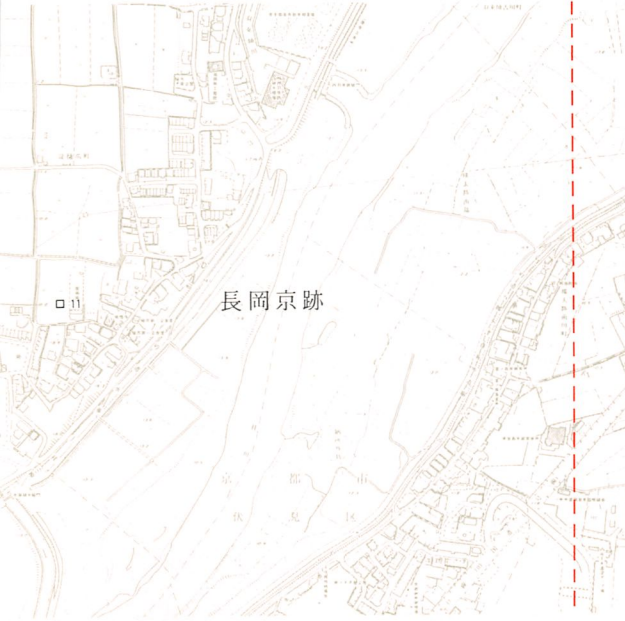
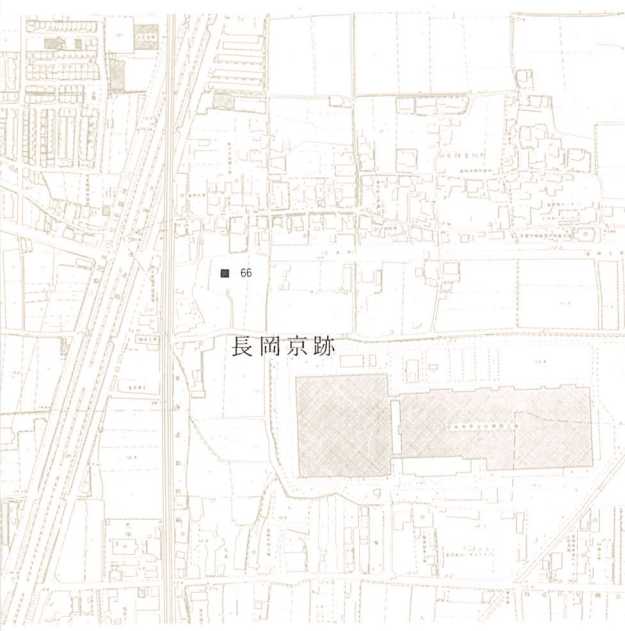
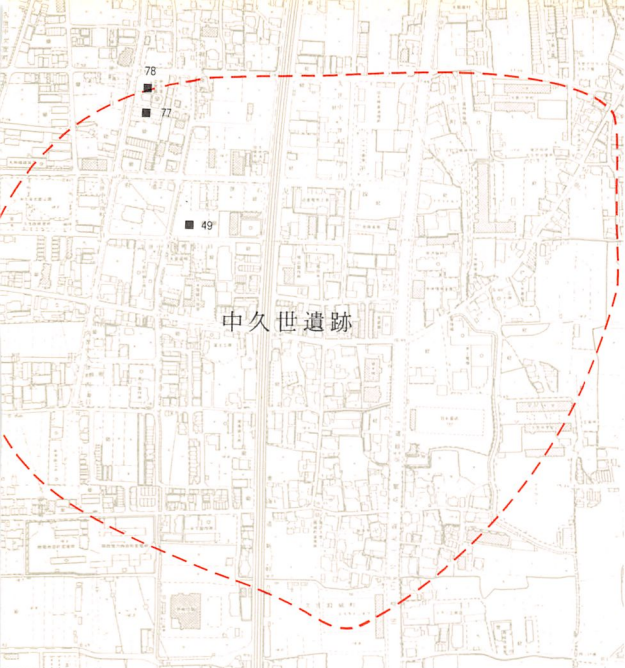
■ 79





鳥羽離宮跡

下鳥羽遺跡



京都市内遺跡試掘調査概報

平成3年度

発行日 平成4年3月31日
発行 京都市文化観光局
編集 京都市埋蔵文化財調査センター
住所 京都市上京区今出川大宮東入元伊佐町265-1
TEL (075) 441-5261
印刷 真陽社